
虚しい心～恋姫†無双～

KOF

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚しい心〜恋姫†無双〜

【Nコード】

N9514P

【作者名】

KOF

【あらすじ】

ある少年がいた。心は虚しく、空しい……。そんな少年はある武術を習っていて、ある女性のもとで育てられた。少年の心は虚しかった、空しかった……。そんな少年はいろいろあって聖フランチェスカへ……

今、虚無な少年の旅が始まる・・・ お気
に入り件数200件突破！いやっほおおおおおい！感謝感
激雨霰！

1話：虚無の少年、主人公との邂逅（前書き）

はっはっは、やっちゃったぜ。まだ完結してないのに、二本目・・・
・もう片方も質を落とさないように頑張りますので、どうかよろしくおねがいします！

では、あらたな物語を、どうぞ！

1話：虚無の少年、主人公との邂逅

・ 一人の少年は、銀行にいた。生活費をおろすために。しかし……

パン！

「おら！金出せ！死にたくなかったらなあ！」

「ひ、ヒイ！」

大勢の人がおびえていた……一人を除いて……

「動くんじゃねえぞ！妙な真似してみろ？一人ずつぶっ殺してつてやる！」

完全に頭がイっている男に近づく白い影が……

「……ああん？なんだ？動くなつて言つたよなあ？」

その白に向けられる銃口

「どいてください……邪魔です」

しーーーーーん

「なにいつてやがんだ？死にてえのか？」

カチャ

すると少年はおもむろに銃に手を伸ばし・・・取った

「これが・・・ですか？」

少年は自分の右の掌に銃口を向けると

パン！

「な、なにしてんだ？」

「・・・・・・・・たしかに、痛いですね？けど、それだけの様です・・・・・・・・」

少年の目が強盗を射抜く

「はい、お返しします。どいて・・・・・・・・下しますか？」

強盗は棒立ち。その眼は、人を見るものではなかった・・・・・・・・しかし・・・・・・・・

「どくわけねえだろおおおおおおおおお！」

その白に今にも死を放とうとする男

「・・・・・・・・師匠には、使うなと言われているのですがね？・・・・・・・・・・・・・・・・」

パン

放たれる死。白はそれを避け……

「『双極』」

ドンッ

「ぐあ……」

崩れ落ちる男……

「……僕は、読みたい本があるんです。邪魔、です……」

」

少年は、そう呟いた……

□

□

ある朝、銀行に強盗が入ったというニュースが流れた。しかし、どこからか白い人が現れ強盗を倒したそうだ

「へえ、すごい奴もいるもんだな」

「かずぴー？早くしないと遅れるぞ？」

「分かってるって」

俺の名前は北郷 一刀。そこでこいつが……

「ほらゝはやくしなつてかずぴゝ！」

……うざい奴が及川。同級生だ

「なあ、及川。今朝のニュースみたか？」

「みたみた、強盗を白い人がぶつたおしたやつやる？」

「ああ」

「あれって、こちら辺の近くだよね？」

「……え？そうなのか？」

「かずぴゝ、ちゃんと見ようよ」

「はは」

「けどその人って、いつの間にかいなくなつてたんやろ？」

「らしいな」

「さらに、倒す前に自分の掌に銃をぶつ放したとか」

「マジで？」

「世の中いろんな人がいるもんやね？」

「気にしてやああああああ!!」

後ろからなんか聞こえたが気にしない

又ツ……

「な！」

いきなり目の前に白い何かが

「ちょ、ごめええええええん！」

ドッゴーーーーーン

その白い影もろとも校門の中へ

バタンツ

「な、何とか間に合ったみたいだな？」

ムクッ

「あ、すまなかったな？大丈夫か？」

「大丈夫です……」

ぶつかった奴を見ると、特徴は白い髪、紅い眼だった……ん
？白？

「はい、及川遅刻な？いいから、席に就け」

「・・・・・・・・うい・・・・・・・・」

及川・・・・・・・・どんまい

「お前、あとでおぼえておけや？」

「無理^^」

「はい静かに。はいつてきていいぞー」

ガラリ

入ってきたのは・・・・・・・・

「なんだ、お前だったのか」

「ん？なんだ、北郷、知り合いか？」

「いや、朝・・・・・・・・会っただけです」

「そうか・・・・・・・・ま、自己紹介でもしてくれ」

「福岡からきました、本多 白びやくです。よろしくおねがいします・・・・・・・・」

ザワッ

男子生徒A「あいつ、髪が白いぞ」

男子生徒B「右手に包帯って……」

女子生徒A「か、かわいい!!」

女子生徒B「不思議……」

特徴は白髪。紅眼。そして右手に包帯……まさか……

「え」と席は……そうだ北郷、お前朝に会ったのなら面倒見てやれ。あの、イケメンっぽいやつ隣の」

テクテク

「よろしくお願いします。北郷 一刀君……」

「あ、ああ……」

「なんや?ごっつかわええ子やな?仲良くしてや」

「いや、そんなことより、あの強盗事件。もしかして、お前が……」

気になっていたことを聞いてみる

「……何のことでしょう?」

「あたりまえやろ?かずぴ」。こんなかわええ女の子がそんなk
「僕は、男ですよ……」なん……だと?」

お、男？

女子生徒A「え？まさか男の娘？かわいいiiiiiiiiiii！」

女子生徒B「たべちゃいたあああああい！」

「変なこと聞いて悪かったな。よろしくな?白」

「よろしくな」

「……よろしくおねがいします……」

「けど、その掌どうかしたのか？」

「……かすり傷です。ただ、細菌が入ってはいけないので……」

「そっか」

不思議な感じだな・・・なんか、柳みたいだ・・・

☐☐

昼休み

女子生徒A「ねえねえ、白くんって彼女とかいるの？」

女子生徒B「ねえねえ、たべちゃってもいい？」

女子生徒C「白君ってどんな女の子がタイプ？」

「すごい人気やな」

「そうだな」

「当の本人は、持ち込んだ枕で爆睡してるんやけどな」

「そうだな」

「ちょ、受け答えがそうだなだけってさびしいよ？」

「そうだな」

「かあああずぴーーーーー!!!!!!」

本当に凄い人気だな。女子ってあーゆー男が好きなんだろう？俺も彼女欲しいな

「北郷、ちょっといいか？」

「ん？なんですか先生」

「本多についてなんだが、放課後でもなんでもいいから学校の事

案内してやってくれないか？」

「ん、いいですよ」

「そうか、よかった。じゃ、たのむぞー」

「はい」

「かずピーも人がいいね？」

「ふふふ、そうだろう」

「すすす．．．．．」

女子生徒一同「かわいいいいいいいいい！！」

「は、ははは」

白の人氣に苦笑いするしかなかった

□

□

放課後、全ての授業で寝続けた俺は元気いっぱいだ。白の方は、授業中は起きていて、休み時間になるとすぐに寝出すという感じだ

「白、今から学校を案内するから」

「おいらもいつしよだよ」

「つと、その前に剣道部に寄ってもいいか？有原先生に部活やすむっていわなきや」

「はい」

剣道部

「先生」

「なんだ？今日は遅かったじゃないか」

「実は・・・かくかくしかじか・・・」

「そうか、いいぞ。まあ案内する時剣道部も、思いっきり押してくれよ、な？」

「はいはい」

「それで？どいつが転校生だ？」

「僕です」

横にならぶと、結構背高いんだな。170ぐらいか？

「なんだ、女じゃないか。女に用はな」僕は、男です……」
ま、まじで？」

「はい」

「だったら、食べてもいいか？」

「????」

「かあああわいいいいいいいいいい！」

ああ、先生も白の餌食に

「いや、ダメだ。落ちつけ私。私には北郷が……」

「なにいつてんですか。ほら？行くぞ白」

「はい」

「北郷のいけず」

後ろでなんかブーたれてるのはほっという

「どこから回りたい？」

「どこでも……」

「そっか。なら、美術部から行くか？」

「はい」

ほんと、女っぽいな

「????どうかしたんですか?」

「い、いやなんでm「あら?かずピー?なんかいやらしい」と
うるさいぞ!」

心を読むなつての

「早く、行きましょう?」

「あ、ああ」

□

□

部活も一通り紹介し終わると、もう七時だった

「今日はもう遅いし、続きは明日でいいか?」

「はい、ありがとうございました」

「ふふふ、この及川様の実況はおもしろかったかな?」

「はい」

「そうかそうか。なっはっはっはっは」

「白、いいか？こーゆーふうにウザくなった時はぶっ飛ばしてもいいんだぞ？」

「はい」

「ちょ、かずピー酷い！」

「はっはっはっは」

そのあと白と別れて、帰宅した……

□

□

プルルルルルピッ

「もしもし」

『おお！白か？』

「師匠ですか」

『白君、君いきなりあたしの約束破ったねえ？』

「なんのことでしょう？」

『人前で技を使うなって言っただでしょうが、もう』

「・・・どうして、しっているんですか？」

『そりゃあもう、全国区でニュースになっちゃってるよ？あの強盗を倒したの』

「・・・強盗？」

『はあゝほら、昨日君がぶっ飛ばした男のことだよ』

「あれは、僕が銀行から出ようとしたのを妨げたから道をあけてもらっただけです」

『はあゝ・・・ま、いつか。白』

「なんでしょう？」

『学校は楽しいか？』

「楽しい？」

『ワクワクしたり気分が高揚したりすることはないか？』

「・・・・・・・・？」

『じゃあ、親しくなれそうな奴はいるか？』

「・・・・・・・・一応・・・・・・・・」

『そうか・・・・・・・・それが友達だ、仲良くしろよ？』

「・・・・・・・・善処します・・・・・・・・」

『はっはっは。そうか・・・・・・・・元気で、やってけよ？』

「・・・・・・・・ありがとうございました。師匠も体を大事に・・・・・・・・」

『はっはっは、君の口から労わりの言葉が出てくるとはな、明日は吹雪かな？』

「きります・・・・・・・・」

『ああ、じゃあnプツ・・・・・・・・ツーツー・・・・・・・・』

眠いな・・・・・・・・帰ろう・・・・・・・・

1話：虚無の少年、主人公との邂逅（後書き）

どうでしたか？もう片方の作風とはだいぶ変わっていると思います！こっちは余裕があるときに書きたいと思っているので、不定期になると思います。けど、頑張るので、作者には頑張るしかできないので、よろしくおねがいします！

2話：本多流掌術（前書き）

オリ拳法名・・・・・・・・ださいかな？

では、どうぞ！

2話：本多流掌術

朝、いつも通り布団とボンドでひつついているかのごとく、離れない
ブルルルブルルルブルルル「ピッ

「……………もしもし……………」

『あつさだよ？白君？愛しの師匠からのモーニングコールだ』

「……………おはようございます……………」

『おっはよ〜。ほら朝はもっとしゃきつと〜』

「無理です……………」

携帯の時刻を見るとまだ6時、二度寝するにはちょうどいい時間だ

「師匠、ねます……………」

『だ〜めだよ〜』

「おやすみなさい……………」

『子供のころの恥態、ばらしちゃおっかな？』

「……………」

その顔には一部の焦りもなく、本当にどうでもいいと思っているよ

うだった

『ほんと、からかいがない子だね？君は．．．遅れないように学校に行くんだよ？部活にも入るんだよ？』

「はい。師匠も門弟の方たちと修行があるでしょう？けがをしないようにしてください」

『まゝた私を心配するような言葉が出るとは、今日は槍でも降るのかな？』

「貴女だったらふらせれるでしょう？では．．．．．」

『じゃね〜プツ．．．ツーツー．．．』

パタン．．．．．

「．．．．あと、三十分．．．．す〜す〜．．．」

□

□

ガバッ

「おはようございます」

「え？ちよ、またまたごめええええええええん！！」

ドッコーン……

カーンコーン……パタン

ムクッ

「ふー今日は何とかおいらもまにあったぜえ」

「ごめんな？白」

「こちらこそ、すみませんでした」

女子生徒A「きゃあああああ北郷君が白君をおそってるっつっつ
うっつっつっつっつー！」

女子生徒B「最初っからねらってたんだわ！」

「こら！女子、変なこと言っなよ／＼／＼」

「……………？」

「な、なんやて、まさかのかずピーホモ説！！？」

「……………スッ……………」

「ちよ、無言で竹刀を取り出すのは、やめて？」

くん

「いえ、結構です」

白は白で女子がどんな事をしようとも眉一つ動かさない

「ほあ、すごいいろいろな意味で」

「やな」

「・・・・・・？」

女子生徒B「ねえねえ？白君の趣味って何？」

「・・・・・・読書と釣りです・・・・・・」

女子生徒A「意外ね？なんかこう、もっとふわふわした感じのかとおもってた」

おいおい、何だ？その抽象的な表現は

「なあ、白」

「なんでしょう？」

「部活、はいるのか？」

「はい、空手部に入ろうかと」

「「「「「・・・・・・へ？」「」「」」

空手？・・・白が？

「だ、大丈夫なのか？」

「たぶん大丈夫です」

「そつか・・・ん？どうしたんだ？みんな？」

周りを見るとまだみんな固まっている・・・そんなに衝撃的だったか？

キンコーンカーンコーン

「お、午後の授業始まるな。五時限目は・・・体育か」

□

□

「え、今日は100メートル走だ。二人ずつ出席番号順な？じゃあ、並べ」

え、たり

マジで

めんどく

「出席番号順ってことは白と一緒にか」

「びゃつくんもかわいそうやな〜？かずピーといっしょやなんて」

「???」

「かずピーめっちゃ足早いんよ。それこそ、オリンピック選手並みに」

「そう、ですか……」

「ま、これも運命だとおもってあきらめ〜」

まゝた及川の馬鹿は余計なことを

「次、北郷と本多〜」

ん？なんかみんなの視線がこっちを向いたような……気のせい
いか

「位置について〜よいパンツ」

ダッ

最初っから全力だ！みるみる内にゴールが近づいてくる……そして……

どよッ・・・・・・・・

「カチッ・・・・・・・・驚いたな・・・・・・・・北郷とほぼ同じだ」

「え！！？」

横を見ると涼しそうな顔で上を向いている白の姿が・・・・・・・・

「びゃつくんすげえええええ！かずピーとほぼ一緒とかマジパネエ」

「白、お前どつかでなんかやってたか？」

「・・・・・・・・こちらに来る前に、武術を・・・・・・・・」

「そつか・・・・・・・・なんて武術？」

「・・・・・・・・本多流掌術です・・・・・・・・」

「本多？ということは・・・・・・・・もしかして現当主？」

「いえ、次期です・・・・・・・・」

ぽか――――――ん

これが開いた口がふさがらないというやつだろうか？こんな線の細い男の娘が？・・・・・・・・それにしても、本多流掌術・・・・・・・・聞いたことないな

「こらそこへ走ったらちゃんと並んで置け」

「すみません」

なんか、こいつにはビックリさせられるばかりだな……………

「次のやつ並べ」

□

□

放課後

「じゃ、俺たち部活あるから、また明日な」

「さようなら……………」

今朝、白は師匠に言われた通り部活に入ることにした。そう、言われたから……………

「これに、書けばいいのか……………」

住所、氏名、学年、クラス、それらを順々に埋め書き終え、先生のところに出しに行った

「ん？本多、お前空手部に入るのか？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「そうか・・・・・・・・まあ、100メートル走も早かったし、大丈夫だろう。ほれ、柔道着は一時貸しだから、見学にでも行って来い」

「ありがとうございました・・・・・・・・失礼しました」

その顔は無表情。ただ、空しく、虚しく、前方を見据えるだけだった・・・・・・・・

武道場

「今日から、入る、本多 白です。よろしくおねがいます・・・」

「と、いうわけだ。まあ、仲良くしてやってくれ。ところで本多、お前武術経験は？」

「・・・・・・・・すこしだけ・・・・・・・・」

「ふん、どうせ坊ちゃん拳法でしょう？」

「こら、前田、悪口はよくないぞ」

「・・・・・・・・フンッ・・・・・・・・」

「はあ、とりあえず練習始めるぞ。準備体操からだ」

いち・にい・さん・しい・ごお・ろく・しち・はち

にい・にっ・さん・しい・ごお・ろく・しち・はち

・・・・・・・・・・・・・・・・

「今日は、全国大会でる奴決める試合やるから、各自好きなように練習してくれ。一応、本多もやるか？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「じゃ、第一試合は本多と「私にやらせて下さい！」前田くお前女子だろうが」

「すこし、イラッときたので・・・」

「はあ、骨折とかそういうのはよせよ？本多もいいか？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「じゃ、二人とも用意しろ」

前田 慶^ケ亜 プライドが高く男勝り。けど、女の子＞詳しくは、登場人物紹介でく

「準備できたか？」

「はい！」

「……はい……」

「じゃ、始め！」

「でりゃあああ！」

いきなりの回し蹴り（その眼には何故か殺意が混じっていたという）

スッ

それを一歩下がってかわした白は

「……………」

前動作なしの上段蹴り

「クッ！でりゃあああああ！」

それをなんとかかわした慶亜は突きの連打

ヒュボボボボッ

「『柳』」

柳を相手にしているような、全て受け流す

「『空破』」

白が正拳突きをする・・・すると

パァンッ

・・・空気が割れる音がした

「はらひりほろ」

無傷だが気絶している慶亜の姿が

「驚いたな・・・去年全国一位だったんだが・・・勝者・本多」

おおおおおおおおおおお！

「それで、応相談なんだが、全国大会に出ないか？」

「・・・・・・・・部活、やめます・・・・・・・・」

「・・・・・・・・え？」

「道着、お返しします。失礼しました・・・・・・・・」

「え？いつの間に着替えもそんなことより、え？」

その顔は、まるで興味のかけらもなく空間だけを見つめていた

「はあゝまた問題児が一人・・・・・・・・おい、だれか前田を保健室に連れて行ってやれ」

「うゝすッ」

「きゅ……」

□

□

次の日の昼休み

「おい！本多！もう一回勝負だ！」

「……？だれ、ですか？」

「くっそおおおおお！前田だ！」

ん？あんな子このクラスにいたっけ？

「かずपी、ニュースニュース！」

「どうしたんだ？」

「昨日、部活中にんかが破裂する音聞こえたやろ？」

「ん？ああ」

「それな？びゃつくくんが空手の試合で正拳突きやった時の音だつて」

「ま、まじで？」

「それで、その相手をしていたのがあの子。名前は、前田 慶亜。全国大会の覇者で、中学のころから負けなし」

なるほど、要するにその化け物を倒したモンスターハンターが白つてわけか

「だ・か・ら、昨日空手部で試合をした前田だ！」

「・・・・・・・・？」

「くうおのおおおおおお！」

「は、ははは」

もう、乾いた笑いしか出ないや

□

□

「今日は、どうしよう．．．．．」

「ああ、部活やめたんだってな？」

「はい．．．．．」

「どうして？」

「．．．．．なんとなくです．．．．．」

「そっか、な」「おい！本多！勝負だ！」．．．クスン．．．．．」

「．．．．．？」

「もういい、そっちがその気なら、無理やりだ！だあああああ
あああああ！！」

突っ込んでくる、え〜と前田さん．．．．

「ちょ、それじゃあ喧嘩だって！」

「じゃまだ、変態！」

「へ、変態って．．．．．」

激しく落ち込むぞ、その言葉．．．．．

「もういい！だったら一つ聞かせてくれ！本多はなんで部活やめたんだ！」

その眼は、悔しさとともに違う何かが……

「……なんとなくです……」

「そんなの、理由にならない！それに、そんなのじゃ私は、負けた私は納得できない！」

「……誰にだって、やりたくないものがあります……これで、いいですか？」

そう言い放った白の目は、紅く、しかし何も詰まっていない感じがした

「クウウウ、こんな、こんなやつに……」

「あら？君はいつから女の子を泣かせるような子になったのかな？あたしはそんな子に育てた覚えはないよ？」

いきなり背後から投げかけられる言葉……育てる？

「……師匠、何故ここに？」

「心配だったから、来ちゃった、テヘッ」

「師匠？え？え？」

「おおおおお！お美しいですね！」

見ると出るとこは出ていて締まるとこは締まっている、あれな女性が

「白君？人前で技使うなって言っただよね？」

顔は笑っているが、殺気がこぼれている……この人、ヤバイ……

「……………すみませんでした……………」

「……………ふう、ま、いつか。それで、この子たちは？」

「同級生の、北郷君」

「よ、よろしくおねがいます」

「同じく、及川君」

「是非！一緒にごはんでも！」

「そして、前田 慶亜さんです……………」

「な、名前覚えてたのか……………」

「そっか……………君にも友達が出来たか！うんうん、おかあさんは安心だ」

「……………おかあさん！！？」

どう年を取ってみても二十代後半にしか見えないぞ？

「みなさん、勘違いしないでください。“育ての”親です……………」

「あ、ああ、そうなの……育ての？」

「僕の母は死にましたから……いや、殺された？」

「……あれ？地雷か？これ？」

「地雷だよ……かずピー……」

や、やめて？こんな空気は、やめて？

「あ、あの？お名前は？」

「ああ！あたしの名前は、本多明^{さやか}。この子の叔母にあたる者だよ」

「じゃ、じゃあ、あなたが本多流掌術の？」

「うん、現当主」

「は、はは……」

きよ、今日は驚きっぱなしだな……

「君たち、部活はいいのかい？」

「あ、そうだった！じゃ、白、またな！」

「びやつくん、じゃね？」

「本多！次は絶対に勝つ！」

「さようなら………」

□

□

「師匠、どこに泊まるんですか？」

「そりゃあ、君の家だよ」

「門弟たちの修行は？」

「師範代にまかせてきちやった」

「……何日いるんですか？」

「できれば一生！」

そう叫んだ、いっぺんの恥じらいもなく、清々しいほどに

「そう、ですか………」

「ふっふっふ、君とあたしの愛の巣だ〜！」

「………」

いつも無表情な顔。しかし月光に照らされた白の口元は少し上がっ
ていた・・・

2話：本多流掌術（後書き）

師匠キタアああああああ！てゅーかオリキャラキタアあああ！

ご都合主義キタアアアアアアアアアアアアアアアアアア！

すみません・・・取り乱しました

まあ、こんな感じで読みにくいかと思いますが、いろいろ頑張っ
ていくのでよろしく願いしときます！

登場人物設定（前書き）

すみません、僕に作中に登場人物がどんな人なのか表わす能力があんまないのもたまたま、登場人物設定です！

登場人物設定

本多 白^{びやく}

年齢：17歳

身長：170ぐらい

見た目：白髪をそのままおろしている。長さは、腰ぐらい

紅眼

男の娘？

性格：UNKNOWN

趣味：読書 釣り

本多流掌術、次期当主。今のところ、ほぼすべてが謎

技：『双極』 両手の掌での打撃。相手を内側から破壊する

『柳』 嵐をも受け流す柳のようになる

『空破』 文字通り空気を破る。慶亜との試合では本気ではない。本気を出すと……

『草薙ぎ』 蹴り技。敵を草を刈り取るようにして絶命させる

『風林火山』（『風林火陰山雷』）

『風』 最小限・最速の動きでかわす技。避けられた相手は空を切ったような感覚に襲われる

『林』 もともとは気配を静かにする技。けど、白は最初から静かについて……

『火』 一言で表すと、猛攻

『陰』 UNKNOWN

『山』 鉄壁の護り。自分を中心にして、後ろに敵を歩ませない

『雷霆』 高速移動。前拳動なし、突然現れる

本多 明さやか

年齢：H I M I T S U

身長：165ぐらい

見た目：黒髪のセミロング。てっぺんにアホ毛がひと房ぴょこんと・
・・・

黒眼

一刀いわく出るところは出ていて、締まるところは締まっ
ているらしい

及川いわく「お美しい」らしい

性格：白のことが大好き！すこし、危ない線まで行きそうになるが・
・・・

基本優しいが、キレると・・・・・

趣味：白を愛でること。白を観察すること。鍛錬。

本多流掌術、現当主。“ある”成り行きから白を育てている。

「社会経験も大事だ！」

ということで、聖フランチェスカへ白を行かせた。しかし、白成分が足りなくなり一路、聖フランチェスカへ……

前田 慶^ケ亜^ア

年齢：17歳

身長：160ぐらい

見た目：灰色の髪で、ツインテール。

灰眼

体つきは一般女子高生を平均したぐらい

性格：とにかくプライドが高い。ツンデレ？

小学校のころから空手を続けて中一のとくに全国制覇。以来負けなし。

ついたあだ名が『鬼殺し』

しかし白に負けてしまい、何とか勝ちたいと思っているが、ことごとくかわされる日々が続いている。

白に名前を覚えていたことに、軽く感動している

以来、白を目標にしていることが判明。行動を共にする

登場人物設定（後書き）

どうでしたか？これ以上増やしたくありませんね？

3話：外史の扉（前書き）

前置きがなげんだよ！もういいから本編入れよ！と思っている方が多くなってきた頃合いでしょうか？まだ1日目ですけど・・・

では、どうぞ！

3 話：外史の扉

ある村の家の中で、一人の少年は一人の女性に抱き、護られていた。
全ての害から……

「白……あなたは……強く……生きなさい？白、
私のいとしい子……お腹が減っているでしょう？……
私の肉をたべな……さ……い……」

「かあ、さん？逝かないで、母さん……」

ガバッ

「夢……」

夢？……“夢”なのか？

「びゃ~~~~く~~~~で~~~~」

「師匠……朝です……」

「白！そこへ」起きてください「ん？せつかくの淫夢を」

「朝です……」

「分かったよう。ああ、眠いなあ」

「ご飯は・・・なんでもいいですね？」

「うんいいよ」

白の朝は、毎朝7時から。これはもう何年も前からだ。そうして起きると、まず朝ごはんを作る。

じゅ~~~~

「いいにおいだね？何作ってるの？」

「なにかです・・・」

毎朝、白と明の分を作っていたのでこちらにきてからも何度か二人分を作ってしまった白

「できました・・・僕は食べたら学校に行くので」

「あいあい」

ほくほく顔の明。どうやら久しぶりに白のご飯が食べれたのでご満悦の様だ

「・・・いってきます・・・」

「いつてらっさい。女の子を泣かせるんじゃないよ？」

ガチャンッ

□

□

「お！白、おはよう！」

「おっはよ」

「おはようございます……」

今日は余裕を持ってこれたな

「ほら、今日は朝に全校集会があるんだから、いそぐで」

「それでも、ないみたいだな……」

なんかんやで急ぐハメになるみたいだ……

「いこっか、白」

「はい……」

□

□

「あゝ今日もめんどくさかったな」

「そうやね」

「そうですね・・・」

「そうや！今日、おいら彼女とで〜とが・・・」

「ん？お前この前別れたばかり・・・」

「チツチツチツ、あまいねかずピー。また、できたあああああ
ああ！」

「けど、レポートの宿題があるだろ？」

「それなんや・・・やからついでに付き合ってや。美術館に」

「は〜ついでにつて・・・ま、いつか・・・白もくるか？」

「いえ、僕は用事があるので・・・」

「そっか、ならいくぞ」ドンッ「あ、す、すみません」

「チツ・・・」

「なんや？あの男？」

その男の眼は何かを探している獣のようで、わずかながらに殺気がこぼれていた……

（ヤバいな……あいつ……）

「どうしたんや？かずピー、はよいこ」

「あ、ああ。それと、またな、白」

「さようなら……」

□

□

「ううゝ冷えるなあゝ」

部活も終わり、及川との約束を果たすために今、美術館に向かって
いるところだ

「これで……外史の扉は閉ざされる……」

「ん？あいつは……」

昼間あつた白い奴。いや、決して白ではない

「お前、なにしているんだ？」

見ると手に大事そうに何かを抱えている

「泥棒か？」

「貴様には関係のないことだ」

「そーゆーわけにもいかない、ぞ！」

持っていた竹刀を構え一瞬で距離を詰める、が・・・

「人間にしてはなかなかだが、其処どまりだな」

振るった竹刀は軽く避けられ、後ろに回り込まれる

ドンッ

「ぐあー！」

背中を蹴られ激しく壁に打ち付けられる

「ふん、他愛のん」なにしているんだ！」チッ、そろそろといらぬ正義感を持ち合わせやがって」

「慶亜、さん？」

そこには道着を着た慶亜さんの姿があつた

「だめだ、コイツ強い。逃げる!」

「うるさい、変態!」

まだ言うか・・・激しく傷つくぜ・・・

「面倒だな・・・殺すか・・・」

今まで抑えられていた殺気が全て・・・

「な、なんだ?コイツ?」

「さあ、死ね!」

慶亜さんにむかって振り切られる脚

「友達は、大切にしろと、師匠に言われました・・・」

ガンッ

「なんだ?少しはできるみたいだが、ただ死ぬ奴が一人増えただけだ」

「白!!!?」

「北郷君・・・慶亜さんを連れてどこかにいてください」

「ダメだ!そいつ強いから!」

一人で相手しちゃだめだ！

「変態に護られる私じゃない！」

震えを押し殺して立ち上がった慶亜さん

「だから、変態って……」

「チツ……三人相手が……面倒だな……」

さつきから大事そうに抱えている、何か……

「白、いけるか？」

「いつでも……」

「なら、狙うはあいつが大事そうに持っている、あれだ！」

「はい……伏せてください……」

「え？」

「『空破』」

バアアアアアンツ！

白が正拳突きをするとこの前の比ではない音量が全身に突き刺さった

「がッ！なんだ、こいつは……」

それをもろに受けたあいつはかなりのダメージを受けたみたいだ

「あらあら？ 珍しく左慈が負けているではありませんか？」

左慈？ 左慈って、あの？

「干吉！ ！？・・・負けてはいない、ただ油断していただけだ」

「それでも、負けていたでしょう？ それにそのセリフ、やられ役の典型的なパターンですよ？」

「う、うるさい！ さっさとこいつら倒すぞ！」

「そうですね？ その銅鏡も早く始末しないとけませんし」

銅鏡？ あれ、銅鏡だったのか・・・

「これ・・・そんなに大事なものですか？」

「「な！ ！？」」

「ナイス！ 白！」

どうやってかは分かんないけど、白が取ったみたいだ

「じゃあお前ら、これ壊されも「これ壊したら、あなた方の心はどうなるでしょう？」へ？」

「激しく動揺するのでしょうか？ そして、悲しみ、嘆き・・・どんな色でしょう？」

「びゃ．．．く．．．」

その時の白の顔は、いつも無表情な顔ではなく、妖しく嗤っていた．．．

「や、やめろ！」

「見せてください．．．あなたの心．．．」

パライイイン！

「くそ！外史の扉が．．．開く！」

「外史？」

「ちょ、変態、どうなっているの？」

銅鏡が割れるとそこからおびただしいほどの光が俺たちの体を包み．．．そこで、意識が．．．

□

□

「くそ！なんだ？あいつは」

「もう、こうなつては後の祭りですよ。“彼等”を抹殺するしかないでしょう?。」

「そうだな。クツ!あの人間、次は絶対に殺してやる!」

「そうしてください・・・行きますよ?外史へ・・・」

「ああ・・・」

二つの白い影が、闇夜に消えた・・・

それ以来、北郷 一刀らを見かけたものはいない・・・

3話：外史の扉（後書き）

どうでしたか？なんか、恋姫無双と混じっちゃってます。それでも構わねえ、もっと見せる！という方、よろしくおねがいます！

4話：霸王、現る（前書き）

本編、スタートです！ついに、金髪ツインドリルが……おでこが……クールが……

では、どうぞ！

4話：霸王、現る

??? side

大陸中にある噂が流れた。占い師、管路による予言だ

『三人の天の御使い』

『一人は光り輝く服を着・・・』

『一人は慈愛に満ち・・・』

そして最後の一人は

『白髪紅眼、空虚で満たされている・・・』

それらの御使いが流星に乗ってこの地に舞い降り、この乱世を治めるらしい

そして今、私の眼に光り輝く流星が三つ落ちて行くのが映った

「華琳様!!」

「行くわよ。何としてもその天の御使いを私の者にして見せるわ」

「「御意!!」」

待つてなさい?この霸王、曹猛徳が天の御使いを手に入れるわ・・・

・

□

□

「……………うう、ここは？」

起きるとそこは……………？あれ？俺の眼、腐ったかな？

しかし、何度眼をこすっても風景は変わらない……………

「ウソ、だろ？え？なにこれ？」

そこは、見渡す限りの……………荒野だった……………？

「うそだろおおおおおおおおおおおおおおおお！..！」

「起きましたか、北郷君……………」

「びゃ、白？」

「慶亜さんもです……………」

「ん？んん？なんだ？ここ？……………ここ、どこだ？」

かなりの異変に頭が追いついていないようだ……白は落ち着いてるけど……

「ま、まず状況を整理しよう……」

整理することにした

←
変な白い奴（白ではない）に襲われる

←
白が銅鏡を割る

←
光に包まれる

←
荒野↑現在ここ

←
このままだと、死ぬ……

「いやあああああああああ！！！！」

いい具合で慶亜と声が揃う

「無駄な体力を使うと、早く死にますよ？」

「いやあああああああああ!」

「……どうやら、大丈夫みたいです……」

「え?」

白が見つめている先を見ると……砂煙が……まさか、世紀末?

その砂煙がどんどんこちらに向かってきている……良く見ると……馬!?!?

「どこかの、撮影現場かな?」

「違います……見渡す限りの荒野、ですよ?」

「そ、そうだな……」

わずかな希望も白に悉く打ち砕かれた

「おい、其処の者!」

おお、もうこんな近くに……女子?

「あなたたち、どこから来たの?」

どうやら言葉は通じるらしい……なんだろう?

「に、日本と言うところから来ました」

「にほん？どこ、そこ？」

What? アナタガシャベッテルノjapaneseデシヨウ？

「華琳様、こいつ頭がおかしいらしいです」

はうッ・・・頭がおかしい発言をされたぞ？おでこが広い女性に・・・

「え〜と、華琳さん「貴様！なんで華琳様の真名を言った！！」へ？」

そういうと、鬼の形相で俺に突貫してくる、でこ美人・・・

ブオンッ

「な、なんで？ッ！！？し、真剣！！？」

切り口を見ると血が流れている・・・血？

「華琳様の真名を言った事を後悔しながら・・・逃げ・・・」

そこで俺の人生はおw「なにを、しているんですか？」

ガキイツ・・・

「貴様！何故邪魔をする！」

「友達は大切にしろと・・・師匠に言われました・・・」

「じゃあ、貴様から死ねえええ！」

「『柳』」

白はでこ美人がふるう大剣の一撃を、紙一重で避けていた

「クソ！しん「やめなさい！」華琳様！！？」

「姉者！」

「秋蘭まで！！？」

「話も聞かずに斬りかかるのはどうかと思うぞ？」

「だが、あの男が華琳様の神聖な真名を……」

真名？なんだ？それ？

「あなたたち、今ここがどこだかわかる？」

「……ブンブンブン」「」

はちがとぶ……じゃねえよ！

「ここは、陳留。私が治める地よ」

陳留？……中国？ちゅうごく？チュウゴク？……え？ふつつの中国じゃなく？

「あの〜今、漢王朝が支配しているかんじですか？」

「そうよ・・・ま、それも、いつまでも続かないでしょうけどね？」

聞きたくはなかった肯定の言葉・・・

「あの〜重ね重ねすみません・・・あなた方のお名前は？」

「我が名は曹猛徳。いずれこの大陸を統べる霸王よ！」

「夏侯惇だ！」

「夏侯淵・・・」

・・・もう何も言うことはない・・・古代中国・・・三国志の世界？だ・・・けど、女の子？

「変態・・・これ夢でしょうか？」

「変態って・・・いわないで？」

「・・・」

白・・・表情変えないな・・・

□

□

そう見た目が金髪ツインドリルな子は言い放った……？

「な、なんでだ？」

俺が聞き返すと、今大陸には『天の御使い』という噂が広まっているらしく、その三人がこの乱世を治めると言われているらしい

「ま、あなたたちの能力には期待してないわ。あなたたちには……」

「神輿、ですか？」

「そうね、民たちに求心してもらうために、ね？」

「「??.?」」

「要するに、会社の印象を良くするための、マスコットになってほしいということですよ……」

「「なる」」

わかりやすいな。流石白！なにが流石なのか分かんないけど……

「まずこつと？が何かは分からないけど、そっちの女は頭が切れるみたいね？腕も立つみたいだし」

「……僕は……男です……」

「「「!!!!!!」」」

「なに！？華琳様が男と女を見間違えるだど！！？ありえん！貴様、服を脱げ！」

「・・・・・・・・・・？」

「いいから、脱げ！！」

「「春蘭（姉者）！！」」

見ると慶亜も顔を真っ赤にしている

・・・・・・・・・・

沈黙が流れた・・・・・・・・その沈黙を白が

「僕は”そのお話断らせていただきます・・・・・・・・」

「貴様！華琳様のおs「いいわ、春蘭」華琳様」

・・・・・・・・今、尻尾が見えたような・・・・・・・・

「なんでかしら？」

「・・・・・・・・なんとなくです・・・・・・・・」

ちよ、白！！？

「へえ、そんな理由で行かせると思ってるのかしら？それに、どこかに着く可能性だってあるあなたを、むざむざ逃がすとても？」

夏候姉妹が武器を構え、周りにいた兵は白を取り囲んだ

「ちょ、待ってくれ」

何とか止めようとした時、白が……

「……………」『邪魔』、ですよ？……………」

また……………嗤った……………

4話・霸王、現る（後書き）

なんか、こーゆーふうな終わり方に憧れていたんで、やってみました

どうでしたか？ついに本編スタートです！

作者の文才のなさはもう仕方ありません。無いものねだりはもうやめます。

作者は・・・・・・・・頑張ります！！

5話：『邪魔』（前書き）

あんな、終わらせ方・・・・・・・・しなきゃよかったと・・・・・・・・後
悔します・・

では、どうぞ！

5話：『邪魔』

「……………邪魔』、ですよ？……………」

白は、こともなげにそう言い放った

全てに無関心な白が嗤う……………

「邪魔、だと？貴様！なめているのか！」

「なめてませんよ……………ただ、この現状が『邪魔』だと言っ
たんです……………『邪魔』をするのなら……………力ずくでも……………
行かせてもらいます……………」

ただ、無表情に、そこに何もないのが当たり前のように、言った……………

「その二人はどうなのかしら？」

曹操が一刀と慶亜に聞く

「俺は、別に良い……………」

「私は……………いえ、私も断ります」

「え！？慶亜？」

「話しかけるな、変態」

「あれ？なんでだ？眼から心の血が・・・」

「ふん、だったらどうするの？」

「・・・白に、ついていきます・・・」

驚愕だった。一刀にとって・・・

「白は、私の目標です・・・それを曲げるつもりもないし、曲げられるつもりもない」

「そう、ならここで死ぬ？」

「クッ・・・」

「・・・？」

白には、この状況が理解できなかった。

なんで、この場から去るのを『邪魔』されるのかも

なんで、慶亜が自分についてくるのかも

・・・そんなことより・・・

「僕は、眠いんです・・・もう、行きます。北郷君、さようなら・・・」

その言葉にはいつも帰りにかわした言葉と変わらない……

「行かせると、誰が言ったかしら？」

白の前方に兵が展開する

「なら……通してもらいます……」

兵に歩み寄る、白^{しろ}

「何をしている？とらえなさい！」

しかし動かない、いや動けない

「……『風林火山・林』……」

その眼の静かさに、その眼の虚しさに、その眼の空しさに、誰も動けなかった

兵の間を、ただ歩く白

「ま、まて本多！」

いち早く我を取り戻した慶亜

それにつられるように、曹操たちも動き出す

「まちなさい！」

「無理、です……」

「華琳様！任せてください！あのような、もやし、すぐにへし折って見せます！」

「僕はもやしじゃありません……人間です……」

当たり前のことをさらりと言う白

「は！こーゆーのをひゅってゆーんだよ！」

「……少しは成長したみたいね？」

「白！なんで……」

一刀の叫びが、荒野に響き渡る……

「……なんとなくです……あえて言うのなら、眠いからです……」

「それは、理由になってないぞ？本多」

「………？」

「どうでもいい、華琳様の命令に従えないのなら、死ねええええええええええ！」

白に突貫する夏侯惇

「本多！」

白はその攻撃をただ、見据えるだけ

眼前に來ると

「『風林火山・風』……」

夏侯惇の攻撃は、まるで空を切るように……いや空を切った

「な!!?どこにいる!!」

攻撃がかわされた夏侯惇、周りにはいない

「『空破』」

不意に白の言葉が聞こえる。

パンツ

その技は左慈に使った時に比べると弱々しく聞こえる、が

「きゅ〜〜〜」

人を気絶させるのには、十分だった

「馬鹿な……姉者が負けた?」

「……あなた、名前は?」

そう尋ねる霸王……

「……本多 白です……………」

そう答える、空虚だった……………」

□

□

「……行って、しまったわね？」

「……ああ……………」

「それにしても、あの本多というの、ほんとにあなたと同じ世界からきたの？」

「俺も、眼を疑ってるよ……………」

本多 白。いきなり転校してきた……………俺の友達……………
……………」

不思議なことばかりで、驚かせられっぱなしだったけど……………
無表情で、感情を出さない奴だったけど……………」

それでも……………俺の友達なんだ

「あなたは私のもとに残るの？」

「ああ……………」

「なんで？」

「言葉を借りるとするなら……………なんとなくだ」

「……………そう……………」

「なんだろうな？本当に、なんとなく……………」

「まあいいわ。秋蘭」

「は！」

「春蘭を運んで。戻るわ」

「御意！……………ほら、姉者しつかり……………」

「きゅ〜〜〜」

「あなた、名前は？」

「俺は……………」

「俺は、北郷 一刀だ」

「そう……………ま、死なないように頑張って頂戴？一刀」

「はは、そうだな」

もう、この世界、白い奴は外史って言うてたっけ。俺、この外史で生き抜くしかないみたいだな？

・・・この、ちいさな覇王と共に・・・

5 話：『邪魔』（後書き）

どんどん増えていく、オリ技……どうでしょう？無駄でしょう？

内容は紙ですけど、熱意は鉄板です！

急展開もとい超展開があなたを待っているかもしれないような気もしないでもないような気がするような気がないでもないような……

次話も、よろしくおねがいします！

6話…どこか・・・（前書き）

作者、最近王道より邪道の方が好きになってきました・・・

・・・邪道、書けないけど・・・

この作品書いていると、というよりこの先の事を考えると、鬱に・・・

では、どつぞー！

6話…どこか…

「おい、本多！どこに行くんだよ？」

「……どこかです……」

「……はあ……」

今さっきからずっとこんな調子……なんで私付いてきたんだろう？

「本多、そのかばんには何が入っているんだ？」

とりあえず話を変えてみる

「……教科書……筆箱……財布……」

なんだ、案外普通……

「……包帯……絆創膏……」

ん？怪我でもしやすいのか？

「……解毒剤……漢方……」

解毒剤！！？漢方！！？

「……仕込みナイフ……着替え……」

仕込みナイフ！！！？着替え．．．は普通だな．．．普通か？

「な、なんでそんなものを持ち歩いているんだ？」

「．．．なんとなく．．．です．．．」

だそうだ．．．．．

「なあ、本多．．．．」

「なんででしょう？」

「その．．．．着替え．．．貸してくれないか？」

この世界に來たばかりのときはテンパリ過ぎてよくわからなかったが、気づいたら道着だ

「この格好、恥ずかしいしさ．．．」

「．．．いいですよ．．．なんでもいいですか？」

「あ、ああ」

なんでだろう？いつもは敬語を使うのにコイツ（と北郷^{へんたい}）には使う気になれない

「こんなのしか、ありませんが．．．」

「だ、大丈夫だ．．．．ありがとう．．．」

「……？」

「そこ、不思議がるところじゃないぞ？」

「……？」

ま、いいか……それにしても

「お前、結構女っぽい服着るんだな？」

「……全て、師匠の趣味です……」

「な、なるほど……いやじゃないのか？」

「……いや？……」

「……？」

こいつなんかずれてる気がする……

「と、とりあえず……向こう向いててくれないか？」

「わかりました……」

近場の岩の陰に隠れる

(別に……見られても……いや！……でも……)

何かと格闘している慶亜……

（てゆうか、私は何を考えているんだ？．．．．一時の気の迷いか．．．）

なにか落ちついたような慶弔

着替えが終わると

「本多．．．今からどこに行くんだ？」

今一度挑戦する気になった

「．．．どこかです．．．．．」

「．．．．はあ．．．」

結果は、変わらなかったそうで．．．．．

「．．．．．村です．．．．．」

「へ？」

「村、です」

白が前方を見つめている．．．．あれは！

「村だ！」

「．．．．僕、言いましたけど．．．．」

「こーゆー時は何度も喜びをかみしめるんだよ！」

「・・・・・・・・『喜び』？・・・・・・・・」

「?????」

なんでそこで疑問形？・・・

「と、とりあえず、行こう！夜ごはん食べていないから、お腹ぺこぺこだよ」

「・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・行きましょう・・・・・・・・」

□

□

「・・・・・・・・金、無いじゃないか・・・・・・・・」

重大なことに気づいちゃったよ！これ、死活問題！

「ど、どうする？本多」

「・・・・・・・・物を、売りましょう・・・・・・・・」

「私たちに売る物なんか・・・・・・・・」

「僕たちは、この世界の人間にとって、奇妙な存在のはずです．．．」

「あ！！」

忘れてた．．．私たち、過去？に来たんだっただ．．．

「．．．．持ち物の中には、この時代には無いものがあります．．．．」

「で？で？」

希望がどんどんあふれてきて白に詰め寄る慶亜

「．．．．．近くて、しゃべれません．．．．．」

「／／／／／ご、ごめん．．．．．」

は、恥ずかしい．．．．周りの人、にやけてるし．．．．

「．．．．．そのようなものを欲しがる、金持ちに買わせる．．．．」

「ああ〜！なるほど！」

よくするに、私たちの世界で金持っている人が古いもの欲しがるみたいな感じが．．．．

「あそこ．．．．．あの屋敷がいいかもしれませんね？」

「……入れるかな？」

「『天の御使い』ということを話せば、いいかと……」

「……で？誰が行くんだ？……」

「僕か……あなたです……」

「私か？……むう……」

・ 交渉などしたことが無いぞ。かといって、本多に任せるのは……

「僕が……行きましょう……」

「……いや、私も行く……」

「そうですか……なら、行きましょう……」

・ ……ほんと、無表情だな……嗤った時、かつこよかも何考えているんだ？

「????？」

「い、いや、大丈夫だ、行こう……」

「……はい……」

□

□

屋敷に入り、およそ三十分

出てきた二人の表情は

白、無表情……

慶亜、白をめっさ睨んでる……

「本多、お前は良心というものが無いのか？」

「良心？」

「……はあ……」

屋敷の中で何があったのかというと

『天の御使い』だということを話す

←

入れた

←

交渉開始

←

白が周りを観察する

←

白があることないことしゃべりだす

←

ご主人、顔真つ青

←

脅しだす（ご主人の不倫とか不倫とか不倫とか）

←

おびえるご主人「金ならいくらでも出す！だ、だからそのことは・・・」

←

そこから白が「では、これと当分困らない路銀を・・・」

←

交渉成立

←

屋敷から出る↑今ここ

←

あてもない旅

「あの、御主人もいいものを手に入れて、笑っていましたよ?」

「なんかちよつと涙も混じっていただろう?」

「……………?……………この後、あの方と会うことはないです……………
どうなろうと、知ったことはありません……………交渉に、脅しは
つきものです……………」

こともなげに言っただけのける白

「お前、どんな世界で生きてきたんだ?」

確かに、一高校生が、全国覇者に勝ったり、不審者を撃退したり、
武將を倒したり、交渉の技術を持っていたりはしないだろう……………
・

「……………あなたと同じ、人間の世界で生きてきました……………」

「……………そうか……………」

もう聞くことを諦めた慶亜

（けどなんで無表情なんだろう？今度聞いてみよう）

「……………なあ、白」

「……………はい……………」

初めて下の名前で言う慶亜。それに何の疑問も持っていない白

「……………どこに行くんだ？」

「……………どこか、です……………」

「……………そっか。どこか、だな？」

「……………はい……………」

「……………けど、今日はもう遅いし、明日からにしないか？」

「……………はい……………」

「じゃ、あの宿に泊まろう？」

「……………はい……………」

一人の慈愛と一人の空虚。一步一步、慈愛が空虚に歩み
寄る……………

6話：どこか・・・（後書き）

白たちに路銀を与え、慶亜に白と呼ばせるためだけに

この話を書きました・・・・・・・・無意味、ですかね？

・・・フラグか？これ？・・・・・・・・このフラグこそ、無意味ですね？

大丈夫です、ハーレムなし予定ですから・・・

・・・前も、予定だった・・・・・・・・いや、今回こそ大丈夫だ！

よっしゃ、ウジウジ考えていてもじゃあない

自分が信じている作品たちを信じる！

次は・・・・・・・・どうなるかなあ？

7話・出発（前書き）

やっべ、矢印で説明、面白くなってきた

では、どうぞ！

7話：出発

「む？ここは・・・」

知らない天井だ・・・

「そつか・・・そうだったな」

昨日は、色々ありすぎた。人生の中でこんなに驚くことは、一回もないだろう・・・

「今、何時だろう・・・」

かばんの中の携帯を探る

パタンッ

「・・・もう、10時じゃん・・・」

まったく、白は何をやっているんだろう？昨日、部屋を二部屋借りて別れていらいそのまんまか

「お風呂に・・・入りたいな・・・」

いくら男勝りな慶亜でも年頃。体臭とかは気になる

・・・気になる人がいると余計に・・・

「む、起こしてやりましょうか」

さっそくベッドから勢いよく立ちあがりドアノブに手をかけ、あけると

「おはようございます……」

そこには白が

「きゃあああああああー!!」

ブンッ

驚きのあまり、反射的に蹴りが

「……どうしたのですか？」

軽くかわされ、少しプライドに傷がつく

「ご、ごめん、おこしに行こうと思ったたらいきなりお前がそこにいて……」

「僕は、起きていましたよ……」

「そうなのか？じゃ、今まで何していたんだ？」

ごく普通の質問を投げかける

「これから旅に必要なものを、買い出しに行っていました……」

「へえ」

案外まめなところもあるもんだな、と少し見直す慶亜

「……慶亜さん」

「なんだ？」

「馬に、乗れますか？」

「……馬？」

□

□

外に出るとそこには……

「う、馬だ」

素人目から見ても立派だと分かるほどの、灰と白の馬が二頭

「……これからさき、歩いて大陸を動くことは不可能です……
……今回も運よく村がありました………本当なら死んでいました……」

「ごくり」

普通に考えれば当たり前のことだ。広い大陸の中、あの広大な荒野の中に、まだ日が明るいうちに村を発見できたことは奇跡に近いだろう

「馬に、のれますか？」

「わ、わからない」

人生初、馬と触れ合う慶垂。その巨体にたじろぐ

「こんな立派な馬、どうやって？」

そこが今さっきからの疑問だ。こんな立派な馬を二頭も

「……道を歩いていると、『邪魔』だったので、どいてもらったくれました……」

「……は？」

「……？」

なんか色々はしより過ぎな白

「……つ、つまり……」

矢印ターーーーム

起きる

←

買い出しに行く

←

『邪魔』な人がいた

←

どいてもらう(力づく)

←

馬もらう(脅して?)

←

慶亜に説明する↑今ここ

←

捕まる

「いやあああああああ!」

え?もしかしてこいつは人をぶっ飛ばした拳句、馬を脅し取った?

「なんでそんなこと」「ああ、いたいた。あんたこれでいいかい？」
「ん？」

後ろを振り返るといろいろ持った男の人が

「ありがとうございます・・・」

「いいんだいいんだ、あんたに助けてもらわなかったら全部取られていたんだから」

助けた？

「・・・？白、この人は？」

「・・・馬とその用品を今からくれる人です・・・」

「・・・あの～すみません・・・」

「ん？なんだい？お嬢ちゃん？この人の彼女？」

「い、いえ、違います／＼」

「はっはっは、顔を真っ赤にして可愛いねえ！」

「そ、そんなことより、何があったのか教えてくれませんか？」

「ああ、いいとも」

矢印ターーーーム2

起きる

←

買い出しに行く

←

『邪魔』な人がいた・・・この人から馬を奪おうとしていた賊

←

どいてもらう（力づく）

←

感謝される

←

何か欲しいものはないかと聞かれる

←

馬もらう（感謝されて）

←

慶亜に説明する

←

絶望される

←

おじさんに話してもらおう↑今ここ

←

・ ・ ・

「白、お前結構いい奴なんだな？」

「?????」

「はっはっは、なんか二人とも面白いねえ？」

完璧に慶亜の勘違いだった

「けど、こんな立派な馬、それに二頭もいいんですか？」

「いいんだ、若いもんが遠慮なんてするもんじゃないぜ？それにこっちは助けてもらわなかったら、馬全部取られてたんだ。おまけに命も。だから、もらってけ！若い奴二人で旅なんて、なんかよほどの理由でもあるんだろう？だったら、何にも言わずもらっとけ」

この世界に来て初めての・・・心のぬくもりだった

「ありがとうございます……ございます！このご恩は一生忘れません！」

心のぬくもりに感動する慶亜。眼には涙が

「……ありがとうございます……」

やはり、無表情

「助けてもらったのはこっちなんだがな？まあ、頑張れよ！俺は、仕事があるから縁があつたらな」

「はい、また」

そついうと去っていくシブい男性

「いい人っていい人なんだな？」

よくわからないことを口にした慶亜

「……馬に、乗れますか？」

「へ？」

あまりの切り替えの速さに啞然としている慶亜

「……もちろん、白はずっと同じままだ。切り替えなんてしていない」

「乗れますか？」

「……乗ったことが無いから、分からない……」

少しふてくされた言い方になる慶亜

「では、乗ってみてください……」

いつの間にか取り付けられている、各種乗馬用品

「ううゝでりゃ！」

少し迷うが、もうこうなれば野となれ山となれ。もちろん乗ったのは灰色の馬だ

「……おお！乗れた！」

初めての経験に興奮気味になる

「そういえば、白は……」

「……では、行きましょう……」

なんだ？この敗北感？こっちはあんなに……

「……乗ったことがあるのか？」

「……はい……」

「はあゝ白は何でもできるな？」

「何でもは、無理です。出来ることだけ、です……」

「……そうだな」

「そうです……」

「……それで？どこに行くんだ？」

「……どこか、です……」

「ふふ、そうだったな？」

「……行きましょう……」

「ああ！」

空虚。彼にとっては『邪魔』なだけ……

……

7話：出発（後書き）

シリアスって難しい・・・ま、いつかシリアルで

今回は、二人を出発させるためと馬をgetさせるために書きました

さっさと、恋姫出せや！という方

すみません、もう出ます

次回に、多分、出ます

では、次回も宜しく願いします！

8話・出会い（前書き）

もう、何も言うことはないです

では、どうぞー！

8話：出会い

「なあゝ白？暇じゃないか？」

「そうですね．．．．．」

あの村を出てから、二日。最初は好奇心で何でも楽しかったが

「暇だゝ」

結構、飽きた。

もう、ほとんど変わらない風景が二日続いている。

その間、何も起きなかった。何も．．．．．

「お前も暇でしょう？灰^{かい}」

ブルウ

そう呼び掛けたのは先日もらった二頭のうちの二頭。灰色の方だ

ちなみに、白の方の馬の名は慶亜がつけ「白斗^{はくと}」となった

「あゝ暇だ」

暇と言えたのは、ここまでである

□

□

??? side

「ハア・・・ハア・・・」

「月！？大丈夫？」

「大丈夫だよ・・・詠ちゃん・・・」

ある場所に二人の少女がいた

二人は逃げていた

「どこにつたの？へっへっへ・・・」

黄色の布をどこかに巻いている数人の男に

「ごめんね？詠ちゃん、私が我が儘言っただから・・・」

「月のせいじゃないわ！大丈夫、何とかなるわ」

月、と呼ばれる少女を必死に励ます、詠、と呼ばれる少女

しかしその顔には焦燥が浮かんでいた

（なんとか・・・なんとか月だけでも）

「みいゝつけたあ！かくれんぼは終わりだよ？」

「ひッ！！？」

「月に近寄るな！！」

強がつてはいるが足が震えている

「おお、怖い。さゝ早く行こうね？」

二人に手を伸ばす黄色

「触るな！！ゲスが！！」

その手を払いのける

「・・・ガキが、舐めやがつて・・・おい、もつと礼儀つてやつを教えてやれ」

「へっへっへ、俺はこの気の強そうな奴を・・・」

「じゃ、私はこの気の弱そうな女子を・・・ヒヒッ」

「よ、よるな！」

また、はじこうとする、が・・・

「気がつえ〜な〜・・・へっへっへ、やりがいがあるってんだ」

逆に掴まれる

「は、はなせ!~!」

「さあ、こっちも・・・ヒヒヒッ」

「いやあこないでください・・・」

「そそりますねえ?」

「月に、触るなあああ!~!」

必死に暴れるが、無理だ

「この、おとなしくして・・・『邪魔』ですよ?どいてください・・・」は?」

男の後ろには、神々しい容姿の・・・“美女”がいた

□

□

「ひまだん？あれは・・・白！」

「なんですか？」

「・・・人が襲われてる・・・」

「・・・自分のいた世界と違う場所だと痛感させられる・・・」

「それが、どうしたのですか？」

「お前・・・本気で言ってるのか？」

「???」

「・・・ああ！もういい！いい奴だと思った私が馬鹿だった！」

助けようと、手綱を握る

「・・・どこに、行くのですか？」

横から聞こえるそんな声

「助けに行くに決まってるだろう！」

「・・・出来るのですか？」

「出来る、出来ないじゃない！やるんだ！」

「そうですか・・・」

「行くぞ！灰！」

ゲシッ

灰の腹を思いつきり蹴る

ブルウア！！？ヒヒイイイイイン！！？

「え？ちょ、灰？そつちじゃなあああああああい！」

いきなり蹴られて驚いたのだろうか？

いきなり違う方向に駆け出した

「……白斗、構わず真っ直ぐ……」

フルウウウ

空虚は真っ直ぐ進んだ、構わず。真っ直ぐ……

その直線状に運悪く賊が

「この、おとなしくして……『邪魔』ですよ？どいてくださ
い……」は？」

その顔はさも何事もないように

悪気もなく

率直に言い放った

どこをどのようにすれば自分が命乞いをするのか

そもそも、何故自分が『邪魔』をされているのかも……

「……言った筈です……『邪魔』だと……」

「こいつは、死刑だ。やれ！てめえら！」

うおおおおおおおおお！

と何とも不格好な様で突っ込んでくる二人

「……白斗……」

フルウウウアアア！

大きく前足を上げる白斗

「な！？」

突然の事に動きが止まる二人

そこに……

アアアアア！

死が、振り落とされた……

バキグチャア……ビチャ……

そこらじゅうに、肉片や血がまき散らされる

「て、てめえ！」

さっきの二人と比べるとまあまあ

しかし、素人であることは一目瞭然

フルア！

白斗の前蹴り

無惨にもそれを顔面に受けた、アニキと呼ばれた者は

頭を破裂させ即死した

ビチャア

返り血が白にかかる。しかし・・・

「・・・・・・行きますよ、白斗・・・・・・」

フルウウウ・・・

その顔は何事もなかったかのように、まるで羽虫でも潰したかのよう
に・・・・・・

「ま、待って下さい！」

白が後ろを振り返ると、初めて認識する顔が二つ

「・・・・・・・・・・なんでしょう?」

「た、助けていただきありがとうございます!」

頭を下げる少女

「・・・・・・・・?」

「あの〜よかつたら城でお礼をしたいのですが・・・お名前は?」

「・・・・・・・・本多 白です・・・・・・・・」

「え〜と、姓が本で、名が多、字が白でよろしいでしょうか?」

「・・・・・・・・姓が本多、名が白です。字は・・・・・・・・ありません・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「字が無い?・・・・・・・・白髪紅眼・・・・・・・・まさか『天の御使い』!!
?」

今までしゃべっていた少女とは違う少女が気がついたように叫ぶ

「・・・・・・・・らしいです・・・・・・・・」

「でも、他の二人は?」

「・・・・・・・・輝く服の方は、曹操さんのところに、慈愛の方は・・・・
あちらに・・・・・・・・」

「……僕は、男です……」

「え!!?」

毎度のリアクション

「それより、白、お前が?」

「……はい……」

その眼に、動揺も罪悪感も、悲壮感も宿っていない

「……なんで!!?」

「……『邪魔』だったからです……」

「けど、今までだってそう言いながら殺さなかったじゃないか!」

そう、『邪魔』と言いながらも殺さなかった

しかし今回は殺した

「言え!」

「……相手も殺す気だった、だから殺したんです……」

「……人を殺したことあるのか?」

「今、殺しました……」

「・・・ということは、なかったんだな？」

「・・・はい・・・」

「なにも、何も感じないのか？」

「・・・？何を感じるのですか？・・・」

「・・・」

衝撃だった

自分と同じ世界から来て

ここに来た日数も同じ

なのに、どうしてこいつは・・・

「あ、あの、私たち助けてもらっただんです・・・」

「え？」

（もしかして、襲われてた人たち？私が見た？）

「このたびは詠ちゃんともども、命を救っていただきありがとうございます。お城に・・・」

（助けた？こいつが？）

「あの、どうかしましたか？」

動き出す・・・
空虚と慈愛は、
儚げな少女に出会った・・・
物語が、

8話：出会い（後書き）

衝撃の事実！白君は、人を殺したことが無かった！

・・・衝撃でも何でもねえや・・・

白君が難しい・・・ほんとにムズイ・・・

・・・どうでしたか？感想など意見を送ってくれと幸いです

次回も、よろしくおねがいします！

9 話・重なる（前書き）

ふふふ、何が言いたいのやら？

タイトル・・・まんまです

では、どうぞ！

9 話：重なる

暴王、董卓。洛陽で悪政を布く、悪鬼の様な人物……のはずだった

「なんで？何がどうなったら、この小動物になるんだ？」

目の前には董卓と名乗る少女。とても悪政を布いているような人には見えなかった

「……この世界が、ただの過去ではないことは、曹操さんに会った時点で分かっていたでしょう？」

その通りだ。霸王が女の時点でおかしい

「……そうだな、考えていても仕方がない……」

……そう、もう物語は動き出した……

□

□

今、私たちは董卓さんたちと移動している。

まさか、歩かせるわけにもいかないの、二人を馬に乗せようとしたら

「そんな、悪いです」

そこで代案が出た

「立派な馬なんだし、二人ぐらい乗っても大丈夫なんじゃない？」

それはそうだが………つまり

誰かが、白と一緒に乗るということ

（私でも、いいんだが）

そんな考えは言えるわけもなく、結果

灰：慶亜・賈馭

白斗：白・董卓

になった

「す、すみません、狭くしてしまっ／＼／＼／」

「……構いません……」

その董卓の表情は女の慶亜でもくらっと来るぐらいのもの

「…………心配をかけました…………」

「心配、かけたわね…………」

「…………よかったああ!!」

喜びを分かち合う四人

「董卓様、こいつは??」

「私たちの命を救ってくれたお方です」

「『天の御使い』ね」

「…………!!?」

「???」

三つの意味で驚く四人

「董卓様! 命の危機とは!!?」

主が命の危機に会った事

「なんや? ごっつかわええやん!」

『天の御使い』の容姿

「…………助けた?…………」

なにより、この貧弱そうな人間が命を救った事

「なのでこれから、お礼をしたいと思って……」

「……別に、構いません……」

「こっちが構うの。いい？『天の御使い』っていうのは、乱世を治めると言われるわ。そんな神輿、簡単に離すわけじゃない？」

「……そうですか……」

「???今度は、逃げないのか？」

曹操のところは離れたのに……と慶亜

「曹操？あなたたち、曹操に会ったの？」

「……最初に……」

「……曹操が簡単に手放すとは思えないのだけど……」

「……『邪魔』だったので、どいてもらっただけです……」

「・」

「???」

「え〜と……実は……かくかくしかじか……」

「「「「「え!?!?」「」「」」」」

慶亜が話したのは、白が夏侯惇を気絶させてそのすきに逃げたということ

「……こんなのが？」

「残念ながら、はい……」

何が残念なのだろうか？

「ならその、夏侯元讓を倒した実力見せてもらおうか」

と、自分の髪の色によく似た女性が

「……なぜ、そうなるのですか？……」

「華雄！落ちつきなさい」

「し、しかし、こいつの眼が信頼できるものとは思えません！」

「眼が？」

「……ただ、周りの物事を映しているような眼にしか……」

「……それでも、私や詠ちゃんの命を救っていただいたことには変わりありません。失礼なことが無いように、みなさんにもお願いします」

董卓が頭を下げる

「あ、頭をおあげください。董卓様がそこまでいうのでしたら……」

・・・」

後ろの三人も渋々といった様子だ

三人が白を見る目は疑いのまなざし

「では、城に戻りましょう」

董卓の声で城に戻ろうとする女性たち

「あ、あの〜」

慶亜が申し訳なさそうに尋ねる

「なんや？」

その声に全員が振り返る

「お名前は、なんなのでしょうか？」

その言葉に全員の頭の上に！がたった

「ウチの名前は、張遼や！」

「華雄だ」

「陳宮なのですぞ」

「……………呂布……………」

ああ、やっぱり？

三国志のおおまかな内容は知っている慶亜

この時期に董卓のもとにいる将兵は憶えていた

．．．．．でも．．．．．

「うっそおおおおおおおおおおおおおおおおおー！！」
「？」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

慶亜の叫びが城下に響き渡った

□

□

「お願いします．．．この子は．．．」

夢で頭を下げる女性

「お願いします」

眼の前で頭を下げる少女

二つが重なって見えた

「????」

白には分からなかった。どういつ関係があるのか

なにより、何故夢の女性と重なるのか

だから、逃げなかった

理由は……

「……なんとなく、です……」

慶亜の質問に、遅めに答える白だった……

空虚の瞳に、影、二つ……

9 話：重なる（後書き）

内容には触れないでください・・・触れないで？

・・・どんな伏線か・・・分かる人にはわかる

ってゆーか、分かりやすい？

次回も、よろしくおねがいします！

10話：昔話（前書き）

この作品……自分で書ききれぬのか不安になってきました

書いてて楽しいんですけど、安易な展開は死を招きそうで

チートじゃないので圧倒的不利な状況が作り出せず

結果、微妙になってしまいそうなのが怖いです

まあ、考えててもしやあないが口癖何で

とりあえず、書きたいです

では、どうぞ！

10話：昔話

あれから数日。董卓配下の武将たちにはまだ疑われる日々が続いている白

慶亜は……すぐに打ち解けた

『天の御使い』といっても所詮は部外者

神輿として担がれても、実質は暇だ

今、白が何をしているのかというと……

「……………」

読書だ

特に、兵法書などを読み漁っている

横では、董卓配下の武将と慶亜が楽しそうに談笑している

そこに……

「本多、すこし時間良いかしら？」

賈馱の姿が

「……………なんでしょう？……………」

「あなたたちがいた、天の世界について聞かせてもらえるかしら？」

「……………いいですよ……………」

「そう。じゃ、こっちに来て。一人ずつね」

ガタッ

二人同時に立ちあがる

「……………先に、いきますか？……………」

「うん……………」

数日間、あまり話していない二人

白は感じていないが、慶亜は気まずく感じているようだ

「じゃ、慶亜の方からね？こっちきて」

「はい」

ボタン

それを見送る張遼たち

「……………」

また、兵法書に眼を通しだした白

それを見つめる、董卓の瞳

その眼は、疑いか？・・・・・・・・それとも・・・・・・・・

□

□

「じゃ、次、本多きて」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

白の番になり、立ち上がると

張遼たちも立ちあがる

「・・・・・・・・なんでしよう？・・・・・・・・」

「お前と、二人きりなんてそんな危ないことさせられないからな」

敵意満々な、華雄

「どんな話が気になるだけや」

ごまかす、張遼

「詠……護る……」

あからさまに言う、呂布

「お前なんか、信じられないのですぞ」

言つてのけた、陳宮

「……そうですか……」

「ま、いいんじゃない？さ、きて」

ガタッ

立ち上がる董卓

「……私も、行きます」

□

□

結果的に慶亜も来ることになり全員で話を聞くことになった

「ま、慶亜には、生活的な事を聞いたから。あなたには、そうね、

天の世界の武などについて聞くわ」

最初は慶亜にも聞こうと思ったのだけど……と賈馱

それを慶亜が

「そーゆー話なら、白の方が詳しいと思います」

と言うので

「……………現代には、武を誇る人間はあまりいませんでした……
……なので、昔の事でも良いですか?……………」

「ええ、慶亜にもそう言われたし、それでいいわ」

「……………では……………」

と話しだす白

「昔、この戦国の世とよく似た時代、一人の男がいました……
……………」

「その男は、後の世の天下人、徳川家康に幼いころから仕えまし
た……………」

「その男、初陣『桶狭間の戦い』で元服……忠誠を誓いまし
た……………」

「あるときは、自分の家系のものが敵になろうとも、家康のもと
を離れず、勝利を収めました……………」

「あるときは、敵1万に無謀の単騎駆けを決行・・・このとき、家康がその男を救おうとする行動が勝利につながりました・・・」

「あるときは、織田信長、この方も天下人です。その男が、謀反によつて殺された時、家康はそのあとを追おうとした。それを説得し、謀反を起こした人物に追われながらも、自分の国に戻ります・・・」

「あるときは、豊臣秀吉、この方も天下人です。『小牧・長久手の戦い』では、秀吉の軍勢8万に対し、500の寡兵で挑み、家康を撤退させるために奮起しました・・・」

ゴクリ

誰かが息をのむ音が聞こえた

「その折、秀吉には『日本第一・古今独歩の勇士』と称されました・・・」

「そのほかの別名も多く・・・『家康に過ぎたるもの』『花実兼備の勇士』『徳川四天王』『十六神将』『徳川三傑』など・・・」

「その男は、生涯において、五七回の合戦に参加しました・・・」

「それほどの武人なら凄まじい最期を迎えたのだろうな」

と華雄

「……いえ、その男はそのすべての合戦においてかすり傷一つ負わなかったと伝えられています……」

「「「!?!?」」」

張遼、華雄、呂布の武将三名が驚く

戦において無傷であるということがどれほど難しいことをよく知っているから

「……そのことから『無傷の闘神』と呼ばれることもありました……」

「……勇猛だけではなく、知略も兼ね備えた人物だったと言われます……」

「完璧超人やないか……」

ぼそりとつぶやく張遼

「……槍の使い手で、愛槍は『蜻蛉切』。巨槍で、身の丈の三、四倍はあったとされます……名前の由来は穂先に止まった蜻蛉がそれだけで真つ二つになった逸話から……『天下の三名槍』と言われました……」

「その……男の名は？」

呂布がつぶやく

『鬼神』と呼ばれた男です………」

そのつぶやきは誰にも聞こえることはなかった

語る空虚。その瞳は……

10話：昔話（後書き）

はい、僕は本多忠勝が大好きです

ゲイオタだろうとなんだろうと好きなものはどうにもなりません

いろいろオリ設定などが浮かび上がりだす頃合いです

この男の名がこの物語を……いえ、なんでもありません

歴史好きの方には、かなりおかしく思われる方もおられると思いますが

僕の知識は紙です

ほぼWIKIと武将が無双するゲームによって構成されています

なのでオリ設定が入ってきます

それでも構わねえ！という方が一人でもいるのでしたら書き続けます

次号、戦闘かな？

次話も宜しくお願いします！

11話：嫌悪（前書き）

・・・なんか、どんどん嫌われちゃってるな・・・

ま、いつか

では、どうぞ！

11話：嫌悪

「で、対策なのだけれど、何か案はある？」

「恋が……突っ込む……」

「我が、金剛爆斧のサビにしてくれる！」

「はあ……イノシシばかりやな……」

攻めてきた賊の数は3万。相手は陣も立てずに突っ立っている

「本多は？何かある？」

「……言うとなれば、相手の士気を下げることです……
数の暴力は馬鹿に出来ません……」

「具体的には？」

「……相手を、すぐには殺さないことです……」

「「え？？」」

「……相手の臆などを切り、ほったらかしにします……
そうすると、撤退するときに敵は最低でも一人は担がないといけま
せん……」

「見殺しにした場合は？」

「…………それはそれで、相手方の疑心暗鬼を生ませることが出来ます…………もしかしたら、見捨てられるんじゃないか？と…………それに、動けない相手を殺すのは、羽虫をつぶす以上に簡単です……………」

「そんな汚い手を使わずとも、私がまとめて吹き飛ばしてやる！」

と、華雄

「……………そうですか……………でしたら、何も言うことはありません……………」

今度は軍記物を読みだす白

「フンッ！行くぞ！」

「……………行く……………」

「ちょ、まだ決まってるやろ！！？」

「こいつと一緒にいると、何故か腹が立つ」

理不尽なことを言いだす華雄

「はあ、もう分かったわ。ボクが指揮をするから、とりあえず準備してて」

「分かった」

「……………うん……………」

「はあ、なんでこう何のやる？」

相変わらず、書物を読み漁る白

「……………白……………」

「……………なんでしょう？……………」

「嫌われちゃったな？」

「……………関係のないことです……………」

「はあ、もうこいつは……………」

「……………」

□

□

戦闘は、董卓軍優勢のまま終盤までいった

呂布を筆頭に三人の武將の武勇で兵の士気が上がった

呂布は一振りで何人も殺し

他の二人も及ばないながらも敵を蹴散らしていった

「……………うう、吐き気が……………」

またこみ上げる吐き気

白が殺した死体を見て以来、死について敏感になった慶亜

これが普通の反応なのだが……………

「……………」

白は椅子に腰かけパラパラと書物をめくっている

と、不意に立ち上がった

向かう先は董卓が座っている玉座

董卓の眼の前まで来ると

「な、なんでしょう?」

「……………」

ゆっくりと手を伸ばす白

「白?なにしてるんだ!!?」

なおも伸ばされる手

「ッ・・・・・・・・」

「やめろ！白！」

眼をつぶる董卓

ガタンッ

玉座の後ろに響く音

「・・・・・・・・伏せてください・・・・・・・・」

「え？」

「『空破』」

バアアアアアン

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・あれ？」

いつまでたっても来ない痛みに眼を開ける董卓

「グア！」

白が見つめる方を見ると明らかに怪しい人が苦しんでいた

体は血まみれで何かに切り刻まれたかのように

「…………怪我はないですか？…………」

「え？あ、はい」

状況がつかめない董卓

「…………どうします？殺しますか？…………」

「え？あ、あの、この人は？」

「…………黄色の布を見るあたり、黄巾党です…………貴女を狙っていたようです…………」

よく見ると、手には小刀が

「あ、ありがとうございます。二度も命を救っていただくなんて…………」

「????」

バタンッ

「董卓様！！今の破裂音はいい…………」

「華雄。私を、殺そうとしていた人から、白さんが助けるときに出した音の样です」

「本多が？」

「・・・・・・・・」

黙々と本を読んでいる白

「・・・・とりあえず、礼を言おう・・・・」

「???」

□

□

結果として董卓軍の大勝利

しかし、白がいなかったら董卓は殺されていただろう

だが白は何故董卓を助けたのか？

「お前、あの時は見向きもしなかったのに、なんで今は助けたんだ？」

あの時と言うのは、白たちが董卓たちと出会った時の事

結果として助けたが、Aの事柄をしたらBもついてきたという感じだ

「…………体が、勝手に動きました?…………」

自分でも理解できていない様子

「そっか…………」

…………やっぱり悪い奴ではないと思う慶亜

「あの、白さん」

「…………为什么呢?…………」

急に話しかけてきた董卓に眼を向ける白

「私の真名を、受けとってください」

「???」

「え〜と、その…………」

「ほら、命より大切な名前の事だよ」

慶亜が注釈を入れる

「…………友達、ですか?…………」

なにかずれている白

「そ、そうです。友達、です。二度も命を救っていただいた、私の気持ちです。私の真名は『月^{ゆえ}』です」

もちろん、最初の際にも渡そうと考えた董卓だったが、白の独特の雰囲気に近い寄れず、今に至った

「……友達は大切にしろと、師匠に言われました……」

「???」

「あいつなりに、受けとったということだと思います」

「そう、なんですか？」

ちなみに、慶亜は全員と交換していたりする

話が終わり、再び本に眼を通しだす白

その眼はいつも通り……

□

□

次の日、白は華雄に睨まれていた

「もう我慢ならん！勝負だ本多！」

「……………なんででしょう？……………」

「なんでもだ！」

「華雄！やめなさい！」

「いえ、こればかりは」

華雄なりに思うところがあつたのだろう

「……………もう、失礼な態度はとらないと護りますか？」

「結果次第です」

このまま険悪な雰囲気のままよりいいだろうと月は考えた

「分かりました。しかし、けっして無理をしないようにしてください」

「分かりました。いくぞ、本多」

「……………はい……………」

「すみません。華雄が無理を言って……………」

「……………構いません……………」

□

□

調練場に月配下の文武官が揃っていた

その理由は言うまでもなく、華雄と白の試合を見るためだ

「勝敗は、相手が参ったを言うまで」

賈馱が言う

「では、始め！」

「はあああああああああああああ！！！」

合図とともに華雄が突っ込む

大きく振りかぶり斧を薙いだ

しかし当たることはなく、空を裂いた

「くそ！避けるな！」

「……………そうですか……………」

「でりゃあああああああああああ！！！」

また、大きく振りかぶる

振られる前に白が動いた

「『風林火山・雷霆』」

瞬時に間合いを詰め、今にも振ろうとする華雄の右腕に

「『風林火山・火』」

簡単に言々と猛攻。拳打の嵐

「クッ！」

それを上体をひねって何とか回避する

そこに白の蹴りが

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

顔、数？のところで止まっていた

「・・・・・・・・参った・・・・・・・・」

シーーーーー

「驚きね？この試合、本多の勝ち」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

顔色一つ変えず、勝利の宣言を受け取っていた

□

□

試合後、張遼が華雄に尋ねる

「…………おどろきやったな？…………なんか、分かったか？」

「…………分からなかった…………大抵、人と武を交えるときはそいつの人となりが分かるのだが……………」

だが…………と付け加える

「何も、感じなかった…………まるで、空気の様で、無機質に其処にあるだけの様で……………」

「…………そうか。まあ、落ち込んでたってしゃあないやん？」

「…………ああ…………本多」

「…………なんでしょう？……………」

「次は絶対勝つ！」

「……………次？……………」

「ああ、次だ」

「……………そうですか……………」

□

□

ある異次元空間のこと

「…………ふふ、これはおもしろいですね？」

不気味な笑い声を上げる于吉

「どうしたんだ？気色の悪い声をあげて？」

左慈の姿もある

「いえ、あのあなたを追いつ込んだ少年。なにか引つかかることがあったので調べていたら面白いことが分かりましてね？」

「面白い事？」

「ええ。これを見てください」

そう言って書類の様なものを渡す

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・面白いな」

「でしょう?」

「まあ、関係のあるコイツを抑えればいいんじゃないか?」

「あなたを追い込んだ者の、師匠ですよ?そう簡単にいくかどうか・・・・・・・・」

「大丈夫だ、問題ない」

「そうですね、なら、準備しますかね?」

その書欄には・・・・・・・・本多 明の名前が・・・・・・・・

動く管理者。歯車は噛み合い出す・・・・・・・・

11話：嫌悪（後書き）

最後の、噛み合ってねえよ！どこがだよ！と思う方。たくさんいらっしやると思います

すみません、自分でもよくわからないこと書いたと思います

この作品の中で主人公は結構強いながらも、チートではありません

なので、あの方には勝てないだろう、と思いながら書き進めています

では、次回も宜しくお願いします！

12話：黄巾党討伐連合・1（前書き）

ついに黄巾党討伐編です

編と言ってもすぐに終わりそうデ

では、どうぞ！

12話：黄巾党討伐連合・1

先日、3万の軍勢相手に大勝利を収めた董卓軍

しかしながら、黄巾党の数は膨れ上がる一方

大陸は、荒廃の一途をたどっていた

そんな折、各諸公に大將軍何進から文が送られた

『いろいろ頑張って黄巾党せん滅してこい』

書かれていた内容は小難しいことだったが

要約するとこんな感じだ

この文に各諸公が動き出す

陳留の騎都尉：曹操

江東の覇者：孫堅・孫策

義勇軍を率いる：劉備

主だったところを上げればこんなものだ

そこに董卓率いる軍勢の姿もあつた

□

□

黄巾党討伐連合天幕内にて

「あら？久しぶりね？本多」

「白！久しぶりだな！」

「・・・お久しぶりです、曹操さん、北郷君・・・」

「久しぶり、北郷^{へんたい}」

「変態ゆうなし！！」

再会を喜ぶ三人？一人はよくわからないが

「貴様！よく顔を見せたものだな！」

と夏侯惇がキレかけ

「????だれ、ですか？」

・・・・・・・・・？

「貴様あああああ！そこになおれ！今すぐ首を切ってやる！」

「落ち着きなさい、春蘭」

「しかし、コイツが！」

「???」

「ほ、ほら白。お前が最初にぶっ飛ばしたひて……はっ！
!?」

どうやら、堪忍袋の緒（着いているのか？）を引きちぎったようだ

「いいだろう……貴様等まとめて吹き飛ばしてやる！」

「春蘭!!」

「華琳さま、だってあいつらが！」

子供のように駄々をこねる夏侯惇

「ふう……あなたたち董卓のもとについたのね？何故かしら？」

私のところは去ったのにね……と曹操

「……なんとなく、です……」

「そつ、ならもういいわ。行くわよ、一刀、春蘭、秋蘭」

「はっ!!」

「じゃ、じゃあな？白、慶亜」

「……ええ……」

□

□

この連合に行ったのは、白、慶亜、そして張遼の三人

白と慶亜の二人は、賈馮が

「顔見せにでも行ってきたさい」

とのことで、来たという訳だ

『天の御使い』の影響力は絶大だ

董卓軍に『天の御使い』がついたという噂は瞬く間に広がるだろう

「びやつくん、けーちゃん、軍議があるからきてや」

白に対して警戒心はあまりもっていない張遼

「なんや？自分おもしろいじゃん！」

なにが面白かったのか白には分からなかったが真名交換はしている

天幕内に入ると一斉に視線が向けられた

「ずいぶんと可愛らしい御使いもいたものだな？」

「そうね？母様・・・ふふ・・・」

「へんな笑い声出さない。ほら、軍議始まるわよ」

「あれが・・・『空虚と慈愛』の御使いさんかな？」

「そうなのでしょう・・・」

「ほえゝ美人さんなのだ！」

「この全身精液まみれより、ましみたいね」

「酷いや！？」

反応の仕方は十人十色

「・・・やっぱりみんな女性だな」

「・・・そうですね・・・」

「えゝ軍議を始めるぞ！私の名は皇甫嵩。この連合の指揮を取らせてもらう。で、こつちが・・・」

「朱雋っす、よろしくたのむッス！」

幼女で貧乳なのが皇甫嵩

横に居るだけで皇甫嵩の地雷になりそうなのが朱儁だ

「まあ、みんなも知っていると思うが黄巾党が各地で暴れている。そこで連合を組むことになった」

「で、これからの方針を決めるんですけど、何か案はないっすか？」
そこで曹操の手が上がる

「この連合は常に行動を共にするのかしら？」

「まだ決まっていっす！」

ビシッと言い放つ朱儁

「なら……こちらは、寡兵。相手よりも数が少ないわ。まとまって動いて一網打尽にされたら終わり。なら、それぞれで動いて各個撃破。最後に、総力戦に持ち込んだ方がいいんじゃないかしら？」

「しかし、各個撃破されたら終わりだろう？」

「あら？ 作戦も何も立てない、紙みたいな連中に負けるのかしら？」

挑発したように言う曹操

「むぐぐ、そんなわけないだろう」

「けど、散らばったら連合の意味がなくなる気がするッス！」

「そんなの、負けそうになったら救援でも何でも呼べばいいじゃない？ま、応じるかどうかはわからないけどね？」

「はあ、もう、分かったよ。誰か、異論のある者はいないか？」

シーーーーー

「ないみたいだな？それではk「解散っす！」朱雋のばか！」

それぞれの思いを持ち、天幕から出る諸侯たち

覇道を歩くもの

平和を願うもの

宿願をもつもの

全てが思いの中、天幕を去っていった……

□

□

「なんや、めんどいことになってきたな？」

というのも、董卓軍は朝廷のお抱え

この連合で戦果をあげても全ては朝廷の名声になるだろう

つまりモチベーションが上がらないのだ

「びやつくんとけーちゃんには、前線に立つてもらいたいんやけど、大丈夫？」

『天の御使い』が前線に立つことで兵の士気を上げるためだろう

「けど、二人が辛い思いするからな。あんまりお勧めはできんな」

「……僕は、構いません……」

慶亜の方はと言うと

「だ、ただ、大丈夫です、私もがんばります。それで、少しでも早く戦が終わるのなら……」

「けーちゃん……分かった、その覚悟受け取ったで」

「……」

ついに、戦乱の世が幕を上げる・・・

・

12話：黄巾党討伐連合・1（後書き）

どうでしたか？

たしかまだ孫堅死んでなかったようなきが・・・

ということでした

深くは係わりは持たないと思います

感想、意見など待ってます。どんな批評でも受け入れる覚悟です

では、また次回よろしくおねがいします！

13話：黄巾党討伐連合・2（前書き）

戦闘、かな？

では、どうぞ！

13話：黄巾党討伐連合・2

「伝令！」

「なんや？」

連合本部を出発して数日。劉備率いる義勇軍は兵数が少ないことから、董卓軍に随伴する形となった

「前方に黄巾党と思われる軍勢が！その数およそ2万！」

どよめきが起こる

董卓軍と義勇軍を合わせた数は、1万5千

「ほんとやな。あんな数、どっからわいてくんのやろ？」

「のんびり構えてる暇はありませぬぞ？すぐに準備に取り掛からねば」

「わかってるって、関羽。そつれにしても、ボンツキュッボンツやな？」

「そ、そんな不埒な事よりも、早く」

「わかったわかった」

相手は陣形もたず訓練もされていない、にわか軍団

数の上で負けていようと、負ける戦ではないだろう

「じゃ、王道の陣形構えて、即討伐つてところやな」

「そうですね」

「では、近寄ってきたところを弓矢で崩し、騎馬兵で追い散らすというのでよろしいでしょうか？」

「ん？こっちのちっちゃいのは？」

「はわわゝ、わた、私の名前は、諸葛亮でしゅッ！あう、カンじやった・・・」

「あわわゝ、わたた、私の名前は、鳳統でしッ！・・・かんじやった・・・」

真面目に話し合っているのはこの4人だけ

他の奴らはと言うと

「御使いさんってかわいいんですねゝ」

「きれいなのだ！」

「そんな、綺麗だなんて」

「・・・・・・・・・・」

「なあなあお姉ちゃん、何読んでるのだ？」

「軍記物です……どちらかというと、僕は兄の方だと……」

「「「「え!!!?男!!!?」」」」

いつものリアクションごちそうさま

「じゃ、じゃあ、お兄ちゃんなのだ？」

「……僕は、あなたと血縁関係はありませんよ……」

「それでも、お兄ちゃんなのだ！」

「……そうですか……」

「もう接敵しそつやから、準備しいや」

こういて、初戦が始まった

□

□

戦は、そこまで長く続きはしなかった

策が大当たりし、徐々に黄巾党の数は減っていった

しかし、馬鹿は馬鹿でも相手は人間、策を練ってくるものだ

黄巾党が奇襲をかけてきたのである。それも一番手薄なところに

「完璧に油断してもうとったな。あつこには、ヤバい！びゃつくんとけーちゃんが……」

駆ける霞。しかしもう接敵してしまっていた

□

□

「どどどどど、どうする？白。私たちのところに敵が！」

「……落ちついてください……伝令さん……」

「はッ！」

「……他の方たちのところに、援軍要請を……」

「はッ！」

走っていく伝令……

しかし、来るまでの間、寡兵で踏ん張らなければいけないという絶望的状况

「どうするの？びゃくあれ？白？」

周りを見回すがいない

前方に白くゆらめく何かが見えた

そう、白自身も前線に出たのだ

「……兵の皆さん……偃月の陣です……」

「……はい！」「」

流石董卓軍の兵士、練度と気概は高い

「……僕が、先頭に立ちます……あとは、踏ん張ってください……」

「……応！」「」

御使い自身が先頭に立つということですますます士気が上がる

「……では、行きます……」

駆ける白

「『空破』」

バアアアアアアアン

空気が割れる音がした直後、数人の兵が吹き飛ぶ

たじろぐ黄巾党

「……『風林火山・山』……」

立ち止まる白

「うあああああああ！」

「『草薙ぎ』」

フッ

突っ込んできた賊の右側頭部に白の右足が鎌のように振られた

叩きこまれた賊の体と頭半分、何かの刃物で切られたように両断されていた

「……次、来るなら、どうぞ……」

その瞳は死体に一瞥もくれず

前方に押し寄せる軍勢のみを見つめていた

□

□

霞が駆け付けると、そこには死屍累々。むせ返る様な血の匂い

真っ赤に染まる白と無傷の兵士がただ白の姿を見ていた

（な、なにがあったんや？）

一人の兵士に尋ねる霞

「み、御使い殿が前線に出てこれ、先頭に立ちました。それから、いつまでたっても敵方の兵士が来ないと思ったら……」

「

「どうしたんや？」

「御使い殿を中心として、その両側から一切先に敵を通しませんでした……」

「な！！！？」

よくみると、その通りだった

敵が白の横を通り過ぎた形跡がない

「びやつくん、すまんかったな」

「・・・・・・・・霞さん、敵、逃げました・・・・・・・・」

ようするに少し戦うと敵が逃げ帰ったと

「大丈夫なんか？血まみれやし」

「・・・・・・・・一撃もらいましたが、問題ありません・・・・・・・・」

「ちょ、問題ないわけじゃないん！？背中、バツサリ切られてもうとるし・・・・・・・・」

「・・・・・・・・問題、ありま・・・・・・・・せ・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

「びやつくん？びやつくん！！？」

倒れる白

「誰か！？救護兵を！」

□

□

ある村に一人の女性と男子がいた。母と息子の二人暮らし

見た目は美しくはあるが、どこか儚げ

幸せに暮らせていた。生活には困るはずもなく、逆に裕福だったぐらいだ

しかしある日、二人を災厄が襲った

放たれる弓矢

それを一身に受け止める女性

二人は逃げた

そして、母親は死に残された少年は

ガバッ

「夢・・・・・・・・」

また出てきたあの女性“夢”なのに・・・・

「白！よかった！生きてた！」

抱きつく慶亜

「・・・・・・・・慶亜さん、胸があってます・・・・・・・・」

そう、慶亜の可もなく不可もない胸がちょうど白の顔面に

「ごめん／＼／＼」

「???」

「おお、起きたか。びゃっくん」

「……霞さん……」

「びゃっくんのお陰で、兵士が無傷やったわ。ありがとな?けど、今度からけちゃんを泣かせるのうな行動は控えた方がええかもしれんな?」

「し、霞さん!」

慶亜の目を見ると真っ赤だった

「べ、別にお前の事が心配で泣き明かしたりしてないからな?ほんとだぞ?」

あからさまにツンデレってる慶亜

「????……そうですか……」

「う、うん……」

それに気がつかない白クオリティー

真に受けられて結構ショックな慶亜

「はっはっは、やっぱおもしろいな?自分ら?」

「お、面白くありません!」

「? ? ?」

“夢”なのか? . . .

13話：黄巾党討伐連合・2（後書き）

ヤバい！チートっぽくなってきた

けど、一般以上チート以下を目標にしているこの作品

本当のチートはあの方です

シリアル感全開でお送りしました

次回も宜しくお願いします！

14話：黄巾党討伐連合・3（前書き）

いろんな作者さんの作品を見ているうちに

いろんな事が恥ずかしくなった

初心者のままじゃみっともないからと

熟練者ぶるほんとの初心者

・・・ほんとに思った、恥ずかしいなって

頑張って書きます！

では、どうぞ！

14話：黄巾党討伐連合・3

先日の戦から数日。各地の黄巾党を討伐していたことだ

「なに？黄巾党が集結しだし始めている？」

そう、各地の黄巾党が何かに惹かれるように一点に集中しだしたのだ

その数およそ10万

連合の総力が7万

絶望的とまではいかずとも、かなり悪状況だった

今、未来の英傑に試練が科されようとしていた

□

□

「今回集まってもらったのはほかでもない、相手との総力戦にあたるためだ」

「相手の数は膨れ上がって、10万に達しそうです！」

「だれか、意見のある者はいないか？」

「質問なのだが、相手の兵力を養うための兵糧はどこか分かっているのか？」

と孫堅が聞く

「……それが、敵は相当馬鹿らしい」

「は？」

「兵糧を一点に集中させて、さらにその守備がかなり手薄っす」

ポッカアアアアアアアアアア

もはや、馬鹿としか言いようがないだろう

兵糧の守備を手薄にしてまで何がしたかったのか

それは……

「で？一点に集まって、敵は何をしようとしているわけ？」

と曹操

「『張三姉妹のらぶらぶらいぶ』というものを見るために集まっているそつなのだが」

「……ようするに、娯楽？」

「・・・そうみたいす・・・」

馬鹿だ！馬鹿だ！大事でもないが二度言った

「その、張三姉妹って張角たちのことなん？」

「そうらしい。ということは、攻め入る時注意すべき点は、相手が指揮官を得たということだな」

数に加え、指揮官も得るとは

馬鹿なものには変わりがないが・・・

□

□

董卓軍は兵糧攻め

他の諸侯は手柄を得るために張三姉妹を捕まえに行った

董卓軍が何故簡単に引き下がったのか？

手柄が無いに等しいためだ。敵を討つても手柄はすべて朝廷のもの

「ま、楽な仕事でよかったと思うべきやな」

目の前には、ぱっと見全然やる気のない黄巾党が3千

1万の董卓軍の敵ではなかった

その時の断末魔が

「ちゅほちゃんのらいぶ行きたかった！」

「れんほゅちゃんよ永遠に！」

「てんほゅちゃんは俺の嫁！」

「てめツ！てんほゅちゃんはおれんぎゃあああああ！」

・・・・・・・・意味が分からなかったという・・・・・・・・

「よっしゃ、これで帰れるわ！」

「そうでsおえええええええ！」

「大丈夫か？けゅちゃん！！？」

「すみません・・・・・・・・まだ、死体を見るのはなれていませんので・

・・・・・・・・」

それもそうだ、カツカツの現代人には辛い現実だった

むせ返る様な血の匂い

「う、ああ、あああ……」

腰が抜けて動けない様子

「『風林火山・雷霆』」

突然現れる白

「『双極』」

ドンッ

両手の掌打が敵の腹に繰り出される

「ゲエエエ！」

喉の奥から出てきた物体は……内臓だった

ビッシャア

もろに被る白

内臓を吐きだしたからと言ってすぐには死ねない。体内だろうと体外だろうとまだ、つながっているのだ

「……大丈夫ですか？……」

「あ、ああ。ありがと、びゃっくん」

「ありがとう、白……けど、いつもは無視するのになんで？」

その答えはもちろんあれだ

「……師匠に、友達は大切にしろと、言われました……」

そっぴいとまた本を読みだす白

「おもしろいけど、よう分からんやつちゃん」

「……でも、悪い奴ではないと思うんです……」

「そっぴいな、ウチもそっぴおもつとるよ」

「……」

“無”だ……空虚、虚無、空洞、善の反対、悪の反対……どれも

14話：黄巾党討伐連合・3（後書き）

前書きではなんか落ち込んでる僕

ほんとに思いました

いろんな作者さんの作品を見ると

自分は、こんなのでいいのかな？と

……落ち込んでてもしゃあないっすね

ちなみに、前書きにあつたのは

BUMPの真つ。な空を。ただろつかを改造しています

最近、ポジティブだけが取り柄だったのにネガティブになり始めちゃってます

まあ、独り言です

では、次回も宜しくお願いします！

15話：日常？いいえ、非日常（前書き）

今回で終わりですかね？

実質、前話で終わってました

次からは閑話とかでるのかな？

では、どうぞ！

15話：日常？いいえ、非日常

黄巾の乱は幕を下ろした

詳しく言つと、曹操が張三姉妹を討ち取ったという報が流れた

それが真実かどうかは、今となつては誰も分からない

董卓軍はというと、早々に戦を終わらせ洛陽に戻つていった

□

□

「おかえり」

そんな言葉をかけられる三人

「「「ただいま」「」」

と返すしかないだろう

「ん？月がおらへんな？」

「あゝ張讓^{くわじうじ}に呼び出されて、今行つてんの」

「そっか……」

「フンッ！あの張讓^{へんたい}、月に手を出したら地獄を見せてやるわ」

「そ、そうなんかあゝ」

「それに、二人ともご苦労だったわね？本多に至つては、前線に出たそうじゃない？」

情報網とは恐ろしいものだ

「……恋と勝負……」

……？

「ちょ、恋？いきなり何を……」

「……今度は恋が……見てみる……」

華雄がダメだったので今度は私がということなのだろうか？

今まで言えなかった理由は、月が嫌がるから

けど、今はいない

よし、今のうちにやっておこう

ということになったのだろう

「でも、びゃつくん、怪我してんねんで？」

「…………怪我？…………」

「うーん、いい方がよく分からへんけど、敵を食い止めてたらやられたっちゅうこっちゃな」

まだ切られて数日

完全には傷が…………

「…………傷は、塞がりました…………」

「え！！？」

当事者の二人が驚く

「え？いつからなん？」

「…………兵糧攻めを、する前です…………」

「…………結構前やん」

「だったら…………やる？」

「…………はい…………」

「大丈夫なのか？白？本当に大丈夫なのか？」

過剰に心配する慶亜……将来、ツンデレがヤンデレにならないければいいが……」

「……………大丈夫です……………」

□

□

「またもや、調練場に集まる武将

そこには月の姿はなく、どことなく物足りない感じが漂っていた

「じゃあ、二人とも準備ええか？」

「……………いい……………」

「……………はい……………」

「なんかしゃべり方が似てる二人

「じゃあ構え！」

構える呂布。一方白の方は

「……………構えないの……………」

「……構えは、ありません……」

「では、始め！」

「……呂布……行く!!」

今まで戦ってきた中でも最高ともいえる速さ

「フッ！」

ヒュンッ

そして振られる攻撃も最高の速さ

「『風林火山・風』」

それを何とか避け、後ろに回り込む、が

「甘い」

の一言で一蹴され、また振られる方天画戟

今度は単発ではなく、連激だった

言うなれば、剣戟の嵐

「『柳』」

よけようとするが、体にどんどん切り傷が増えていく

あれ？これって手合わせ……………

「……………最強、か……………」

「???」

「……………なんでも、ないです……………」

「なら……………もつと行く！」

さらに強まる攻撃

右左右縦斜右右右縦下上斜左右右縦横右下上下下中左斜右左

避けてはいるが、紙一重とはいかず、薄皮一枚は切れている

「『風林火山・蔭』」

「!!!」

最初から読みにくい相手の動きがさらに読めなくなった

「『風林火山・風』」

「もう……………当たらない」

これは聞いたことのある技だと思い、後ろを向く。そこに……………
……………白の姿はなかった

「……相手の言った事が、真実とは、限りません……」

横に、白の姿が

「『空破』」

バアアアアアアン

「クツ！フツ！」

それをなんとか耐え凌いだ呂布

白を一撃が襲う

「『風林火山・風』」

今度は後ろに回り込む

「『風林火山・火』」

拳打の嵐

「……ニヤ」

完全に予想外の蹴りが白を……襲わなかった

「……恋の……勝ち……」

「……そうですね……」

「なんや、どっちもすごかったわ。この勝負、呂布の勝利」

「白、大丈夫か？」

浅いながらも体中に傷が出来た白

「……傷は、浅いです……」

「そうか、よかった……」

その顔は心底安心したようで

「恋、何か分かったか？」

と華雄が聞く

「……わかんない……」

「……恋でもか……」

けど……と繋ぐ呂布

「……白、悪い奴じゃない……と思う……」

「そうか……恋がそういうのならそうなのだろう」

「そうね、そうかもしれない……」

「恋殿のゆうことを信じるのですぞ！」

なにか白のあずかり知らぬところで話が進んでいる

「……本多……いや、白……今まで変なふうにあ
たつて悪かったな？」

「月を助けてもらったのに、わるかったわね」

「……ごめんなさい……」

「ごめんなさい！なのですぞ！」

「……？」

急展開もとい超展開についていけない白。否、ついて行くとして
いない

「ということで、ボクの真名を受け取ってほしいのだけれど……
いい？」

「……恋も……」

「恋殿が渡すならねえも渡すのですぞ！」

「……私は、すまない。故郷の風習でな、渡せないんだ……
」

「……友達、ですか？……」

「そう、なるのかしら？」

「・・・そう・・・」

「多分そうなのですぞ!」

白なりの解釈の仕方と言ったところだろう

「ボクの真名は『詠^{えい}』。よろしくね?」

「・・・恋は『^{れん}恋』・・・」

「ねねは『音々音^{ねねね}』。ねねと呼ぶがいいですぞ!」

「本当にすまないと思っている」

「・・・友達は、大切にしろと、師匠に言われました・・・」

「「「は?」」」

白クオリティーにたじろぐ四人

「こ、これは白なりの受け取りだと思います」

とまた慶亜が注釈を入れる

「どうや?おもしろいやつやろ?」

「・・・そうね?」

「・・・うん・・・」

「そうですね」

「・・・そうだな」

「・・・よかったな？ 白、みんなと仲良くなれて」

「・・・？」

嫌悪されなくなった空虚・・・その顔は、不思議そう
で・・・

15話：日常？いいえ、非日常（後書き）

はい、あの人とは恋さんでした

もうこれ以上嫌われたままはいかん！と思い書きました・・・
人は理解してないんだけどね？

では、次回も大宇宙のような心で見守ってやって下さい！

閑話：不幸な一日（前書き）

閑話です

では、どうぞ！

閑話：不幸な一日

突然だが、詠には一月に一度、大変不幸に襲われる日がある

それが、今日だ

その日になると、周りに迷惑をかけないように部屋に引きこもってしまうのだが……

「なんで、あんたがここにいのよ？」

「……読みたい、書物がここにあったからです……」

「別に良いんだけど、今日私と一緒にいると、ヘタしたら死ぬわよ？」

「……そうですか……」

また本に目を向ける白

突然、窓の外から槍が……

パシッ

ナイスキャッチ白君

「な、なんで？慶亜から聞くと、あんた人助けとかそんなんじゃないはず……」

「・・・・・・・・友達は大切にしろ、と師匠に言われました・・・・・・・・」

倒れてくる本棚

「きゃああああああ！」

スッ

ナイス移動白君

「あ、ありがと・・・・・・・・」

「・・・・・・・・狭い空間より、広い空間にいたほうが避けやすいですよ・・・・・・・・」

暗に、外に出た方がいいですよ、と言っているのだろう

「けど、ボクが外に出るとみんなにも迷惑かかるし・・・・・・・・」

うつむいてしまう詠

少し涙眼だ

「????・・・・・・・・なら・・・・・・・・いいです・・・・・・・・」

ポスッという音を立てて座る白

「あんたは、なんでここにいるの？」

「・・・・・・・・読みたい書物が、ここにあったからです・・・・・・・・」

淡々と機械的に言う白

普通の人間が言ったら言い訳にしか聞こえないが、白が言うとマジだ

「わかったわよ・・・・・・・・もういいわ、よ!!!？」

落ちていたバナナ（なぜある？）に足を滑らせてこけ・・・・・・・・そうなる

「と、と、きゃあああ！」

ポスッ

「・・・・・・・・大丈夫、ですか？・・・・・・・・」

「・・・・・・・・へ？へ？」

派手に白にオーバードライブもといドライブをかました詠

（か、顔が、ち、ちかい）

それでも目を離せなかったのは、白に見とれていたからだろうか？
それとも・・・・・・・・

「ご、ごめんね／＼／＼／」

「…………構いません…………」

「そ、そう…………」

自分の見た目はこれでも一般以上だとは思っている詠

無反応な白に些か傷心気味だ……

ちなみにこの会話中、二人は離れておりません

「よいしょ、きゃああああ！」

今度は白が座っていた椅子が二人分の重さに耐えきれなくなり、足が崩壊した

ドスッ

……マウントポジションもとい馬乗り状態

みるみる内に顔を赤くさせて

「きゃあああああああ！！！」

ゴスッ

訂正、馬乗り状態もといマウントポジション

隙だらけの白の顔面に渾身の右ストレートが決ま……………らなかった

今の音は……………

「つう~~~~！」

思いっきり床を殴った音

拳が真っ赤になっている

「…………治療しに行きましょう……………」

また無反応な白にさらに傷つく

（ボクって、そんなに魅力ないのかしら…………）

そんなことはございません。作者の中ではトップクラスでございます

「ボクが外に行くと、みんなに迷惑が……………」

「……………では、ここで治療しましょう……………」

ここで登場びゃつくんかばん！

内容物は6話のモノだけではなかったのだ！

ゴソゴソ

「……………ボクの錯覚かしら？今、そのかばんの体積よりも、
大きなものが……………」

あえて言おう！四次。空間であると

「…………手、見せてください…………」

白が取り出したのは応急セット

「……………」

「……………」

無言で消毒や包帯を巻いている白

顔が真っ赤な詠

「……………終わりました……………」

「あ、ありがとう……………」

「……………ヒビが入ってるかもしれないので、急な運動は避けた方がいいです……………」

「そ、そう？善処するわ……………」

顔を真っ赤にし恥じらうその姿、マジでお持ち帰りイイイイイイイイイのだが、そこは白クオリティー

「ね、ねえ」

「……………なんでしょう……………」

「天の世界について、そ、その、もうちょっと、聞かせてくれな
い？」

「……………いいですよ……………」

それは知的好奇心ゆえか、それとも……………

「びゃ、白の両親はどんな人？」

それは天の世界ではなく白の事です

「……………分かりません……………ただ、師匠には死んだと聞か
されました……………」

「そ、そう、悪かったわね？」

「???」

地雷が地雷じゃない白

「じゃあ、慶亜との関係は？」

もはや恋ばな

「……………友達、です……………」

「そ、そう」

何故か安心してゐる詠

（な、なんで、安心してんのよ？ボク……………）

自分でも分かっていない様子

「じゃ、じゃあ、あなたの言葉の中によく出てくる、師匠ってどんな人？」

「……普段は温厚ですが、キレると……あたり一面が、荒野になります……」

人か？それ人か？

「……あと、僕が習っていた武術で、歴代最強と、言われています……」

「あ、あんたより強いのか？」

「……僕は、片手であしらわれます……」

「どんな人間よ……」

それは人間ではありません。怪物ちーとと書いて反則かいぶつとも読みます

「そ、その、かばんの中身見せてくれない？」

「……いいですよ……」

「……これは？」

「……シャープペンシルです……天の世界の筆です……」

「じゃ、これは？」

「……孔子の本です……」

「孔子ってあの？」

物欲しそくに本を見つめる

「……いりますか？……」

「え？いいの？」

「……僕は、覚えたので……」

「こ、この量を？」

「……はい……」

「じゃ、じゃあ、ありがたく頂くわ」

少々ほくほく顔な詠

「これは？」

「……手回し式懐中電灯です……」

「懐中電灯？」

「……はい……ここを押すと、光が出ます……」

「……」

ポチ

「ひゃわ!!?す、すごいわね?」

もう結構な時間。少々の光でもびつくりするぐらいの

「……それも、差し上げます……もう一つ、あるので・
」

「い、いいの?」

「……つかなくなったら、横についてる、それを回して下さ
い……」

「あ、ありがと……」

□

□

「きよ、今日はありがとね?」

「……僕は、本を読んでいただけです……」

「そ、そう?……また、お話し出来るかしら?」

消えかかりそんな声で言う詠

「……………機会があつたら、でしょう……………」

「そ、そうね。じゃ、またね？」

「……………はい、また……………」

パタンッ

部屋の中で一人悶える詠

（うゝ、なんであんなこと言つたんだろ？うゝ）

詠もなかなか……………鈍感であつた

後日、白と顔を合わせると顔を真っ赤にした詠の姿があつたような
なかつたような……………

……………
空虚、不幸なフラグをへし折つた……………天然で……………

閑話：不幸な一日（後書き）

詠さんにフラグを立てた白君

大丈夫です、ハーレムにはなりません

ハーレムになっていいのはこの世界では種馬君だけです

もうすこし、閑話が続くのかな

では、次回も宜しく願います！

16話：『思つ』（前書き）

すみません・・・閑話を持たせることができませんでした・・・

・

な・の・で・・・あれに入りたいと思います

あれです、あれ！

では、どうぞ！

16話：『思つ』

大陸に激震が走る

漢王朝第十二皇帝・靈帝、没す……

それを皮切りに、大將軍何進と十常侍による暗殺劇が幕を開けた

靈帝の後継者が暗殺され、何進が暗殺され、張讓くそへんたいえろじいが董卓に暗殺される

そんな折、混乱に乗じて実権を握った、いや、握ってしまったのが董卓……

□

□

「帰ったで〜」

明るく、気丈に言う霞

「……ごめんね？こんなクソじじい殺すために、手汚させちゃって……」

「構わんわ。こんのくそじじい頼まれたらいつでも殺したる思ってたんよ」

張讓しやうりやうに一瞥ひとくはして……

「月は？」

「詠ちゃん!!」

抱きついてくる月

その顔は、儚げでもう泣いていた

「大丈夫だった？この張讓しやんじやないへんたいになにもされなかった？」

「……うん……でも……」

「分かってる……もう、乱世の幕は上がったわ……」

「ごめんなさい!」

「……月、それ以上言ったら怒るわよ？」

「詠ちゃん……」

「……大丈夫、月は私たちが護るから……」

「うう……うあああああああ!」

もう、乱世の幕は上がった

それはもう止まらない

なら、この賈馮文和が引きずりおろしてやるまで

絶対に、けがさせない……………どんなことをしても……………

□

□

「……………みなさん、ただいま帰りました」

みなさんのアイドル月様が帰ってきたよ！

「董卓様！御無事ですか！」

「……………お帰り」

「お帰りなのですぞ！」

「お帰りなさい！」

「……………お帰り、なさい……………」

月の帰還に喜ぶ一同

「……みんなに言うことがあるの……」

詠が言いにくそうに言う

「……これから、多分、袁召^{はか}あたりが変ないちやもん付けて、ここに攻めてくるわ……だから……」

「……いつちやだめ」

「え？」

「どうせ、逃げるとかゆーんやろ？」

「馬鹿か？お前馬鹿か？」

「華雄には言われたくない！」

「ど、どうゆーいみだ！」

「そーゆー意味よ……」

「……ギャグは置いときましょうね？一応シリアルなんだから……」

「ま、馬鹿やな」

「……ばか……」

「馬鹿なのですぞ！」

「な！？みんなまで！！！？」

「降りるわけないやん？」

「・・・みんなで、護る」

「そうなのです！」

「お前一人に任せるわけにもいかんだろう？」

「け、けど・・・袁召だけならまだしも、他の諸侯も来るわ！
そんなことになったら・・・」

「・・・関係ないやん」

「え？」

「もういいって！な？強がるんやない！みんなで護る！決定事項
や！」

「・・・みなさん・・・」

「けど、白たちは？」

一斉に視線が向けられる

「・・・私は、力になれないかもだけど・・・残ります・・・」

「

「いいの？」

「決定事項です」

「そう・・・なら・・・」

「・・・礼には、礼で返せと、師匠に言われました・・・」

「白もいいの？」

「・・・はい・・・」

「そう・・・」

「みなさん・・・ありがとうございます！」

涙を眼にためて、それでも震える声でなんとか言った月

「・・・それに・・・」

白が続ける

「・・・友達は、大切にしろと、師匠に言われました・・・」

「白さん・・・」

□

□

なぜ、残ろうとしたのか分からない

師匠の言葉なんて破ればいい

偽善だ・・・・・・・・

それでも、“夢”の女性と月さん

二つの関係が気になった

初めて・・・・・・・・“大切にしたい”と自分で“思えた”・・・

・・・・ただ、それだけのこと・・・・

の芽・・・・・・・・
空虚に芽生えた小さな感情。小さくとも大輪の花

16話：『思う』（後書き）

やった！やった！やった！

白君に、感情が……芽生えたあああああ！

早計すぎるかもしれませんが

まだ、一つです

人間の感情が一つな訳ないですよ？それも、小さな小さな一欠けら。いつ消えてしまうとも分からない……

という訳で反董卓連合編……開始だ！

さあ、覚悟はいいか？連合ども？……ウソです調子に乗りました

ウソかな？嘘であってウソじゃない……？

ここで大切なこと

“結構”強いけど、チートじゃない。これ大事

遥かにきつい状況は覆せない……負けフラグ？いや、死亡フラグ？

こんなときに大切な、ご都合主義カード

フフフ……さて？カードは揃ったぞ？

17話：？水関の戦い（前書き）

戦闘かな？

では、どうぞ！

17話：？水関の戦い

「うは、どこからこんなにきたんやろな？」

「そりゃ、いろんなところから決まっているだろう？」

「わかつとるわ。ただ、口に出して言うただけや」

「・・・・・・・・」

？水関の上に立つ三つの牙門旗

『張』『華』『白』

この三つの部隊がまず、？水関で相手を抑えることとなった

「それにしても、悪趣味な鎧着とるの。金と銀とか、マジないわww」

風に揺らめく『袁』の牙門旗

そのほかにも、『曹』『孫』『劉』『馬』

大陸の名のある諸侯が勢揃い

それでも中々攻めてこない

知っている人は知っている、あの馬鹿たちが馬鹿やっているのだろう

□

□

一刀side

？水関にゆらめく三つの牙門旗

『張』『華』・・・そして『白』

なんで！？そうおもった・・・

華琳も説得しようとしてみた

「私情を挟むのはやめなさい。昨日仲間だったものが今日は敵になっっている、それがいつの世も連綿と繰り返されるの」

「でも！白は悪い奴につくような・・・」

「割り切りなさい！」

一蹴された

空を見る

「……なんでだよ……白……」

友の言葉が、風となって戦場を吹き抜ける

□

□

「むぐぐ！くっそ、あいつ今おりてあの首たたき切ってやる！」

「ちょ、まちいや！詠は籠城せえゆうてたんやで？」

「しかし、奴らは私の武を侮辱した！万死に値する！」

そう、今外で関羽と孫策が華雄を関から引きずり降ろそうと、端的に言つと華雄を馬鹿にし始めた

「華雄！この腰拔けめ！」

「私の母に負けた……」

「うがー！もう我慢ならんぞ！」

「だから、ダメやって！びゃっくんからもなんかいったってや！」

「……華雄さん、落ち着いてください……」

「普通やな！」

霞が白に突っ込みを入れている瞬間に

「華雄隊！いざ、出陣！」

おおおおおおおおおおおおおおおお！

「くっそ、あの猪が！」

「……霞さんは、関の兵糧を持って、虎牢関まで下がってください……」

「ええけど、びゃつくんは？」

「……僕は、華雄さんを連れ戻します……」

「無茶やで！？それにまた、けちゃんを泣かすつもりかいな！」

「……？……大丈夫です……」

このやり取りをしている間にも、敵が攻めてくる

「……分かった……絶対に、生きて帰ってこいや？けちゃんなかせたら、ぶつとばすからな？」

苦渋の決断だった

「……はい？」

「じゃ、ウチはいくで……生きて、帰ってきいや?」

「……はい……」

□

□

華雄 side

「グッ!!?」

「こんなものか!」

「ほざくな!」

ブオンッ

(関羽……ここまでとは……)

華雄が相對するのは、関雲長

そして、負けていた……

「ハアッ!」

ブオンッ

大ぶりの攻撃は当たらない

しかし、小ぶりの攻撃を出そうにも、もう体力はそんなに残っていない

血を流し過ぎたのだ

（私は……ここで……終わる？）

諦めが頭をよぎる

「……しかし、負けれんだ！」

「何故、貴様の様な武人が悪政を布く者の下に居る？」

「……悪政？」

聞き覚えのないことだった

洛陽の街はいつも活気に満ちあふれ、人々の顔には精気が宿っている

第一、主である董卓が悪政を布くわけがない、そう確信していた

「なんだ？もう諦めたのか？」

「……貴様らが……貴様らがあああああああああああ
あああ！」

「なッ！？クッ！」

「貴様らが、董卓様を、悲しませたんだ！哀しませたんだ！なにが悪政だ！」

「クウ！？」

「貴様らの大義名分のために、死んでいい御方では、無い！」

「クッ、調子に乗るな！」

「クア！！？」

武器を取り落とす

それでも、華雄には退けなかった。いや、退きたくなかった

その眼は死ぬ覚悟・勝つ覚悟、二つが混ざっている

「たとえ、この身がいつぺんの肉片になろうとも、貴様らを止める！」

突貫する華雄

しかし万が一の勝機を取らせるつもりはない関羽

「桃香様の理想のために、散れ！」

「…………散らせませんよ…………」

ガンッ

「・・・・・・・・友達は大切にしろと、師匠に言われました・・・・・・・・

」

「・・・・・・・・白・・・・・・・・」

そこには、自分を友と言ってくれる男の姿が・・・・・・・・

□

□

「お前は・・・・・・・・御使い殿！？何故？」

「・・・・・・・・なんとなくです・・・・・・・・華雄さん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・すまない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・今から、ここを突破します・・・・・・・・」

「へ？」

「突破させると思ってるのか？」

青龍偃月刀を構える関羽

「…………『邪魔』ですよ、どいてください…………」

「突破させないと、いったんだ！ッ！！？」

急に白の雰囲気が変わる

白から黒に、透明から有色に変わるように

「…………『邪魔』、退け…………」

「退かん！」

「『風林火山・雷霆』」

高速移動、突然白の位置が変わる

「な！？」

「『草薙ぎ』」

鎌のような脚が関羽の頭を襲う

「グッ！？」

「『風林火山・火』」

拳打の猛攻

関羽を倒された兵士たちは、ただ走り去っていく白を見つめること
しかできなかった

□

□

曹操 side

「あの子、関羽を倒したわよ？本当に、あなたと一緒に世界の人
間？」

「……ああ、本当だ」

一刀でも普通の兵士よりは強い

けど、武将ともなると手が出ない

それを、あの子は……

「……やっぱり、欲しいわね……」

けど、何か引つかる……

あの子には、誰にでもあるものが無い……いえ、欠落している

ような……

「一刀、あの子と一緒にいて、何か違和感を感じなかった？」

「……強いて言えば、感情表現が乏しいことだ」

「……そう……いつまでもウジウジしていたら、首刈り取るわよ？」

「……ああ、すまない……」

「……はあ、ほんとにもう……」

何がどうなっているのやら？

□

□

関羽 side

負けた。ただ、手も足も出ないうちに負けた

自分の無力が恥ずかしかった

相手は『邪魔』で私を退かせたかっただけ

そんな奴相手に、齒も立たなかった

情けない、情けない、情けない、情けない

．．．．．そして．．．．．悔しかった

恥ずかしさよりも、情けなさよりも、ただ悔しかった．．．．．

自分に力があると思っていた自分が．．．．．

一人の人間も止められない自分が．．．．．

桃香様の理想を支える力が自分にないことが．．．．．

「うう．．．．．うあああああああああああ！」

．．．．．強く、なりたいた、願った．．．．．

ただ『邪魔』。退かないなら、退かせるまで．．

．．．．．

17話：？水関の戦い（後書き）

関羽さんに勝っちゃったよ………どうしょ………

ま、まあ、夏侯惇さんにも勝ってるし、今さらですよね？

まあ、白君の口調が変わった瞬間がありました

………なんでだろう？

ま、まあ、いいでしょう

では、次回も宜しくお願いします！

18話：虎牢関の戦い（前書き）

遅れてすみません

リアルの方と、もう方っぱが熱くなってきたので

では、どうぞ！

18話：虎牢関の戦い

華雄將軍が単隊で突撃

あえなく撃破され撤退。？水関は陥落

しかし、白が倒した関羽の実力を知る者は驚愕し、士気が下がった

完全包囲、完全有利、まさに圧倒的

それを覆されることは万に一つもない……誰もがそう思っていた

現れた白は、それを撃破し

突破ではなく、通過していった

ただ、それだけのことだった

□

□

「おお！よう帰ってこれたな！」

「無事でも無事じゃなくても泣くんやなあ？それほどびゃつくんにほ」「うわあゝ、いい天気だなあ！」「ほれ」「あ、あんなところにお酒」なんやと！？どこや！？」

「……………どうするんですか……………」

また、白が話を戻す

「敵の数はどのくらいなのですか？」

軍師ちんきゅゝここにあり！

「……………ざっと、二十万ぐらいです……………」

「倍やんけ！」

十万対二十万

それも相手は？水関を破り意気揚々

「本当にすまないと思っている！」

あ、ジャックだ、と笑ったのは慶亜だけ

「……………飛車落ち、ですか……………」

まさに王手飛車角落ち

盤上の遊びならまだ挽回は出来る可能性は無きしにもあらず

だが、ここは戦場

「……………詰み、ですかね……………」

はつきり言つとこの戦に勝ちはない

負けたらそのままの汚名を着せられ、生き残るなど万が一にもありえない

勝つても、一度広まつた風評は収まらない

他国との交易も断たれ、孤立することになるだろう

そして、また力が増大した連合が攻めてくる

それも、永遠に……………

「よっしゃ！最後に一花咲かせたるか！」

「……………負けない……………」

「よし！私もY「華雄は寝てろ」うう……………」

「……………行きますか……………」

□

□

最初は感慨と踏ん張りで拮抗していた戦場だった。が徐々に押され始めた董卓軍

そこに対峙する四つの影があった

「相手は人中の呂布か……手ごわそうですね？」

「手強いどころではないぞ！ 気を引き締めていけ！」

「おお、強そうなのだ！」

「……」

呂布に相對するのは、趙雲、関羽、張飛

どれも、一騎当千の猛将だった

「……来い……」

「三対一は不本意であるが」

「桃香様のためだ！」

「いつくのだ！」

「……恋、行く……」

両者の獲物がぶつかりあった・・・・・・・・

□

□

戦場をただ歩く白

「我が主のために・・・・・・・・死んでもらう！」

「思春ばかり楽しんじゃだめよ？」

「ほんと、策殿は・・・・・・・・」

そこに、袁術配下の三人がやってきた

「・・・・・・・・」

「あら？無口ね？」

「油断なされるな？夏侯惇を倒したと噂されているほどだ」

「・・・・・・・・チャキツ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・戦うの、ですか？・・・・・・・・」

「あら？分からないかしら？まあ、こっちに降ってくれるならすぐにはすむのだけだね？」

「…………董卓を殺しますか？…………」

「そりゃあね？それが大義名分だもの」

「…………なら、戦います…………」

いつも魚の死んだ目の様な感じの白の目に、少し光が宿った

「来るぞ！二人とも構えろ！」

シュシュッ

一息に三射される矢

それをギリギリでかわすとそこに

「シッ！」

避けただけの無理な体勢に甘寧の曲刀が迫る

それを…………素手で受け止める

「何！？」

「…………痛いんですね？けど、それだけの様です…………」

刀ごと投げ飛ばす

「驚いたけど、これで拳は使えないようね？」

掌から滴り落ちる血

「……まだ、握れます……」

「……そ、あなたをそこまで必死にさせる理由は分からないけど、ここで退場してもらおうわ」

また矢が飛んでくる

それをかわし、孫策に突貫する

それを許してくれるはずもなく、振られる刃

「……クツ……」

それをなんとか躲すが、無理な体勢の変化に体が悲鳴を上げる

「『風林火山・雷』」

思い切り大地を蹴り、高速移動する

それでも多勢に無勢

体中に傷が出来た

「驚いたな……ここまでできるとは……」

「ねえ？一緒に来るつもりはない？」

「・・・・・・・・・・ないです・・・・・・・・・・」

「そ、なら力づくね？」

降られる刀の峰

諦める？

諦めない？

絶望する？

絶望しない？

思う？

思わない？

信じる？

信じない？

護る？

護らない？

眞実を

人生を

命を

気持ちを

心を

慶亜さんを

月さんを

詠さんを

霞さんを

華雄さんを

恋さんを

ねねさんを・・・・・・・・

「あるえ？誰が、あたしの白君をイヂメてるのかなあ？イヂメて

いいのは、あたしただぞ？諸君？」

聞いたことのある声

毎日一緒に

毎日負かされた

毎日襲われかけ

毎日一緒にご飯を食べた

「貴様！？誰だ！」

叫ぶ黄蓋

「あたし？どうしたい？教えて欲しい？どうしよっかな？」

この相手をおちよくる様なしゃべり方

「まあ、教えてあげようか？めんどいけどね？」

気まぐれな性格

「本多流掌術・現当主……・名前は、本多明……・」

どこまでも優しく

なんでも受け止め

笑って過ぐし

時々鬼の様に怖い

「……………そこでボロボロにされてる白君の……………」
・母親だ!」

自分の事を息子のように育ててくれた女性

「……………師匠……………養母です……………」

そこには、全てを受け止める母の姿が……………」

母、全てを背負い、戦場に降り立

つ

18話：虎牢関の戦い（後書き）

ここですか！？出しちゃったよ、切り札……

明ちん登場です

おい！左慈たちどした！？というかた

閑話を挟もうと思ってるのでよろしくお願いします

本当のチートはこの方と恋さんです

次号、この方が戦場をひつかきまわします（多分）

では、次回も宜しくお願いします！

閑話：師匠、起つ（前書き）

え、言っていた通り閑話です

・・・ギャグ、かな？

さらに言うと、あいつらのキャラが崩壊します

誰かは・・・まあ、見てください

では、どうぞ！

閑話：師匠、起つ

あたしの名前は、本多 明

ピッチピチの。代だ！ふふ、秘密だよ？

「はあゝ……白君、どこ行つたんだよ」

白君が蒸発してから、もう数カ月になる

もう、白成分が足りなくて、イライラしてきたよ

「おい！」

「ああん！？」

おつと失礼、イライラしすぎていたようだ

「貴様、本多 明で間違いないか？」

「間違いだよ」

「そんな訳あるか！ここに写真が」

「あ、ウソ。あつてるよ」

「きつさまあああああ！」

ふふ、この子かあいいなあ・・・よし、イチメちゃおう！

「まあ、落ちついてくださいよ。左慈」

「だが、コイツが」

「ふう・・・してご婦人」

「まだ、結婚していないんだけど？」

「おや？お綺麗なのでもうしているのかと・・・一人身でしたか・・・」

馬鹿にしたように言う、イラッと眼鏡

「え〜と・・・眼鏡くん？何か御用かな？」

棘が混じる

「まあ、端的に言うと人質になってもらいたいのですよ」

「人質にするのにたのむのか？頭、大丈夫？」

「真剣に聞かないでくださいよ。まあ、あなたは、本多 白の師匠ですからね？戦闘は避けたいのですよ」

なんで白君の名前を？っていうか何故あたしの名前を？

まあ、どうでもいいかってよくない！

「眼鏡くん？どこで白君とあたしの名前を？」

「私の名前は于吉です」

「左慈だ……………」

「コスプレの名前？」

「違う！」

「じゃあ、頭にウジでもわいた？」

「違うわ！？」

「じゃあ、最初っからウジがすんでいる？」

「……………殺す！」

「まあ、落ちついて」

于吉と左慈って三国志の？頭が沸いてるとしか思えないな

面白い方向にだけどね？

「で？その于吉君と左慈君が、あたしに何の用？」

「今さっきも申しあげましたが、人質になってもらいたいのです
が……………」

「なめてんのか？てめえ！って言ったら？」

「…………力ずくということになりますね…………」

物騒な光が瞳に灯る

「まあ、その前に理由を聞かせてもらおうか？」

「…………外史を消すためですよ」

冷酷な微笑を浮かべる于吉

「外史？」

「そうです。この世界というものは、無数の選択によって成り立っている。その分岐の一つの世界の事だと思ってください」

「なるほど…………パラレルワールド的なものか…………で？
それとこれとどう関係が？」

「その外史に、異物が混ざってしまったのですよ」

「…………白君、一刀君、慶亜ちゃんか？」

「おお、察しがいいですね？」

「…………君は、その外史とやらに行く力があるのかい？」

「あるからこうしてここに居るのですよ」

「…………分かった」

「人質になってくれるので？」

馬鹿か？コイツ？

「連れていかれるんじゃない、連れていかせることにしたよ」

「……そうですか、ならばこちらも力ずくの方角になってしまいました」

「死にさせええええええ！」

馬鹿みたいに突っ込んでくる左慈君

「結構速いね？君」

けど……師範代クラスかな

師範代でもそれなりに強いんだけどね？

馬鹿なことを考えていると、左慈君の脚が振るわれる

ゴッ……

「うん……どのくらい、イヂメて欲しい？」

「馬鹿な……」

「馬鹿ではありませんよう？どちらかというと、エロです」

まあ、端的に言つと振るわれた右足を掴んだだけ

「ふっふっふ……ここからは有料放送だよ？みたいなら、百円払おうね？」

「ちょ、何をする……………アッ……………」

（18禁の為此の小説では流せません。」ご了承ください）

「左慈……………」

「クスン……………お婿に行けない……………」

いつものキャラが崩壊している左慈

何があつたかは……………推して図るべし……………

「クッ……………こうも簡単にやられるとは。次は私が相手です」

「次は理系か……………こう、眼鏡をクイクイってやってみて？」

「こ、こうですか．．．クイクイツ．．．」

その様は、めっちゃにあっていたという

「ふっふっふ．．．さあ、遊んであげるよ?」

「フッ!」

飛ばされる法術（火属性）

「うは、まさにイリュージョン!けど、甘いなあ?」

それを普通に避け一気に近寄る

もともと体術は得意ではない于吉

近くに寄られればなすすべもない

スッ．．．．．

「め、眼鏡?み、見えない!?!見えませんよ!?!返して下さい!」

「ふっふっふ．．．では、みんな、百円払おうね?」

「ちょ、何をするんです．．．．．アッ．．．」

（18禁の為此の小説では流せません。」了承ください）

「クスン．．．．．左慈に見られた．．．．．」

「気色の悪いことを言うな！」

「で？まだする？」

「いえ、勘弁して下さい！」

「心外だな？お姉さんまだまだだよ？」

「あなたはお姉さんという年齢じゃなかったはず．．．．．」

「くつくつく．．．．．なんか言っただ？」

「ブンブンブン」

必死で首を横に振る二人

「で？連れて行ってくれるの？」

とびつきりの笑顔で言う

「はい！我が身命にかけても！」

逆におびえられたよ・・・

「こ、こちらから、行けますすはい・・・・・・・・」

ガクブルしながら言う左慈

「あ、そうだ。どんな外史なの？」

「三国志の世界ですはい」

「正史との違いは？」

「有名どころがほぼ女性ですはい」

白君に魔の手が！？

「で、そこでの三人の立場は？」

「『天の御使い』と呼ばれてますすはい」

「『天の御使い』？」

「戦乱の世を治めるといわれているですはい」

そんな大層な立場に居るんだ。へへ

「で？今はどんな状況？」

「今、あなたの白様が殺されかけておりますすはい」

「何！？じゃな！あたしは行く！転送先は今、白君がいるところにしてくれよ？」

「「あいまむ！」」

何もない空間に白い穴が出来る

「ありがとなー！また、遊ぼうなー」

「「断る！」」

待ってろ、白君！

□

□

「って、送っちゃったじゃねえか！」

「ガクブルガクブル！」

「于吉！どうするんだよ」

「……………もう、あの外史を消すの怖くてやりたくないのです
が……………」

「……………俺もだ……………」

なんだ？あのご婦人？怖いなんてレベルじゃない

「……………どうしますか？」

「……………どうするよ？」

……………私たちって外史消す以外、やることなかったんですね……………

「寂しい、役割ですね……………」

「自分の生活がいかにか空っぽだったか思い知らされたな……………」

「……………とりあえず、外史、行きましようか……………」

「……………そうだな……………どうせ、それ以外やることないもんな」

「寂しくなるようなこと言わないでくださいよ……………」

……………とりあえず、行こう……………」

白装束、外史消す以外、やることなし？

閑話：師匠、起つ（後書き）

白装束のキャラを十二分割してその一つ一つを十六分割した以上の
壊れっぷりでした

書いてて思いましたもん、こいつら誰？って

まあ、何をされたかはご想像にお任せします

という訳で、明が襲ってきた白装束を。。。して×××して無理や
り送らせたということです

明らかに無理がある！そう思われるでしょう・・・僕も思っ
ますから

まあ、それが僕のクオリティだと思って我慢できる方はしていただ
く方向で

では、閑話終了

次回も宜しく願います！

19話：虎牢関の戦い・2（前書き）

すみませんすみませんすみません！

学校って大変だ・・・

では、どうぞ！

19話：虎牢関の戦い・2

「いい年した大人が高校生イヂメちゃダメでしょ？」

「……師匠……なんでここに？……」

当たり前疑問だった

「ん？左慈君と于吉君が連れてきてくれたんだよ」

『無理やりだろうが！』

二人の心の叫びは無視をしよう

二人の心の叫びは無視をしよう

大事なこともないけど二回言いました

「それにしても……貴様等殺されたいようだな？」

明から濃密な殺気が溢れ出す

「あたしの白君傷つけて……手足の一本は覚悟しろよ？」

「こやつ、出来る！」

黄蓋の言葉が戦場に木霊した

「…………師匠…………それどころではないのですが……………」

「ん？どしたの？」

「…………全体的に負けてます……………」

「あたしのカラダが？」

「…………戦場がです……………」

周りを見てももう惨々たる光景だった

死体の山。そのほとんどが董卓軍の兵士で築かれている

「ん？どこどこ？」

「……………」

……………？

「…………あ！三国志か……………うん、虎牢関と見たよ」

「……………そうです……………」

「で？白君はどちら側？」

「…………董卓側です……………」

「そつか……で？この三人は？」

ここで人物説明を求めるのは流石だろう

「……孫策さん……」

「はい」

「……甘寧さん……」

「……チリーン……」

「……黄蓋さん……」

「うむ？」

「うゝわ、マジで女なんだ」

ふむふむとあごに手をあてる明

「で？なんで白君をイヂメちゃってるわけ？」

「そやつが敵だからじゃ」

「よし、ならば戦争、だ！」

ダンッ

一気に地を蹴り接近する

「フッ！」

ポッポッヒュッ

軽いジャブが黄蓋を襲う

「クッ！」

それを避け黄蓋から矢が放たれる

「はっはっは！甘い甘い！チョコラてのように甘いよーニョー！」

矢を地に伏せるようにして避けまた地を蹴る

「祭だけじゃないわよ！」

「……師匠だけでもありません……」

横撃しようとした孫策を白が止める

「雪蓮様！」

「私はいから、祭の方手伝ってあげて？あっちの方が辛そうだし」

見ると大分押されている黄蓋

「……分かりました」

「ヨッ！ホッ！」

上段蹴りからの後ろ回し蹴り

「クッ！？ふざけおつて！」

「ふざけて欲しくないなら、もっと強くならなきゃね？」

「クソッ！」

「ラ。ダーキック！」

遊んでいます、子供のように

「…………こっちは、真剣にやりましょ？」

「…………はい…………」

構える二人

「……………行きます……………」

先に動いたのは白

それに合わせるように振るわれる剣

それを左に避けると次は右足が

今度はしゃがむようにして避け、地を這うようにして間合いを詰める

孫策にとって無手の間合いは未知……しかし……

「…………あははははは！楽しいわね〜！」

いきなり高笑いを始める孫策

その姿はまるで…………

「…………戦闘狂……………」

今の孫策にはそんな言葉がぴったりと似合っていた

ヒュヒュヒュッ

実直な剣筋に時折混ざる

ヒュッシュシュッ

虚実の剣筋

「あはは！あなたと戦うの楽しいわね〜！本当に来ないの？」

「…………助けてくれるのなら……………」

「あら？あなたを？」

「…………董卓さんたちです……………」

今まで激しく動いていたのが急に止まる

「……………まあ、考えてみるわ。それであなたが手に入るなら、ね？」

妖しく微笑む孫策。その眼はまるでおもちゃを見つけたような子供の眼

「祭〜！思春〜！大丈夫〜？」

「大丈夫では……………ないな……………」

「……………クツ……………」

二人は傷だらけ、方や明の方は

「ふっふっふ、はっはっはっはっは！」

馬鹿みたいに高笑いを始める明

土埃もほとんどついていない

まさに、余裕？

「……………あなたが来たら……………あの人もおまけ付き？」

「……………多分……………」

いや、絶対でしょう？

「……………そ、二人とも帰るわよ〜」

「む？いいのか？」

「いいのよ」

「・・・わかりました」

「ん？退くのか？」

興奮状態とろけずから戻ってきたようだ

「そうね・・・ま！また会うことになるでしょうけどね？」

それは、つまり・・・言及しないでおこう

「それに・・・」

関の方を見やる孫策。それにつられてみんなも振り向く

「・・・虎牢関も落ちそうだしね？」

関に連合兵が押し寄せている

落ちるのも時間の問題だ

ようするに・・・

「負けか？」

明がつぶやく

「まあ、気が向いたらいつでも来ていいわよ」

「……………はい……………」

小さな声で、しかしはっきりと聞こえるように言った

「じゃね」

□

□

戦場の一角

「かゝ！二対一はきつついで！」

張遼が対峙するのは夏侯惇、夏侯淵、曹操の二柱だ

「なら、さっさと投降しろ！」

「いやや、ゆうてんねん！」

「ならば、華琳様の命に従って力づくでもつれていく！」

「……………神速の張遼、いっくで！」

また、影がぶつかりあう

また、とある戦場の一角

「はあ．．．．．はあ．．．．．鬼神か．．．．．」

「つよい、のだ．．．．．」

「三人がかりでも、このざまとはな．．．．．」

ボロボロの関羽、張飛、趙雲

「．．．．．お前ら強い．．．．．けど、恋の方が強い．．．．．」

しかし、顔には出していないが呂布にも疲労がたまっていることは間違い

どちらに転んでもおかしくない勝負だった

間違いなく董卓軍は負けに向かって行った

それを覆せるのは不可能に近い．．．．．が、それを成し遂げようとする■がいた

「はっはっはっはっはっ！連合どもっかかってきなはれっ！」

「…………師匠…………どうしたんですか？……………」

「今ね？白君に会えて、最高にハイって奴だよ！」

そう言いながら、連合の兵を数十人単位で吹き飛ばしていく二人

「……………恋さん……………」

この二人が最初に発見したのが恋だった（ねねつき）

「……………白……………と、だれ？」

「白君？この子、誰？」

「……………恋さん、僕の師匠です……………師匠、呂布さんです……………」

この間、蜀の三人組は空気

「……………どうも……………」

「ほえ、呂布がこの形に収まるか……………不思議なこともあるもんだね？」

「……………き、貴様！何者だ！」

ここで、いち早く関羽が我に戻る

「ん？今の聞こえなかった？この子の師匠だよ？あと、名前教

えて欲しい時は、なんだっけ？」

「グッ………関羽だ」

「張飛なのだ！」

「趙雲と申す」

「………チツ、また女になってるよ………」

………裏明、降臨

「………恋さん、帰りましょう………」

「………でも………」

「………なんとか、なりそうです………」

「本当なのですか!？」

「………多分、です………けど、このまま戦い続けても、
負けは見えています………」

「逃がすと思っているのか!」

斬りかかってくる関羽

「うん、思ってる、よ!」

フオンッ

背面蹴りが関羽を襲う

「グッ!？」

「気絶してた方が楽なことだってあるのにね?」

体勢を崩した関羽に一直線。拳を引き……

「『空破』」

空気の破れる音。それに伴い凄まじい衝撃波が関羽を襲う

「クア!？」

崩れ落ちる関羽

「ふう………で?後ろの二人は?」

「……退かせてもらおう………鈴々、行くぞ」

「……分かったのだ……」

「それで、よろしい!」

明のアホ毛が風に揺れる

「よし、次はどこ?」

「……霞さんを……」

「今さっきから呼んでるそれ、なに？」

その名前を言わなかったのは称賛に値するだろう

「……真名と言って……」

説明中

「……ふん、おつそろしい名前もあるもんだね？」

「……張遼さんw「敵将、張遼を捕縛したぞ！」……無理みたいです……」

敵の勝鬨が聞こえる

「……諦めるの？……」

恋が白に聞く

「……分かりません……助けたい、けど助けられない……そんな状況です」

その言葉に明が少し驚く

（……白君が……ねえ？）

その表情は息子を見守る親の様であった

「……洛陽に、行きましょう……四人いますので……」

」

「えっと……北郷君とか？」

「……北郷君は……曹操さんの、ところです……」

「へえ、霸王のね？」

「……行きましょう……」

その後、数刻と持たず虎牢関は落ちた

関からは赤黒い煙が上がり、周りからは連合の勝鬨きが上がっていた……

負ける、負ける、負ける……負けた……

19話：虎牢関の戦い・2（後書き）

すんませすんませすんませすんません！

まじで、すみませんでした！

頑張りますので、これからも宜しくお願いします！

20話：『涙』（前書き）

最近、寝落ちが酷いです……。何故か先生にゲームとられた瞬間に起きるといっのが続きます……。鬱だ……。・

では、どうぞ！

20話：『涙』

虎牢関は落ちた

董卓軍は張遼を失い、選択肢は二つ

洛陽で徹底抗戦か

全ての元凶とされる董卓を引き渡すか

しかし、これは例外がいなければの話だ

「……………白斗……………急げますか？……………」

フルアアアア

「……………間に合え……………」

洛陽に向かって駆ける白い影があつた

……………その背中に、一筋の紅を流しながら……………

□

□

「白……どうだった？」

「……………負けました……………」

どんな能天気な奴でも感じ取れるほど、雰囲気というものが下がった

「……………白、ボクはどうでもいいから、月だけでも……………」
「

震える声を振り絞って言った

「……………詠さん……………」

「なに？」

「……………玉璽……………ありますか？……………」

「……………あるにはあるけど……………」

今何に使うのよ？といったげな顔だった

「……………多分、孫策さんが身柄を保護してくれるそうです……………」
「……………」

「ほ、ほんと？」

「……………多分です……………しかし、淘汰されるかもしれま
せん……………それでも……………いいですか？……………」

「構わない！月と一緒に生きられるなら！」

「……………なら、変装してください……………顔は割れていないとはいえ……………危険ですので……………」

「白さん！」

今まで黙っていた月が話します

「……………みなさんを危険に晒すわけにはいきません……………私が、命を断てば……………」

泣きそうな顔で、しかし覚悟を秘めた眼で言う月

「……………この世界はいつだって我がままで……………」

淡々と話します

「・・・・・・・・理不尽な選択を迫り・・・・・・・・」

頬に一筋流れる

「・・・・・・・・それが現実として連綿と続いて行く・・・・・・・・」

『涙』

「・・・・・・・・今のあなたの選択は・・・・・・・・」

それでも無表情で

「・・・・・・・・皆を幸せな現実に向導するのでしょうか？・・・・・・・・」

紡いだ言葉

「・・・・・・・・そしてあなたは、どんな選択をするのですか・・・」

「・・・・・・・・白さん・・・・・・・・私・・・・・・・・」

「白君がね？涙を流したよ・・・・・・・・」

「誰だ！？」

今まで隠れていた明。理由は

「その方が、なんかカッコいいから」

だそうだ

「ああ、そのこの母親兼師匠。本多・・・・・・・・」

「明さん!？」

「ちょ、そこは取らないでほしかったな……」

地面にのの字を書きだした明

「す、すみません」

「いいよいよ……」

「で、白の母上殿が何故ここに？」

「……養母ですよ……」

問う華雄、付け加える白

「……いろいろあつて、ね？」

「……こ、この人が、白の師匠……」

逸話を思い出し一人ブルつてる詠

「あ、あのあの、白さんにはお世話になってます……」

「ん?……ッ!？」

「ど、どうかしましたか？」

「白君……この子は？」

「…………董卓さんです…………どうかしましたか？…………
・師匠……………」

「…………いや、ただ君の母親に似てるなって……………」

『え？』

衝撃発言

「…………師匠、それはどういう……………」

「…………まあ、詳しくはここから逃げてからだね？で？董卓ちゃん
は白君が言つた通り、どんな選択をするのかな？」

「…………私は……………みんなと一緒に生きたいです！」

「じゃ、速攻で準備ね？はい、急いだ急いだ！」

「ひゃ、ひゃい！」

蜘蛛の子を散らすように去っていく各々

「…………師匠、それはどういう……………」

「…………あとからだって……………」

「…………どう…………い…………う……………」

倒れる白

「白君！？・・・・・・なんでこんなに血が？」

実はあの戦いの中で一撃もらっていた。それをなんとか気力で持たせていた白

「・・・・・・名前だけ教えておくよ・・・・・・」

手当をしながら話す

「君の母親の名前は・・・・・・本多 月詠だ・・・・・・」
つぐよ

「・・・・・・つく・・・・・・よ・・・・・・」

「そうだ、もつと話聞きたければ生きろよ？」

「・・・・・・はい・・・・・・」

そうして、目を閉じた白

「妬いちゃうな？月詠・・・・・・お前の事考えて、こんなに“笑つてる”ぞ？」

人から見たらそんなに笑っていない、が白を知っている人から見たら“こんなに”笑っている白は見たことがないだろう・・・・・・

「・・・・・・お母、さん・・・・・・」

た、
感情

『涙』 心からの感情の搾りかす。 心で消化できなかった

20話：『涙』（後書き）

レン君よ・・・・・・・・永遠に・・・・・・・・

母親の名前でできました。名前はあれとあれを組み合わせたらあれな感じになりました

てゆーか、もはやこれ白君か？

涙の回想は白君も気づいていなかった方向でお願いします！

では、次回も宜しくお願いします！

21話・ゆびきり（前書き）

反董卓連合編はこれで終了だと思われま

すでは どうぞ！

21話：ゆびきり

「おゝほっほっほ！さあ、私に華麗なる勝利を献上なさい！」

袁召^{ばか}が高笑いしているころ

月たちはすでに洛陽から脱出していた

しかし脱出しただけでは大陸中に指名手配されてしまう

一番の悩みどころでもあった

「ちょ、麗羽！？そのまま突き進んだら民に被害が」

「関係ありませんことよ？華琳さん」

袁召^{ばか}が馬鹿やっているころ

すでに物語は動き出していた

□

□

時間は少し遡る

白たちは洛陽を抜け出して、恋たちとも合流していた

今、孫策のところに行くのは無理があつた

したがってどこかの村に滞在しながら江東を目指すのが得策であつた

「白……大丈夫でしょうか？」

心配そうに聞く慶亜

ほかの者たちも心配そうであつた

「ん〜、大丈夫なんじゃないかな？ただ、血が少し足りてないからなんか食べさせてあげないとね」

端的に言つと出血による貧血であつた

「だ、だったら早く村に……」

「ん〜でもね？このままだと君、指名手配されちゃうかもだよ？」

「……でも」

「分かつた分かつた、あたしが孫策ちゃんのところ行つて話しかけてくるから、玉璽持ってきた？」

「はい……」

「ん、OK。じゃ、行ってくるからね？白君が起きて心配したら、君の愛しのマミーは大丈夫だよって言ってあげて」

「……とことんふざけ通す明

「あと、話の続きは再開してからねって」

「……明さん、なんで私たちのためにそんなにまで？」

「それは……君たちが白君の『友達』だからだよ」

理由はそれだけ、と付け加える

「じゃ、近いうちに会えると思うから、ちゃんと陽州めざすんだよ」

「はい」

馬を駆り瞬く間に姿が見えなくなる

「……白さん……」

□

□

洛陽に向かう明。そんなとき巨大な陣営が見えた

「お！発見。外套被ってつと……」

呉にはもちろん、蜀にも顔が割れ、魏には一刀がいる

「ま、ばれたってどうってことないんだけどね？」

軽々逃げれるだろうと余裕な明

「あれ？こーゆー奴に限って捕まったりするんじゃない？捕縛フラグ？」

そう言いながら陣営に近づいて行く

「止まれ！貴様、何者だ！」

お馴染み、鈴の甘寧さん

「孫策ちゃんに用があるんだけど、君にはないな」

別に挑発をしなくてもいいものを、え？素面？

「貴様……死にたい」これこれ「それは！」

玉璽を見せびらかす

「で、孫策ちゃんに用があるわけ」

「…………こい…………妙な真似をしてみろ？すぐに首を撥ねてやる」

「…………ボソ（できるものならね〜？）」

「なんか言ったか？」

「言っていない言っていない」

そうやって陣営の中に入っていく

中に入ると兵から奇異の目で見られていた

（なんだこれ？羞恥プレイか？）

Sでもありエロでもあり、少々Mも混じっている明だった

「ここだ…………入れ」

「はいはい」

力チャ

中に入ると孫策と黄蓋、あと見たことのない黒髪美人がいた

「ん？思春？その人誰？」

「それが……………」

ここまでできながら顔も見れていないことに気がつく。余程玉璽を見

て興奮していたのだろう

「あたしだよ」

外套を取る

「あら？」

「貴様は！？」

「ふむ」

「誰？」

「君、えつと甘寧ちゃん、武器をおろそう」

顔を見た瞬間に武器を構えた甘寧

「あなたが来たってことは、来てくれるわけ？」

「ちよ、雪蓮？聞いてないわよ？」

「当り前よ、言っていないんだもの」

「して、他の者たちは？」

話を元に戻す黄蓋

「あゝ目立つじゃん？だから、今陽州目指してもらってるよ」

「それなら、何故あなただけ来たの？」

孫策から話を聞き状況はつかめた周瑜が問う

「このまま逃げたら、董卓ちゃん達指名手配的なモノになっちゃうじゃん？」

「それは、そうね」

「で、噂を流してもらいたいわけよ……董卓たちは我々が討ち取った的な？」

「お安い御用よ。けど、今私たちは袁術ちゃんの配下だからね？」

顔は笑っているがこめかみに青筋が浮き上がってる孫策

「あゝ、そつか……ま、何とかなるんじゃない？あの袁^は召^かちゃんの血筋と同じなら相当な馬鹿なんですよ？」

『確かに』

そこに異論はないようだ

「で？引き受けてくれるの？」

「もちね？」

「じゃ、お礼としてこれを差し上げよう」

「それは！」

「そそ、玉璽。欲しい？」

「」「」「ブンブンブン」「」「」

ハチがとブン

「はいどーぞー」

「これで、宿願への一步に……」

なにやら物思いにふけっている孫策たち

「あゝ、出来る事なら、事は早く起こしてほしいんだけど？」

「わかったわ。冥琳」

「あい分かった」

「それで？あなたはどつするの？」

「どうしてほしい？」

「………掴みどころないわね？あなた」

「よく言われませんよ」

「はあ」

「…………私の気持ち、少しは分かった？」

孫策の方にポンスと手を置く周瑜

「ん？なにが？」

「……………」

Orz

「じゃ、いなさいよ。すぐに帰れると思うから」

「お言葉に甘えさせてもらおうかな？」

白たちが陽州に着けるかどうかは、天運任せとなりそうであった

□

□

「……………ん？師匠は？……………」

「白ううううう！」

「白さん！」

「白！」

「無事か？」

「……………大丈夫？……………」

「やっと起きたのですか」

目が覚めた白

いつもの勢いで抱きつこうとした慶亜だが病みあがりなので自重した

「白さん……………よかったぁ」

「……………師匠は？……………」

「えつとお……………君の愛しのマミーは大丈夫だよ……………
だそうです」

「???」

理解できない様子

「……………今、状況はどんな感じですか？……………」

「ああ、今、陽州に向かっているよ」

華雄が答える

「……………そうですか……………」

状況はつかめた様子

「……………月さん……………詠さん……………」

「

「なんでしょう?」

「なによ?」

「……………すみませんでした……………」

「な、なんで謝るんですか?」

いきなり頭を下げた白に驚く二人

「……………約束を破ったら、謝れと言われました……………」

「白……………」

「……………白、誰もお前の事攻めてないよ?」

目を細めて言う慶亜

「みんな、お前が無事だったことが嬉しいんだ」

「???」

「よかった……………いつも通りの白ね」

いつも通りとはどういう意味だろう

「・・・・・・・・・・しかし・・・・・・・・・・」

「それなら、もう一つ約束すればいいんだよ」

「・・・・・・・・・・もうひとつ？・・・・・・・・・・」

「今度は、そうだな・・・・・・・・・・また霞さんも含めてみんなで集まるってのはどう？」

「・・・・・・・・・・わかりました・・・・・・・・・・約束です・・・・・・・・・・」

小指を差し出す白

それにつられて皆も差し出す

『ゆびきりげんまん、ウソついたらはりせんぼんの～ま
す、ゆびきつた！』

へ
・
・
・
・
・

約束を約束、ゆびきりで決意。また、あのとき

21話：ゆびきり（後書き）

なんか、中途半端な感じですけど

この中途半端さこそが僕たるゆえんです（キリッ

・・・偉そうに言うことありませんでした

まあ、前書きにもあったようにこれで反董卓連合編はこれにて閉幕となるようです

次回からも宜しく願います！

22話：新たな出発（前書き）

長らくお待たせというより、待っていて下さった方

お待たせしました

僕恋が終わりましたので本格的に始動します

白君の新たな出発と共に

では、どうぞ！

22話：新たな出発

その眼は紅く、髪は純白

女性の様な顔立ち

すらりと伸びた肢体

十人中十人が振り返る様な美貌を持った男の娘

我らが主人公、本多 白

彼は今、眠っている

深い眠りの中、記憶にない母の姿を思い浮かべている

「白、朝だよ」

「…………おはようございます……………」

最近では白と同じかそれ以上に早く起きるようになった慶亜

理由は、白の寝顔をみた（ry

（かわいい／＼／＼）

「……………どうかしましたか……………」

「い、いや、なんでもない」

「????」

今、白一行は、陽州にほど近い邑に滞在している

数週間かけてゆつくりと進んだ

急いでも目的地は逃げないからと

反董卓連合の混乱が収まるまで待つためだ

さらに各地にこんな噂が流れ始めた

『逆賊の董卓は、袁術率いる孫策たちが討ち取ったらしい』

おそらく、明が上手くやったのだろうとあたりをつけた白たち

その噂が浸透するまで待つためでもあった

その噂を聞いた時の月の反応は・・・

「……私は、死んだんですね……みなさん、これからも宜しくお
願います!」

自分の存在が消されたことと

もう罪に問われることはないという安心感でぐちゃぐちゃな心模様
だった

それでも気丈にふるまう姿は儂げではあるが、道端に咲いた花のよう
に逞しかった

「ほら、顔洗ってしゃきつとして……」

「……むあい……」

白も白で今までの緊張の針が抜けたかのようにすっかすかだ

「はやく、おりてくるんだぞ？」

「……分かりました……」

トントントン

慶亜が階段を駆け降りる

「……もうすぐ、ですね……」

白が見つめる方向は陽州

すでに孫策たちは着いているだろう

一度止まった物語が、また動き始める

□

□

「白さん、おはようございます」

「おはよう、白」

「……おはよう……」

「おはようなんですぞ」

「おはよう」

「……おはようございます……」

この邑にきて結構立つ

「ああ、白くんおはよう」

村人とも仲良くなった

最初は田舎くさい生活にきこちなかった月と詠（その他三人は、適応力が黒いガサゴソなみということ）だったが、今では何の不自由もなく過ごせている

「今日は、大事な話があるのだけど」

いつも温和な村人の顔が真剣に引き締まる

「……はい……」

連れてこられたのは集会場の様なところ

そこには、多くの村人が集まっていた

「おお、待っております」

「あの、話って？」

慶亜がおずおずと聞く

「あなた方を御使い殿と見込んでの話です」

村長が言うには

この地を治める領主ほにかが悪政ばかりをしていて

もう、我慢が出来ないと各村が一斉蜂起をおこすそうだ

その列に白たちも加わってほしいということで

「びゃ、白、どうしたらいいかな？」

はつきりいうと、どんなに強がっていても小鹿はんびな慶亜びは重すぎる話だった

自分たちが参列するということは、誰かが死ぬということ

この世界に慣れたとは言っても、人を殺すことには抵抗があった

「・・・慶亜さん・・・」

「なに？」

「・・・あなたは、苦しんでる人を、助けたいですか・・・」

「もちろんだ！」

臆面もなく言い切る慶亜

「・・・月さんたちは、いいですか？・・・」

「はい」

「いいんじゃない？」

「・・・恋も、頑張る・・・」

「馬鹿をぶっ飛ばすのですぞ！」

「・・・バカ系列には、因縁があるな・・・」

月以外は殺気だっている

あの戦に参列していた奴を蹴れるのだ

嬉々として喜んでいるかのように眠っていた闘気が沸き起こる

「・・・・・・・・快諾するそうです・・・・・・・・」

「おお！そうですか、なら、数日後に」

「・・・・・・・・分かりました・・・・・・・・」

□

□

数日後

反乱する兵の中に見たことのある様な顔がぼつぼつと混じる

そう、呉の兵士だ

「・・・・・・・・そういう、ことでしたか・・・・・・・・」

この反乱を扇動したのが孫策だとしたら

この気に孫策は袁術を打ち破り孫呉復興の第一歩とするだろう

「・・・・・・・・まあ、いいです・・・・・・・・」

「白、無理するなよ？」

自分より身長の高い白を少し見上げながらウルウルした眼で言う慶
亜はどんな男でも、ストライク

「……………分かりました……………」

のはずなんだけどね

「……………恋が、護る……………」

「護ってもらったからな、私も頑張るとしよう」

恋と華雄と一緒に戦うことになる

調練もろくにされていない袁術ゆゑの兵士など木端の様に吹き飛ば飛ばだろう

「……………ここからが、再出発です……………」

白のちいさな呟きと共に

「全軍、進め！」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！

物語は、動き始めた

・
・

あの日を取り戻すため、再び戦場に・
・
・
・
・

22話：新たな出発（後書き）

遅れてすみませんでした

いや、僕恋が乗りに乗ってきたので

でも、ここからはこっちが中心です

では、次回も宜しく願います

感想、待ってます！

23話：嘘（前書き）

ねむいっすね〜

今日は、合計でどの位投稿したんだろ？

あ、十二時すぎてた

では、どつぞ！

23話：嘘

「なにをしておるのじゃ〜！早く、あいつらをへいこらせぬか〜」

「やっぱり英雄には勝てませんよう」

反乱戦の結果は惨敗、袁術側の

もう少し準備などをしていたらまともな戦が出来ていたのだろうが
勝ちが出来なかっただろう

孫策たちがこの日のために何年も雌伏の時を刻んだ

その間ずっと策を練り続け

今、江東の虎が眠りから覚めた

「さあ？袁術ちゃん？首と胴体、おさらばしたい？」

「「ぶるんぶるん」「」

必死に首を横に振る二人

それをみた孫策はサドっ気満面の笑みを浮かべ

「もう二度と、私たちの前に顔を出さない？」

「「ぶんぶんぶん!」」

あかべこもビックリするほど首を縦に振りまくる

「じゃあ、行つてよし」

「失礼しました!」

ぴゅーという擬音が聞こえそうなぐらいの勢いで走り去っていく

「いいのか?雪蓮?」

横に控えていた周瑜が不敵に笑いながら聞いてくる

いままでの屈辱を晴らさなくていいのかと聞いているわけではない
あいつらを逃がして袁家の息がかかった奴らに反撃されるかもしれない
がいいのかと聞いているのだ

「大丈夫よ、袁家はどこも馬鹿だから」

「……そうだな」

ゆっくりと玉座に近寄る

「さあ、ここからが、我らが宿願を果たす出発地点よ……みんな、よろしくね」

孫策が不敵に笑う

ここに、孫呉が復興された

□

□

「白君！げんき〜！」

明が元気いっぱい白に駆けよる

その年からはかんぐ「オイ殺すぞてめえ」すみませんっしたあああ
ああああ！

とまあいつも通りの明

「あら？来たの？」

「……………来ました……………」

孫策が来る

「それより、あなたたち時間がかかったわね？」

「……………最後の最後で、反乱に参加しましたから……………」

「へ、へ〜そうなの〜誰が反乱なんか起こしたのかしらね〜？」

「……………」

白が孫策をイタイ奴を見る眼で見る

「や、やめてよそんな眼で見ないで、巻き込んだのは謝るから」

「……………それで、本当に月さんたちを保護してくれるのですか……………」

「ああ、あれ、嘘よ」

『!!!?!?』

その場が凍りつく

「……………あっはっはっはっは、嘘よ、もう」

その状況に耐えられなくなったかのように笑いだす孫策

「……………からかわないでください、もうすぐで、殺すところでした……………」

拳を握りしめながら真顔で言う白

「物騒なこと言うわね?それで?その、本人たちは?」

「……………月さん……………」

玉座の間の柱の陰から月たちが出てくる

「あら？ずいぶん可愛いわね？」

「……………このたびは、保護していただきありがとうございます」

「あゝ、肩つ苦しいあいさつはやめましょう？これから、仲間なんだから、ね？」

「は、はい！」

「ふふ、ほんとに可愛いわね？どう？今夜にでも」

「???」

「あらあら、無知と来ましたか……………弄りがいがあるわね？」

「こら雪蓮、そこまでにしておけ」

「わかったわよ」

ぶーたれる孫策

「で？その後ろの子たちは？」

「……………詠よ……………」

どこに間諜が潜んでいるのか分からないので名前が言えない

これからは、詠として生きていくしかなかった

それは月も一緒だった

「・・・・・・・・・・呂布・・・・・・・・・・」

「!???まさか、呂布までついてくるなんてねえ?」

まさに、まさかである

「ねねは陳宮なのですぞ!」

「あらあら、元気がよろしい事。小蓮と仲良くなれるわね」

「????」

・・・・・・・・ロリ同士の百合は飽食済みですか?

「華雄だ」

「ああ、あなたがお母様に負けた」

この孫策と言う人間はからかうことに生き、人がそれに対してどんな感情を見せるのかを楽しんでいる人間だ

「そうだな」

この数週間で大人になった?華雄

ちよつとやそつとじゃ揺らがない

「……………僕は、本多 白です……………」

「前田 慶亜です、よろしくおねがいします」

「ふふ、どちらも可愛らしいわね？よろしく。これから、あなたたちは、孫呉という屋根の下で一緒に生きる、家族だからね？そのことは、忘れないで？」

孫策の数少ない王らしい一面

この王の威厳に多くのモノは惹かれ着き従う

「そして私が正義にヒーローにして白君のははおヨ」養母です」

話の腰をボディブローした後北斗百。拳を叩きこんで折ろうとした明を言葉の膝がつくんで止める白

ここに生まれる膝がつくん最強説！ないな……………

「ほら、皆も自己紹介して」

孫策が後ろに控えていた文武官に促す

「私は周瑜だ、よろしくな」

孫呉のクールビューティーとはこの人

「わしは黄蓋じゃ、よろしくの？若いの」

孫呉のお色気担当

「・・・私は、甘寧だ」

孫呉のクーデレといえばこの人

「えつとお、陸孫ですゝ、よろしくおねがいますゝ」

たわわな実り、陸孫とはこの人

「姉様の妹の、孫権だ、よろしく」

孫策に似ている？いいえ、似て非なるものです

「尚香だよ、仲良くしてね？」

その天真爛漫さは天然か？それとも計算か？小悪魔ロリとはこの方

「私は呂蒙です」

この眼鏡の破壊力は世界の法則が乱れるほど！

「周泰です！」

忍者ロリっことはこのひとだあああああああ！

「で、この個性豊かな仲間達をまとめるのが、私、孫策よ」

その笑みで何人の男が萌え死んだか。小悪魔？いいえ大悪魔です（
キリッ

「そして私が謎のヒーロー！そして白君のははおり」養母です」

どうしても白の母親だということを言いたいらしい

時代を感じる月光仮面の格好をしてやってきた

「…………師匠、その格好は年齢をバラしているようなものです…………」

「え？月光仮面カッコいいじゃないか？」

「……………そーゆー問題ではなく……………もう、いいです……………」

「???」

「そっちも、なかなか個性豊かな様ね？」

「そうですね…………楽しいんですよ？」

孫策と月がほほ笑みながら話し合う

その姿は解放された天使のようで

「……………月さん……………」

とりあえず全人類がおもちかえりいいいいしたくなるほどであった（一名のぞく）

「さあ、これからみんなには宿願を果たすために、身を粉にして

働いてもらっわよ」

ふふふと笑いながら孫策

「お前もだがな」

ガシツと孫策の襟首をつかみながら言う周瑜

「・・・・・・・・・・白、頑張ろうな？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

あらたなスタート地点に立った二人＋一人（途中参加）

スタートダッシュでフライング

23話：嘘（後書き）

感想、まっています！

24話・白の受難（前書き）

遅れてすみません

毎日ちよこつとずつ書き進めてたんですけど

睡魔には勝てませんでした

では、どうぞ！

24話：白の受難

白たちが呉に入り、数日が経った

最初はぎこちなかった将たちとのやり取りも

少しずつ柔らかくなっていた

そんな日常の中の一コマ

「あゝ！また抜け出してる！」

王の威厳が欠片もないような行動をさらりとやってのける孫策

「白、雪蓮見なかった？」

ちょうど廊下を歩いていた白に聞く

「…………今さっき、街の方に行っていました…………」

「orz…………またか…………」

もう何度目になるか

三桁を超えたところから数えるのをやめた周瑜

最近酷くなってきた頭痛もこのせいなんじゃ？と思ってしまつぽどである

「すまないが、捕まえて来てくれないか？雪蓮がいないと進まない仕事があるんだ」

と頭を押さえながらやれやれといった風に言う

「・・・分かりました・・・よく、どこに行きますか・・・」

「街に居るおじいさんのところかな？まあそこに居なくても、民に聞いたら全面的に協力してくれると思うから」

領主がどれだけ民との交流を大事にしているか分かる一言である（笑）

「逃げようとしたら、実力行使してもいいわ」

「・・・アイマム・・・」

「???」

・・・白なりのボケだったのかもしれない・・・

そして悠然と歩いていく白の後姿は、とても雄々しかったと周瑜の後日談から

□

□

街に繰り出した白

眼に映るのは笑顔と活気にあふれた街

本当の豊かさがなんだと語る前に、そこに存在している幸せを謳歌することが大切だということを体現しているかのように

「……………どこのおじいさんが、聞くの忘れた……………」

いきなりのピンチ

「……………すみません……………」

「なんだい？」

通りすがりの民Aに聞くことにした

「……………孫策さんを、見ませんでしたか……………」

「ああ！孫策様ね、今さっきまでその甘味処でくつろいでたんだけど、さっきどっかいっちゃった」

まあ、いつものことだよとAさん

「……………そうですね……………引き留めて、すみませんでした……………」

「いいんだよ、どうせ周瑜様が捜してんだろ？早く見つけて負担を減らしてあげないとね？じゃ」

「……あそこで、聞いてみよう……」

甘味処に歩み寄る。すると……

「もきゅもきゅ」

「お口の周りについておりますぞ」

聞きなれた声

口いっぱいに食べ物で頬張りもきゅもきゅしている恋と

口いっぱいに食べ物をつけた恋をかいがいしく世話するねね

「……すみません……孫策さんを見ませんでしたか……」

「」

「……今さっき、一緒に食べた……白も、たべる？」

そういつて右手に持っていた桃まんを差し出す恋（食べかけ）

「……いえ、結構ですむぐ……」

「……たべる」

無理やりねじ込まれた（もちろん食べかけ）

作者なら狂喜して（ry

「おいし?」

「……もむもむ……むあい……」

白小動物説浮上!

「そ……呉服屋行くて言つてた……」

「……ありがとうございます……桃まん、おいしかったです……」

「ん……ばいばい」

「ちゃんと見つけるのですぞ」

ぶんぶんと手を振る二人に背を向けながら

「……呉服屋か……」

そうして人伝いに聞きながら呉服屋を目指す

□

□

呉服屋にゃえ？手抜き？気にすんなって

呉服屋に着くと

「あゝら？とても可愛らしいお嬢さんですこと。今回はどついったご用件で？」

いきなり女性に間違われる

「……孫策さんを、見ませんでしたか……」

もう、反論するのを諦めた白

「ああ！孫策様ですか？さきほどあちらの方たちと楽しそうに話して、どこかに行ってしまったよ？」

ザマス風店長が視線を送る先には

「あ、白だ」

「びゃ、白さん」

「何してんの？」

慶亜、月、詠の三人が服を着たり着せられたりしていた

「……孫策さん、見ませんでしたか……」

「ああ、今さっきまで話してたんだけど、本屋行くなって言ってたよ？」

仕事しろや！って言えや！って言わないのが白クオリティー

「・・・そうですか・・・」

若干めんどくさくなってきた白君

「それより、ど、どうかな？」

今着ていた服を見せる慶亜

恋姫の世界だ、なんでもありなのだろう

デニムもどきっぽい奴でボーイッシュに決めた慶亜。ツインテールがピョコピョコ揺れて可愛い

「・・・似合ってるんじゃないでしょうか・・・」

「な、なら・・・買おう／＼」

顔を真っ赤にしながらぼそと言った慶亜

「ほら、あんたも見てもらいなさいよ」

「え？ちょ、ま」

ずずいと前に押し出された月

「ど、どうでしょうか／＼」

清楚で控えめな純白のワンピースもどき

控えめだからこそ彼女の可愛さをひきた（ry

「……………似合っていると思います……………」

「へ、へう／＼／＼な、なら、買っちゃお……………」

へういただきました！

「え、詠ちゃんも」

「え？ボクはいいよって……………なんか言いなさいよ」

ムスツという姿はまさにツンデレ

知性的なメガネに似合うような格好（個人にお任せしよう）である

「……………似合ってます……………」

「そ、そう？なら……………べ、べべ、別にあんたが言ったから買う訳じゃないから！」

ツンデレいただきました！

頬を真っ赤にしながら上目づかいで睨んで来る姿はまさに（ry

「……………では、僕はこれで……………」

『ばいばい』

手を振る二人に背を向けながら

「・・・・・・・・本屋か・・・・・・・・」

人伝いに聞きながら本屋を目指す白

□

□

本屋にたえ？手抜き？だから気に（ry

本屋に着くとそこには・・・・・・・・

「ああ！んあ・・・・・・・・ふあ、はあん・・・・・・・・ひゃう！」

本を見ながら身悶えしている陸孫を発見

ここでの選択肢は3つ

↓陸孫に聞く

陸孫は避け人伝いにおじいさんを目指す

帰る

「……陸孫さん……」

「ひゃああうう！へ？ああ、白さん。どうしたんですか？」

お前がどうした

「……孫策さん、見ませんでしたか……」

「ああ、雪蓮様ですか？今さっきまで一緒にいたけど……」

「……どこに行くか、聞いてませんか……」

「えつとお……あれ？聞いたはずなのにな？」

人差し指を頬に当てながら、なんだっけ？、とうなっている陸孫

「お話ししてたら、多分思い出すと思います」

あっけらかんと言いつ

「天の世界の本ってどんなのがあるんですか？」

「……現実を題材にしたもの……仮想と現実を混ぜたもの……完全に仮想のもの……日常を題材にしたもの……いろいろです……」

「そうですね、けど、白さんってゆったりしてますよね」

お前がゆうなし！

「……………そうですね……………」

「それに、女の子みたいな顔してますし」

「……………そうですか……………」

何かが傷つけられた白

肩がびくりと動く

「女の子にもてもてそうですね」

「……………そんなこと、ありません……………」

「え？そんな、もしかして、どんかんだったりするんですか？」

「……？」

「どうやら、そうみたいです……………あ！思い出しました！」

どんな場面で？

「えつとですね、話してたところに祭さんがきて雪蓮様を誘ってお酒を飲みに行くって言ってました」

「……………ありがとございました……………」

「それでは……………はあん！」

また本に眼を向けるとあえぎ声ならぬうめき声？が……

「……居酒屋か……」

また人伝いに聞きながら酒屋を目指す白

□

□

居酒屋にゃえ？だからn（ry

居酒屋に着くと

「らっしゃい！ん？お嬢ちゃんが一人で何しに来たんだい？」

粹のある店長さん、おやつさんともいう

「……孫策さん、見ませんでしたか……」

もう、だるそうに言う

「ああ！今さっきまでそこのお客さんたちと楽しそうに飲んでたよ？」

「・・・・・・・・またか・・・・・・・・」

さつきから今さつきまでが続いている

これなら話を聞かずにおじいさんのところで待っていた方がいいんじゃないかと思いだす白

さらにおやつさんが指さす先には

「はっはっは、お主とは話が合うのう！」

「だろだろ！あたしもそう思ってたとこだよ！」

飲んだくればり失礼、黄蓋と明が昼間っから飲んだくれていた

「・・・・・・・・師匠・・・・・・・・」

「おおー！白君、君もこっち来てのみな」

ヒックとしゃっくり一つこぼしながら明

「・・・・・・・・孫策さん、どこに行ったか聞いてませんか・・・・・・・・」

「策殿か？それなら、おじいさんのところに行くと言っておったの」

徳利を片手に黄蓋

「・・・・・・・・僕は、これで何を言ってるのー！君も飲むんだよ

「？……僕、未成年ですよ……」

「いいのいいの、ほら、ググイと！」

「……これじゃ、ググイではなく無理やりです……」

なんか知らないけど無理やり飲ませようと必死になっている明

「ほ・ら・のみなつて、せりゃ！」

実力行使に出た明

馬乗り体勢に移行する

「そ〜だ、口移しで飲ませてあげるよ」

「……ふっ飛ばしますよ……」

「ははは、そんなこといわずに、ちゅ〜」

「『空破』（かなり弱め）」

「こっふ〜」

ビシャアア

口に含んでいたお酒をもろに顔面に受ける

「……チツ……」

「今、舌打ちしたよね？ね？」

「・・・・・・・・・・してませんよ・・・・・・・・・・」

「うつそだ〜！」

「・・・・・・・・・・おてふき、貸して下さい・・・・・・・・・・」

アルコールのにおいがプンプンするのに耐えきれなくなった白

「ほれ」

「・・・・・・・・・・ありがとブッ！？・・・・・・・・・・」

「くつくつく」

渡されたのは確かにおてふき

酒がピタピタひたされたにおてふきだったが

「・・・・・・・・・・うつ・・・・・・・・・・」

なれないアルコールに酔ってきた白

「・・・・・・・・・・おじいさんは、どこにいますか・・・・・・・・・・」

「す、少しやりすぎたのは謝るから、そんな怖い顔しないで？」

「・・・・・・・・・・怖い顔はしてません・・・・・・・・・・」

無表情な眼で無機質に相手を見つめながら言われるのはかなりの恐怖が生まれると思うが

「おしえてやるから……じにょじにょ……」

「……ありがとうございます……店員さん、おてふきください……」

「あいよ!」

ビチャッ

勢いよく投げられたおてふきは、酔っていた白には少し速すぎた

まあ、顔面で受け止められたが……

「……失礼、しました……」

「またね」

「またの」

次会ったらぶっ飛ばそうと考える白

無理なことだが

そうして、最終目的地おじいさんに向かう白

これでいなかったら帰ろうと誓う白であった

□

□

もう、言わなくてもいいよね？

最終目的地に着くと

「その人を離しなさい！」

「さっきから言ってるだろ！馬と金と食料を用意しろって！」

「孫策ちゃん、私の事はいいから」

剣を持って構えている孫策

人相が悪い大男が一人

人の優しそうなおじいさんが一人

「……………どうしたんですか……………」

「ああ、白、ちょっとね、見て分からない？」

大男につかまっているおじいさん

捕まえている大男は金などを要求している

うん、あの、あれだね、テンプル

「????」

分からない白君

「はあ、あんたはもう……」

お前が言っなし！

「……周瑜さんが城に戻れと言っていました……」

「これが終わったら、いくらでも仕事してやるわよ」

凄みを利かせて睨みつける

「さ、さつさと用意しやがれ」

少したじろぐ大男

「ん？お前、可愛らしいな？お前、こっちに来い」

「……僕ですか……」

指名したのは白

「ああ、そうだ！お前、仲介役になれ！」

「・・・・・・・・なんのですか・・・・・・・・」

「は？」

この状況がまだにつかめていない白

「この女、馬鹿か？」

「・・・・・・・・僕は、男です・・・・・・・・」

「は？馬鹿言ってるな、どう見ても女にしか見えねえよ！」

「・・・・・・・・孫策さん・・・・・・・・」

「なによ」

少しいらったように返す孫策

「・・・・・・・・この人をぶっ飛ばしたら、城に帰るんですか・・・・・・・・」
「」

「ええ、そうね」

「・・・・・・・・分かりました・・・・・・・・」

そう言って大男の方に歩み寄る

「へっへっへ、近くで見ると美人だな」

そうして白に手を伸ばす

「死にやがれ！」

頭に血が上っているらしくそれが分かっていない大男

ゴスっ

「ひゃぶ!?!」

綺麗に顎に入った右上段蹴り

そのまま吹っ飛んでいく

「????」

なんで突っ込んでこられたのか分からない様子の白

わああああああああああああああああ!!

周りのヤジ馬から歓声が上がリ、天の御使い、本多 白は永遠の英雄として呉を護り続けたとき。めでたしめでたし」

「……………声、でてます……………」

ガシッ

こっそり逃げようとしていた孫策の肩を掴む

「あら？ いっけな〜い、用事を思い出したわ。急がなくちゃ」

「……………そうですね、城に急用があると思います……………」

「いや、そうではなく」

額に汗が浮かぶ

「……………今日は、疲れました……………」

「私は、か、関係ないわよ？」

眼が泳ぎまぐる孫策

自分で自分の所為ですと言っている様なものだ

「……………大丈夫です……………怒ってませんから……………」

「

眼が死んでる白

「い、いやいやいや、いやあああああああああああああああ
あああああ！！」

後日、真っ白な灰となった孫策が書齋で見つけたそうな

え？何をしたのかって？ご想像にお任せします

24話：白の受難（後書き）

どうでしたか？

だんだん、白君が白君じゃなくなってきた……いや！気のせい・
……であってほしいな……

まあ、白君の受難な一日と言つこととで

次回も宜しくお願いします

感想、お待ちしておりますです

25話：クーデレ甘寧さん（前書き）

タイトルは、まあ、気にしないでください

では、どうぞー！

25話：クーデレ甘寧さん

先日、孫策が真っ白な灰になってから数日は、真面目に働くようになったのだが

「……………また、いないし……………」

部屋をのぞくといつのまにかいなくなっていた

そんなこんなで一日が過ぎていく

そんな中、我らが主人公白君は

「……………すゝす……………」

木の上で可愛い寝息を立ててすやすやと御休み中だった

「……………白、いるか」

そこに邪魔ものが登場

「……………いません……………」

「そうか……………なめているのか？」

「……………なめていません……………」

「……………でもいい、早く降りてこい」

少しいらったように言う甘寧

「……嫌だと言ったらどうするんですか……」

「力づくだ」

「……分かりました……」

めんどくさそうに、それはめんどくさそうに降りていく白

寝起きは機嫌が悪いのだ（最近は特に）

「……ようは、なんですか……」

「勝負しろ」

「……なんとなく、嫌です……」

伝家の宝刀なんとなく発動！これにより全ての意見は却下される！

「断れると、思っているのか？」

ここにきて眼が座った甘寧

「……さようなら……」

「待て！」

ここにきてリアル鬼ごっこがはじm「あ、白君。何してんの？」

ボムッ

急に出てきた明のふくよかな胸にだいびぐんぐしちゃった白君

「あはは、そんなに欲求不満だったの？それなら今夜いっしょに捕まえたぞ、白」

台詞が遮られることが多い明

一種のノイローゼになってきた

「…………手合わせは、この人にやってもらった方が…………」
ずずいと明を推挙する

「…………今さっき、やった」

「あ、甘寧ちゃん。どうしたの？落ち込んだじゃった？」

結果は甘寧のボロ負け

右腕一本で地面にねじ伏せられちゃった

「だから、修行だ」

「…………恋さんとかも、いますよ…………」

「呂布とも、やった…………」

結果はボロ負け

数合いは持ったが攻撃を獲物で受け止め、そのまま吹き飛ばされた

「……黄蓋さんは……」

「……いつも、御教授してもらっている……」

しかし、同じ相手ばかりだと飽和状態になる

「……華雄さんも……」

「勝った」

余裕勝ちとまではいかずとも、それなりに楽があった

「……周泰さんは……」

「明命は、こういう戦闘向きではない」

「……孫策さんは……」

「ええい！さつさと用意しろ！」

「……」

露骨に嫌そうな顔をする白

「いやか？」

お前は、ネウ。か！

「……いやです……」

「何故だ？」

「……なんとなくです……」

何んとなくを曲げたことは一度もない白

理由自体が曲がつているが

「頼む……」

なんでここまで頑なに勝負をしたがるか分からない白

「……分かりました……」

たつぷりと間をおいて答えた白

「よし、ならば行くぞ」

調練場に向かう二人。その後ろで……

「え？私ハブられてる？」

一人ゴちる明であつた

□

□

調練場に着くと先に先客がいた

「てや！」

「……まだ、甘い」

そこには恋と、まさかの慶亜

「……今日は、ここまで」

「ありがとうございました！」

汗で額にこびりついた髪を払いながら白たちに気づく

「あ、白……えっと、こ、これは……」

「……けあ、強くなりたいって」

「れ、恋さん」

ひそかにいろいろな武官に頼んで稽古をつけてもらっていた慶亜
いつも眺めているだけの自分が悔しかったのだろつと勝手に憶測

「…………頑張ってください……………」

「う、うん！」

晴れやかにハニカム慶亜

「呂布、ここ借りていいか？」

「…………うん」

快諾した恋

「ならば、構える白」

「…………はい……………」

二人とも拳を曲刀を構える

「え、なに？」

「試合するんだつてさ」

ムンズッ

「ひゃ！？ちょ、明さん？」

「は、お姉さん寂しいな」

慶亜の可もなく不可もなくの胸をムンズし続ける明

「ちょ、やめてくだしい！」

テンパリ過ぎて思わず噛んでしまう慶亜

「はいはい」

「はう・・・」

その場に崩れ落ちる慶亜

「・・・・始めるぞ」

「・・・・はい・・・・」

甘寧が先に動く

今までの将にはないトリッキーな動きだ

「シッ！」

横薙ぎに振るわれる曲刀

それを身を伏せ避け懐に潜る

「フッ」

そこに白の右拳が甘寧を襲う

「ぬッ!？」

なんとか身を捻り避ける

白は拳を振った勢いに任せて右回し蹴り

ビリィ

これが甘寧の服にかすれ破ける

「あ・・・」

「シッ」

動揺した甘寧の右手に白の左回し蹴りが直撃

剣を手放してしまう

「・・・クッ・・・私の、負けだ」

「・・・服、すみません・・・」

ちょうど、胸の部分が破けてしまった（どんなエロゲ展開？）

「いや、その程度で動揺した私の落ち度だ・・・」

少し気が沈む甘寧

「・・・また、仕合してくれるか？」

「・・・その場の空気で・・・」

「分かった・・・思春だ・・・」

「???」

「私の真名は『思春^{ししゅん}』だ・・・これから、よろしく頼む」

「・・・友達、ですね・・・」

「???」

呉の将に対して初めてこの表現方法を取る白

「甘寧ちゃん、多分だけどよろしくって意味だよ」

「そ、そうなのか？」

若干しっくりこない思春

「思春、どこ行つてたのよ？」

ここで孫権さん登場

「すみません、手合わせをしていたら時を忘れてしまいました・・・」

「・

「へへ、思春にもそういう時があるのね」

「では、行きましょう」

そうして颯爽と去っていく思春と孫権

途中でくるりと振り返り

「・・・・・・・・またな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「・・・・・・・・すみません、行きましょう」

仏頂面で言葉を交わす二人

いつも言葉数が少ない両者だからこそなしえる業（笑）なのだろう

「・・・・・・・・師匠、今日は、話してもらいます・・・・・・・・」

ここで話が百八十度変わり、今までのらりくらりとかわされ続けたので今日こそはと振り返ると

「・・・・・・・・師匠・・・・・・・・」

明の姿はなく一枚の紙がひらひらと舞い降りてきた

『あでゆーby明』

クシャッと握りつぶす

今回もかわされた白であつた

空を見上げると綺麗な茜色に染まっていた

つまり夕方ということだ

「……………かえろ？」

「……………はい……………」

「げ、元気出せって？な？」

「……………元気です……………」

とぼとぼと歩く白の後ろ姿は少し哀愁が漂っていたとさ……………

□

□

「まだまだ、甘いよ……………白君」

まだ、もうちょっと、ね？

君が、この話を聞いて……壊れなくなるまで、待ってよ、ね？
空を見上げると綺麗な茜色

「月詠、お前の子供は大きくなったぞ……」

はは、いい年こいて思い出し泣きか……

「命、心、儚いよな」

なんでだろうな？ちゃんと手は洗っているはずなのに、すごく汚れて見えるよ

「ふは……ヒツグ……」

ため息とともに嗚咽が漏れる

ごめんな、月詠……あたし、話せるかどうか分かんないや

君想フ声、誰ニ届ク？

25話：クーデレ甘寧さん（後書き）

うん、最後以外はギャグですね

この小説のタグ、シリアスシリアルなのにな・・・

ま、いつか

では、次回も宜しく願います

感想、お待ちしております

26話・眼鏡と言えは……（前書き）

ついに、ついに、あの店が！

では、どつぞー！

前作見てないとあの店ってどの店？ってなるのであしからず

26話：眼鏡と言えば……

「ちんきゅ〜きつく!」

「はっはっは、あたらないよ〜だ」

今、絶賛子供を満喫している尚香と陳宮

「ふ、二人とも、こんな狭いところで暴れたら危ないですよ」

室内で暴れているのでいつモノが壊れるか分からない状況であたふたしている呂蒙

「びゃ、白さんも手伝ってください」

「……す〜す〜……」

何故かいる白。その人に助けを求めるのはちょっと……

「ちょ、本当にやm「ちんきゅ〜とるね〜ど!」

まさかの新技に対応が遅れた呂蒙

もとから武官ではない呂蒙が避けられるはずもなく

「きゃ!?!」

思い切りよろめく

その拍子に眼鏡を落とし

「あははは、そんなの当たらないよ」

そこにテンプレのように尚香がとび跳ねながらやってきた

グシャッ

耐えがたい天の座の空白もこれで終わりだ……

私が天に立つ、ばりの眼鏡の割れ方

すなわち粉々に割れた呂蒙の眼鏡いのち

『……………』

痛いほどの沈黙が流れる

それほどまでに、呂蒙の眼が……………死んでいた

「ご、ごめんね？ 亞莎？」

「わ、たしの……………めが、ね……………」

まるでこの世の終わりのように呟く

「……………めが、ね……………を取ったら、明日もみえな、い……………」

「だ、誰にも明日は見えないよ?」

「……今、現在も、みえ、ない……」

「ほ、本当に、ごめんなさい!」

「すみませんなのです!」

パチッ

ここで眼が覚める白。きよろきよろと周りを見回すが何が起こっているのかさっぱり分からない

呂蒙がorzになってるのか

尚香とねねが何故土下座に近い格好を取っているのか

「……どうしたんですか……」

作者ならそーっとドアから逃げていく空気なのに……

「……私、の眼鏡……」

呂蒙がorzになって見つめている先には見るも無残な眼鏡が

あいぼう

その場所かというと……

「???」

グシャッ

白が寝ていた場所の真下であった

もはやクツキーの食べ残しのようになつた眼鏡

「・・・？」

「・・・眼鏡、がなかったら・・・もう、生きてけません・・・」

・・・

「・・・これ、眼鏡だったんですか・・・」

その言葉は深く、ふかーく、呂蒙の胸を抉り返した

「・・・うわぁ~~~~ん！」

その昼、呂蒙の泣き声が数時間続いたという

□

□

「あた！？す、すみません」

街中を人にぶつかりながら進む呂蒙の姿と

「……大丈夫ですか……」

その世話をする白の姿があつた

二人が目指すのは眼鏡屋

眼鏡が割れたことを周瑜に話すと

「ああ、亞莎は眼鏡ないと何もできないからね、眼鏡買つてきなさい」

とのお言葉をもらい、今現在眼鏡屋に向かっているのである

そのとき孫策は

「えゝ、このままにしておいたらなんか面白そうなことになりそうなのに」

と不穏な言葉を口にしていた

割つた張本人である、尚香とねねは

「深く、ふかゝく、反省してるよ?」

「ごめんなのです。けど、恋殿のお世話があるので
と言ってついてこなかった

そこでかりだされたのが白。自分は寝ていただけなのですが、という旨を伝えたら

『手伝わなかったお前が悪い』

満場一致のようで反論しようにも出来なかった白

本当に仕方なく、本当にめんどくさそうについてきた

「ここ、ですか？」

「……………そうですね……………」

二人がついた先には

『眼鏡屋・あるていめつと唾流輝威滅斗・呉支店』

と仰々しく書かれていた場所であった

まず白が考えたのは何故この時代に横文字が？というものであったが別に声に出して言うほどではなかったので言わないでおい

「……………入りましょう……………」

「ええ！？入るんですか？」

「……………入らないと、眼鏡は買えません……………」

「うう、分かりました……………」

ドアをおすと

カランコロン

というありがちな音声が流れる

「さあ、君の眼鏡を選ぼう！君にあうのはこれかな？それともこれか？それともこっちの星型のがいいかな？」

いきなり変人が現れた

偉い人は言いました。素面で星型の眼鏡をかけているものに近づくなと

「白さん、帰りましょう」

「・・・・・・・・この人に合う眼鏡を・・・・・・・・」

「ちょ！？白さん？」

ズズイと呂蒙を推挙する

「あら？これはこれは可愛らしいお嬢さんですね？では・・・・真・加虐眼鏡！」

パツと見は普通の丸眼鏡

「これをかけたものは、眼の前のモノを痛めつけて快感を得ようとしてます！」

につこりと笑って誇らしげに言う店長

「そ、そんなもの、かけません!」

それを壁に向かって叫ぶ呂蒙

「あらあら、本当に何にも見えないようで」

「……………適当に見つくらしてください……………」

さつさと終わらせたい白

「そんなこと言わずに、あの可愛い姿を堪能しましょうよう」

眼鏡を外した店長。外見的特徴は

水色の髪、猫のように丸められた瞳、人懐っこそうな口元、そして
双山……

「あなたも可愛いですよねぇ? こういう方を、男の娘ってゆ
ーんでしょぅねぇ」

驚くことに初見で白が男だと分かったのはこの人ただ一人

それがどうしたというものなのだが……

「あなたには、この眼鏡をかけてもらいたいですねぇ」

レンズの細い眼鏡

「これを使ったものは、本音をしゃべっちゃうって言うモノなん
ですう」

「……いいですよ……」

「え？」

まさかの快諾に伸ばされた手に気づかなかった店長

スチャ

「……普通の、眼鏡ですね……」

「そ、そんなぁ……まさか」

そう！何を隠そう白は、いつも本音で生きている！

「じゃ、じゃあ、私の見た目ってどんな感じですかぁ？」

「……世間一般的に見ても、美人ですね……」

「そ、そうですかぁ／＼」

自分で言っておいて赤面する店長

「じ、実験は成功と。それでは、外してもらいますねえ」

スッ

ちなみに、眼鏡をかけた白はすさまじく萌えd（ry

「びゃ、白さん、こゝこんなところで／＼」

なにやら真つ白な柱に体をあてて真つ赤になっている呂蒙

眼鏡をはずすと、人間と無機物の違いも分からないみたいだ

「……呂蒙さん……どうしたんですか……」

「ひゃあう！？え？白さんが二人？」

「ふふ、では、ちょっと待ってて下さいねえ？」

そう言つて店の奥に行つてしまふ店長

「……白さん、今日はご迷惑をおかけしてすみませんでした・

」

ぺいぺいこと壁に向かつて言つ呂蒙

「……呂蒙さん……こつちです……」

「あ、す、すみません……」

声を頼りに白の方を向く

「……私、眼鏡がないと、何にも見えなくて……」

「……眼が悪いのは、その人のせいではありません……」

「でも・・・」

「・・・別に、気にしていません・・・」

これ以上話を続けるとめんどくさそうなことになるそうなので回避した白

そこにちょうど店長が入ってきた

「お待たせしちゃいましたあ。今から、視力検査を行います」

この時代に視力検査があったのかどうかは置いておいてもらいたい

「今から、こんな（c）形が書かれた板を出しますので、あいている方を指さして下さい」

古典的なあれですね

「では、これは？（正解は↑）」

「↓」

「では、これ。（正解は→）」

「↑」

「あ、もういいですう」

大体目の悪さが分かった店長

「まあ、これですかねえ？」

取り出したのは丸眼鏡。呂蒙が以前かけていた眼鏡と一緒だ
フロットタイプ

「こ、これには、どんな効果が？」

「眼の前が見えるようになる効果がありますう」

スチャ

有無を言わずかけた店長

「わ、わわ！？す、すぐく見えます！」

「そうですね、そうですね、お代はあなたの体でえ」

「え！？そ、そんな・・・」

「・・・はい、お代です・・・」

値札に書かれてあった金額を出す白

「もう、つれないですねえ？」

「びゃ、白さん？白さんはどこに？」

「・・・ここに居ます・・・」

眼の前に居る

「え？白さんって、女性だったんですか？」

「・・・・・・・・僕は、男です・・・・・・・・」

「え？な、なら・・・・・・・・可愛い！」

「????・・・・・・・・今日は、ありがとうございました・・・・・・・・」

「またのご来店をお待ちしておりますっ」

カランコロン

店の外に出るとすっかり夕方であった

「えっと、今日はありがとうございました。そ、その、真名を受け取ってもらえませんか？」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「私の真名は、『あーしえ亞莎』です！これからも、よろしく願います」

「・・・・・・・・友達、ですね・・・・・・・・」

「????」

いつも解説してくれる人たちがいないのでしっくりこない

「・・・・・・・・帰りましょう・・・・・・・・」

「はい！」

陽光に照らされてよく分からなかったが、
亞莎の顔が紅かったのは
秘密だ……

26話：眼鏡と云えば……（後書き）

はい、眼鏡つながりで出せました

こちらしか見ていない方を、フライングで置き去りにした感じです

なんだかんだで、次回も宜しくお願いします

感想、待ってます

27話：最強と最強（前書き）

おくれてさーせんっした！

では、どいぞー！

27話：最強と最強

調練場で対峙する二つの影

それを見護る呉の将兵

その、二つの影と言うのが……………

「……………勝負」

「はっはっは！かかってきなさい！」

恋と明だったりする……………

事の発端は昼前

何故か知らないが、中庭に全ての将が集まった時

黄蓋が言い放ったこの言葉

「誰が、最強なんじゃろうな？」

さらに言つとなんでこんなことを言い放ったのかよく分からない黄蓋
本当にふとした疑問なのだろう

「やっぱり、恋なんじゃない？」

孫策が相槌を打つ

そう、そうなのだ。普通の外史ならばここで話が終わる話題

しかし、この外史には、この方が

「ははは、白状しちゃいなよ」。白君の事www」

「へ、へう／＼／／」

「ば、馬鹿言ってんじゃないわよ／／／」

「ふいgsbvbjllすbkllさ／／／／」

ここの、一番上の方

そう、我ら（作者のみ）が御姉様！本多明様だ！

ちなみにこの話題の間、白君は昼寝してるぜ！

「けど、明も強いわよね。祭と思春相手に、遊んでたし」

「そうじゃな。ま、そんなふうには欠片には見えんがの」

「……ふん」

思春は悔しいように唇を固く結んでいた

「なら、やってみればいいんじゃない？」

この、何気な一言が事の始まりであつた

当の本人たちは……

「YOUいつちやいなYOU！」

「えっと、その、へう／／／／」

「だ、だから、その／／／／／」

「ぶしゅ／／／／／」

この四人はまださっきの話題をしている

「恋殿、お口お口」

「……………ん」

当り前かのごとく、ねねが恋の世話をしていた

「言ったらやってくれるんじゃない？」

なんともその場任せな孫策

「誰が言つのじゃ？」

「そりゃ……………白？」

何故そこに至るのか分からない

「寝ていますぞ？」

「んゝ、よし！私が言うわ」

ガタッと椅子の音を立てながら勢いよく立ちあがる

そのまま、ずかずかと二人の前に歩んでいき

「ねえ、恋と明で仕合やってくれない？」

『やだ』

見事なハモリっぷり

理由？そんなの決まっている。めんどくさいからだ

「そうなのゝへゝ、仕合してくれたら、豪華な料理が待ってるのになゝ」

ビクリ

「残念だわゝ、呉で一番の料理屋を雇っているのに」

ビクビクッ

「はゝ、仕方ないわねゝ、豪華な料理は今度の宴まで持ち越しかしらゝ？」

『謹んでお受け（する）（しよう）』

「ふふふ」

してやったり顔、ドヤ顔ともいう顔になっている孫策

ここで、明様に満腹キャラ疑惑が！

上は無視して、そして冒頭に戻るわけである

「ふっふっふ、今日はめいっぱい食べてやる」

「……恋も」

変なところで気が合う二人

「は、そわそわするわね」

「そうじゃな」

「もう、お姉様ったら。今回の食費どこから出すのかしら？」

「シャオも楽しみだな」

文官以外は勢ぞろいなみなさん

ん？それにしても、誰かいないような……ま、いつか

では、ここに始まりますは

『怒気ッ 乙女二人の最強決定戦』

「慶亜は、どっちが勝つと思う?。」

孫策が横に居た慶亜に何気なく聞く

「私は、明さんの実力見たことありませんので、恋さんの方が強いかと」

修練してもらっているので恋の強さはよく知っている

「ふん」

「雪蓮さんは?」

「私は……………明かな?恋と向き合ったときは、少しでも追いつける可能性が見いだせたわ」

けど、と続ける

「明は、差が絶望的すぎて、比べる気にもなんないわね」

まあ、分かんないけどね?と孫策

「……………白の、師匠、か……………」

初めて白と対峙した時の事を思い出す慶亜

あの時は、一瞬で負けた苦い思い出

その、師匠なのだ。強いのは確か……

「じゃ、二人とも準備はいい？」

「いいよ」

「……うん」

二人が見合う

痛いほどの何か……

「では、始め！」

先に動いたのは

「恋……いく！」

人、五人分ほどの距離を瞬きをするのよりも早く詰める恋

「はは、ハッヤ！」

袈裟がけに振るわれた方天画戟を横に飛んで避ける

着地と同時に両足で立つ

「『雷』」

ゴツと言つ音とともに明の姿が、左に右に後ろに前、さらに上方向にも次々と移動していく

「……右」

「ざぁんねん、下でした」

と言いながら上から攻撃する明

それをバックステップで回避しいったん距離を取る

この間、およそ三秒

外野の方はすでに置き去りだ

「まだ、行くよ」

次は明からの攻撃

雷を使いジグザグやらカクカクやら動きながら距離を詰めていく

「シッ！」

もう、考えるのをやめた恋

来たところから迎え撃っていく戦法だ

しかし、それでも明の攻撃は着々と恋にダメージを蓄積していく

「フッ!!」

明の拳が方天画戟によりそらされる、がどどん恋にダメージは蓄積していく

「おっしいね、才能だけだったら、最強だろうよ?」

一瞬、明の姿がブレる

刹那、互いの獲物いざしと獲物がぶつかりあう

触れた瞬間両者ともはじかれ攻撃の打ち合いに

この純粋な打ち合いにしても明に若干の傷は生まれるが消耗するほどではない

しかし、恋の方は打撃痕が出ている

「けど、経験が足りないね?才能だけで、戦ってる感じだよ」

懷に潜り込み震脚

足場を失い体勢が崩れたところに明の蹴りが……決まらなかった

「あたしの、勝ちね?」

「……………うん、恋の負け」

顔数?のところで寸止めされた足

「うん、見えなかったわ」

ぼやく孫策

「さうて、恋ちゃん。今日はどんなごちそうだろうね？」

「……………たのしみ」

「お姉様、出費は自腹でお願いしますね？」

「そ、そんなぁ……………」

自分の思い付きで自分が破産寸前まで追い込まれるとは思ってもみなかった孫策

みんなが中庭から去り、一人うなだれていると

「……………あ、そういえば白は？」

そう、二人が仕合している途中あたりを見回してもいなかった

「……………ま、いつか。私も今日はたのしも……………」

スキップをしながら去る孫策

パチッ

「・・・・・・・・あれ、みなさんは、どこに・・・・・・・・」

木の上で寝ていた白

「・・・・・・・・ん？・・・・・・・・」

目が覚めたらこうなっ
たと白の後日談から

27話：最強と最強（後書き）

あれですあれ、感想とかくれたらあれです

では、次回も宜しくお願いします！

28話・日常（前書き）

中途半端

この一言が似合う作者

では、どうぞ！

28話：日常

今回は、白たちの呉での日常を紹介しよう

作中で語られることはなかったが、白たちにも仕事がある

主に政務の手伝いである

断じて、穀つぶしではない

「・・・・・・・・」

黙々と書欄を片づけていく白

その横には

「……むあああああああ！！頭が焼けるうう！！」

一人発狂している慶亜の姿が

「びゃ、白、これどうすればいいんだ？」

「・・・・・・・・こうですね・・・・・・・・」

慶亜が必死になって片づけていた書欄を一瞬で片づけてしまうことに、慶亜のプライドは著しく傷つけられる

「なあ、白って偏差値どの位だったんだ？」

因みに慶亜は、四zy「言うな！」

「…………七十ぐらいでした……………」

驚愕の事実！ちなみに作者より二十ほど高い

「…………まじで？」

「…………はい……………」

慶亜はバカではないよ？バカではないよ？大事なことから二回言
ったよ？

「…………終わりました……………」

朝から片付けていた書類の山がきれいさっぱり

「え？もう？」

「…………慶亜さんの分も、終わらせました……………」

「まじでか！？」

くるつと振り向くと書類の山がきれいさっぱり消えていた

理由は、どうせあとから手伝わせられるから

「びゃ、白、その、一緒にご飯食べにいかないか？もう、昼だし」

大事なのは一緒ということ

「……………そうですね、行きましょう……………」

「……………」

静かにガッツポーズをとる慶亜

なんだかんだで、女の子をしている慶亜であつた

□

□

「……………ごちそうさまでした……………」

律義に手を合わせて食事を終える白

慶亜の方はというと

「……………食べないんですか……………」

「え、あ！？い、今、ダイエット中でご飯がのどを通ってくれないんだ」

何とも無理やりな言い訳

「…………それ以上痩せるつもりなんですか……………」

仕方ないことである

小学生の男子が、女子と隣、それも意中の相手が隣の席でチロチロとみているうちに給食の時間が終わってしまうのはよくあることである

「びゃ、白はどんな女性がタイプなんだ？」

鋭い人にこんな質問をしたら一瞬で気づかれる

ま、相手が白なのだが

「…………これといって、そういうのは、ないです……………」

そう言うのに興味が無いのか！？それでも高校生か！

「そ、そうなのか………」

「…………一緒に居て、落ちつく人ですね……………」

強いて挙げればですけど、と付け加える

その言葉に慶亜はさらに落ち込む

（私、いつもそっかしいし、バタバタしてるし……………やっぱり、月さんとかかなあ）

白の横顔を見ながら考える

「・・・・・・・・どうか、しましたか・・・・・・・・」

「い、いや、なんでもない」

「????」

「ほ、ほら、お勘定払って・・・・・・・・どうしよう」

この後の事はなにも考えていなかった慶亜

どうせ城に戻っても暇なだけである

鍛錬と言う道もあるが、如何せん恋を探すのが面倒であった

（も、もしかして、このままデート／＼／＼）

慶亜の頭が甘い妄想で埋め尽くされていく

（この後は、服屋さんに行つて、そのあとに間食を取りながら道を歩いて、それで夜になつて、それで・・・・・・・・・・白と、きゃあああああああああああああああああ！！）

これから数時間の出来事を脳内妄想している慶亜

一人取り残された白

ふと街道の方に目を向けると

「……………月さんだ……………」

珍しく一人で街をさまよっている月の姿を発見

「えっと、これがいいかなあ？」

「……………どうかしましたか……………」

「びゃ、白さん？」

月が選んでいたものは髪留め

日ごろの感謝にと詠に送るつもり之物を選んでいたわけである

「そ、その、詠ちゃんに送る物、何がいいかなあって」

「……………贈り物、ですか……………」

「って白！？置いてけぼりにしないでよ！」

ツッコミではない

心からの叫びだ

「……………実は、かくかくしかじか……………」

かくかくしかじかって便利だね

「そうなんだ……よし！白、お前は一人でぶらぶらしてて。私は、月さんと一緒に萌えるから」

少し字が違つような気がしないでもないが、まあ、よしとしよう

なんだかんだで取り残された白

萌える少女は熱いのだ

「……………帰ろうかな……………」

「あ、白さん」

「……………周泰さん……………」

まさに帰ろうとしていたところに、幼女チックな周泰に声をかけられる

「すみません、さっきこっちにお猫様が走ってきませんでしたか？」

なにやらあわてた様子の周泰

「……………いいえ……………」

「そんなぁ……………白さん、いつしよに探してくれませんか？」

「……………いいですよ……………」

ちょうど暇になったところなので快諾する

「特徴は、珍しい三毛猫です」

あれ？三毛猫って日本生息じゃ……………

まあ、恋姫クオリティなのだろう

「……………分かりました……………」

「お願いします」

そのままシュタツと消えてしまう周泰

によゝん

下を見下ろすと三毛猫が足にすり寄ってきている

「……………お前か……………」

にゃゝ

そうだと言わんばかりに鳴いている

「……………どうしよう……………」

このまま留めておくのかどうしようかと考えているうちに

「こらー！この泥棒猫！」

いつの間にか足元に居た猫が近くにあった干物を盗んでいた

そのまま走ってきた先は白の足元

「お嬢ちゃん、この猫の飼い主かい？」

はあはあと息を切らしながら店長

「・・・・・・ちがいm『にゃ』」

うまいことかぶせられた

「お代金、払ってくれるよね？」

営業スマイルはごちそうさま出来なかった

「・・・・・・はい・・・・・・」

もう、何が何だか分からなくなってきた白

買わされたのは一級モノの乾物

端的に言つと・・・・・・非常に高かった・・・・・・

足元でむしゃむしゃと乾物を食べているミケ（仮称）

すっかり食べ終わると

みゃゝ

ふふ？どうだ？お前の懐も寂しくなっただろう？これぞ我が神算！
といたげな顔

ぶつちゃけ、ドヤ顔である（猫に表情があるのか分からないが）

「・・・・・・・・周泰さん、遅いな・・・・・・・・」

「おお！そのお猫様こそ私が求めた！」

噂をすればなんとやらである

また逃げようとするミケ（仮称）を白がナイスキャッチ

「・・・・・・・・どうぞ・・・・・・・・」

「ありがとうございます！」

白から受け取ったミケ（仮称）を大層愛でながらあっという間に人ごみの中に消えた周泰

「・・・・・・・・」

また暇になった白

「・・・・・・・・丘にでも、行こうかな・・・・・・・・」

そう言ってその場を後にする

□

□

ぴいぴい

何故か鳥に囲まれている白

あまつさえ頭の上で眠ってる鳥さえいる

そんな中、白はというと

「すーすー」

可愛らしい（男の子に対して使っているものなのだろうか？）を起
て、木に腰を預け心地よさそうに眠っていた

皆さんに想像していただきたい

さらっとしたロングで白髪で長身の女の子が木を背に、鳥たちの中
で心地よさそうに眠っている姿を

もう、鼻血ものである

まあ、男の娘なのだが

「……白、寝てる？」

そんな当たり前の事を聞くのは、我らが不思議系小動物、恋様だ
珍しいことでもないが、ねねを連れずにやってきた

「・・・・・・・・今、起きました・・・・・・・・」

ムスツと言い放つ白

「・・・・・・・・ごめん？」

「・・・・・・・・構わないです・・・・・・・・」

「そ・・・・・・・・よく、いい？」

返事を待たずに横に座る恋

「・・・・・・・・白、きもちいい？」

捉えようによつてはいやらs(ry

「・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・」

またウトウトと目がぼやけ始める白

「・・・・・・・・白は、動物好き？」

いきなり突拍子もないことを切り出す恋

「・・・・・・・・そうですね・・・・・・・・動物と触れ合っていると、自分にはないものを感じますから・・・・・・・・」

それはとても無機質に、無感情に述べられた、白の本音だった

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・だっ たら白は、いいひと」

こちらもウトウトしだす

「・・・・・・・・そう、ですか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うん」

短い言葉を交わした後に、肩を預けて頭を合わせて眠る二人の姿が
数時間、続いたという

その絵は、なんとも様になっていたとか何とか

後日、そのことを月と詠と慶亜に聞いたただされたのは余談だ……………

28話：日常（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんとも微妙になってしまいました

感想お待ちしております

次回も、よろしくおねがいします

29話：過去を振り向くなって言っけど、そんなことができるのは本当に凄い奴

はは、話がめっちゃくちゃだあ！

それでも呼んでくださる方に感謝感激雨霞は降らせないよ？

まあ、難しい話は作者に期待しない方がよいかと

では、どうぞ！

29話：過去を振り向くなって言うけど、そんなことができるのは本当に凄い奴

今日も一日穀つぶしではないことを証明し終えた、白と慶亜

今日の白の目標は、明を捕まえて母親の事を聞くこと

最近、この事を聞こうとすると明が逃げるのだ

今日こそは！と決めて早数ヶ月。光陰矢のごとしであった

「……………僕、師匠を探しに行つてきます……………」

「ん、頑張れよ」

今では仕事を白に手伝わせることなく終わらせるようになった慶亜

その分、机にうずもれている時間が格段に増えたが、白と一緒に入れるので、まあいいかと割り切っている

（これで、月さんたちに差を！って、無理かな……………）

先日の、落ちついた人好みという情報でかなり落ち込んでしまっている慶亜

（いや、諦めちゃだめですよね！萌える少女は熱いのだ！）

字が違うの置いておこう

（けど、どうしよう？……いつそのこと、襲うつて何を考えてるのですか！？）

今、慶亜の心の中では白の天使と黒の天使がいるようだ

白「ダメだよ！そんなことしたら白さんのタイプじゃないよ！」
黒「いんじゃない？一回の快樂にすべてをかけてみるって」

（で、でも）

白「けど、白さん可愛いですよ？私も、狙っちゃおっかな？」
黒「俺もねらっちまおっかな？」

「うがあああああああああああ！」

うがぁ、な慶亜だった

「?????……とりあえず、どこだろう?……」

うがぁ、な慶亜は置いておいて、明の居場所が見当もつかない

明の行動パターンはいろいろありすぎて掴めない

黄蓋と飲みに行っていたり

孫策と飲みに行っていたり

恋とご飯をまむまむしていたり

月と詠をからかっていたり

華雄を慰めていたり

………一人で屋根の上で涙を流していたり

白も、最近明の元気がないのは知っている

ちょうど、白が母の事について聞き出したところからどんどん元気がなくなっている

「……師匠、どこ……」

とりあえず、屋根の上に登る

「……師匠……」

「ん？ああ、白君か」

そこには、一人で空を見上げていた明の姿があった

また泣いていたのか、目が赤く、涙の痕が頬についていた

「……師匠、お母さんのことを……」

今日も無理かもしれないと考えつつ、やはり諦められないのか聞いている

「……白君……」

いつもならここで逃げるのでは？と思考するが別にいいかと思った

「・・・なんでしょう・・・」

「……今日の、そうだね……………夜中の十二時ぐらいに、またここに来て？」

「……………分かりました……………」

ここまで憔悴した明を見たことがない白

少し、何かを感じるが、やっと聞ける好奇心の方が強く、それ以上はなにも感じなかった

「……………今日は、一緒に夕食を食べましょうね……………」

「うん……………ありがとう……………白君は、変わったね？」

「……………はい……………」

自分でもそう、“思える”ようになった

まだ、戸惑い、戸惑いながら、人の心が分からないことがありながら、ここまでできた

「うん、じゃ、夕食のときね？」

「……………はい……………」

そう言って屋根から下りる白

そのあと

「……あとは、君の強さに、任せるよ……いつまでも子離れできないのは、みつともないからね？」

その顔は、慈悲深い聖母のように、ほほ笑んでいた

そして、この話を、数人が聞いていたことは誰も知らない

□

□

夕食時になると孫策が

「今日は、みんなでたべましょー」

と言うので、まあワイワイと全員でやっていた

「…………師匠、大丈夫ですか…………」

「あ、ああ…………白君、大丈夫だから…………君は皆のところ行ってなさい」

「…………はい…………」

そう言いながら、明と皆のところを数回往復している白

一番一緒にいた時間が長いのだ

そんな人物が気分悪そうにしていたら、誰でも気になるだろう

時々、思いつめた顔をしては顔を横に振っている

まるで、何かを振り払うかのように

とりあえず慶亜達の横に腰をおろし

「…………ふう…………」

一つ嘆息

「…………白、明さん大丈夫か？」

慶亜の一言に対して

「…………大丈夫ではないでしょう…………」

白の喋り方で即答とは言えないがすぐには答えた

「…………あんたは、傍にいてやんなさいよ」

「…………今さっきから、断られ続けてます…………」

「……白さん……」

遠くで恋が明に近づいて行くのが見える白

「……いっしょに、たべよ？」

「ああ、ごめん。食欲、ないんだ。ごめんね？」

「……さやか、怒ってる？」

「怒ってるんじゃないんだ。自分の弱さには怒りそうになるけどね」

「……そ……恋も一緒に悩んであげる」

「うん、ありがとう……」

そう言って何かを話し始める二人

「……君は、優しいね」

「…………さやか、一番優しい」

「そう言ってくれるのは、嬉しいよ」

ここだけ聞いたのなら恋人同士の話に聞こえてもおかしくない

「…………恋、さやかの味方」

「うれしいよ………」

「……だから、元気出して？」

「うん。はは、年下に慰められて、ちょっとはいいね」

「……年下？」

「うん？ そうだよ？」

「……………ほんと？」

「うん」

「なんs「それは、やめておこつか？ 女子は十八を過ぎても永遠に十八だからさ」うん」

どんなに気が沈んでいてもとりあえず、そういう系の話は全力で阻止をする明

とりあえず、笑っている明を見れておちつきをとりもどした、取り戻してしまった一同

「……………」

ただ、一同の眼は惜しむことなく二人に注がれていたのを二人は気づいていない

□

□

夜、いや、正確に言えば深夜だろう

下弦の月が神秘的に禍々しく天に坐している

月には何もない。そう、何も無いのだ。

「・・・・・・・・・・師匠・・・・・・・・・・」

「ふふ、やあ、白君」

いつも通り無表情で話す白と、これから**禁箱**^{パンドラ}でも開けてしまうかのような顔をしている明

「・・・・・・・・・・では、お願いします・・・・・・・・・・」

形式的な礼を取る白

「そうだね・・・・・・・・・・月詠の事を話せばいいんだよね？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・死んだってことは、話したよね？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

「じゃ、過去の事から話そうか。あま、今となっちゃんなんでも過去なんだがね」

自嘲気味にそう話す明

「じゃ、あたしと、月詠の関係からだね」

そうして、ぼつぼつと語りだす

□

□

本多 月詠

その人物は一言で表すとするなら、儚き美と誉貴き潔癖。一言になつてしまったのはどうでもいいことだ

儚げなその容姿。目を引くのが純白の髪。そして、他人を寄せ付けないような、全てを射殺するような鋭き眼光。

そして、なによりも、強かった。精神的にも、身体的にも。

そう、歴代最強と称された、本多明と肩を並べることができるくらいここで、本多流掌術の成り立ちを説明しよう

その名の通り、本多家。創設者は、本多 忠勝。という訳ではなく、その部下によって、忠勝の身边警護および、仇する者の抹殺

そう、暗殺術であつた

源流は伊賀忍法。教えを説いたのは服部半蔵その人かもしれないといつかもしれないらしい

どうでもいいことだ

大事なのは、歴史。

世に、戦乱が絶えてからも、その血脈は代々引き継がれていった

警護するにあたって、いろいろな武術を取り入れた。剣術槍術弓術弦術忍術拳術柔術歩術操術、その他諸々。あの時代にあつたすべての武術諸々を取り入れ、ベクトルを殺しの方にとっていったのが

本多流掌術

内気孔を利用し、相手を内側からも外側からも破壊することができる拳法

何故本多という姓を名乗っているのか不思議に思つた方もいるだろう

それは、初代師範、その人が忠勝と妾の間の子、それも時代の表舞台に現れることなく、影に徹したものだっただから

それから、四百年、そう、四百年。別に呪われた血と言う訳でもな

いが現代まで受け継がれたという訳

暗い噂では、国ともつながりがあるとのうわさも

そんな中、宗家に生まれたのが、本多 月詠。分家に生まれたのが、本多 明。

二人は、宗家だ分家だということがまるで、道端に転がっている石ころ以下の事だと考え、親友として、ライバルとして、すすくと育った

「はあ、疲れましたね。少し、お茶にしませんか？」

「はあ？修行初めて√3秒だぞ？始めた瞬間になに言ってたんだ？」

遠き日の明は少し真面目だったようだ。年を取って「殺すぞ？」大人になられてさぞ人生に余裕が生まれたのでしよう！

「冗談ですよ、冗談。ささ、始めましょう？」

そこに、どこか飄々とした雰囲気でありながら、瞳の奥に儚さと強さをたたえた女性。その人こそ、白の母親。本多 月詠だった

ムスツとしたのかと思えば急に近寄ってきて、子犬のような小動物感を漂わせているような人であった

そんなこんなで、ツンデレなのだが。實力は、当時にさえ歴代最強と称されていた明と肩を並べることができるくらいであった

性格は、温和だがツンな時も多く、よく分からないというのが多数

の意見だった

「こ、今度こそ、疲れましたね？お、お茶に、しましょう？」

「ふいゝん。今度は本気でやってみたいだな？なら、お茶だな」

なによりも、お茶の時間が大好きな月詠だった

「明は、好きな人とかいるの？」

「ぼふっ！？い、いきなりなんだよ？」

このころはまだ純情な様であった（十代で純情じゃなかったらいつが純情なんだよ！）

「ふふ、その反応は、いるってことですね？月詠には分かります」

「そ、そんなこと言っ
てないだろ！」

「顔が真っ赤ですよ？明がこんなに初だとは思ってもみませんでしたけど」

「そ、そんな月詠はどーなんだよ？」

「ん？いますよ？」

「ほえ？」

あまりにあっけらかんと答えられ、拍子抜けしてしまう

「大好きで、大好きで、仕方ありません」

素面で答える

「……もう、いませんがね？」

「す、すまん」

病気で死んだのだと、月詠は言った

「けど………明をびっくりさせておきたいから、内緒です」

「なんだよ、いえよ、そういうのきになんだよ」

「当り前です。気にさせるために黙っているんですから、気にし
てくれなかったらがっかりです」

さわやかな笑顔でさらりと言う月詠

その顔を見た門弟の数人が鼻血をまき散らし倒れたのはどうでもい
いことだ

その数カ月後、本多 月詠の第一子。本多 白の誕生だった

□

□

「お前が生まれてから、月詠はいつも笑ってたな」

「……………そうですか……………」

「……………これで、いいか？」

「……………だめです……………お母さんの、最後、教えてください……………」

いつもの白とは打って変わって、非常に積極的である

「……………分かったよ……………」

□

□

白が正当の子。それは紛れもない事実である

しかし、白の親、父親の方はどこにでもいるような平凡な男だった

ここからは、よくある血統の話である

そう、月詠にも許嫁がいたが、それに反して自分の好きな男と子供

を作った

宗家と分家の老害達は、今すぐにおろすように言った

それでも月詠は

「いやです。吹っ飛ばすぞ老害ども」

言つてのけた。強かな女性であつた

そして、ついに生まれた白。老害達は憤慨した。頭が固いのである

しかし、すすくと育つ白

「おねーたん、だれですか？」

「か、か、か、か、か、か、か、か、か、可愛いイイイイイイ！！！！」

このころから、白命になつた明である

「ふふ、そうでしょう？私自慢の子供です」

喋り方も二人は似ていたようだ

そう、どんどんすすく育つていった

「なあ、月詠。最近クソ爺どもが変な動き見せてるから気をつけろよ？」

「大丈夫です。明以外に負ける気はないですから」

別に月詠は慢心しているわけではない。ただ、現実を述べているだけだった

「おかーさん、おながへりました」

「ん？そ、なら、お茶にしましょうか？」

そんなふうに、時は流れていった

そして、白が小学校入学前。話せばどこにでもある小説のようなくだり

そして、登場人物にとっては最低の不幸

「探せ！ここら辺に隠れているはずだ！」

事情は変わった。どこにでもある小説のように、宗家と分家が白を跡取りとして迎えさせようとした

それは、最悪の事である。事前に話したように、この流派は暗殺

ようするに、人を殺す為のモノ。親として、そんなもの受けさせたくないに決まっていた

「はあ、はあ、大丈夫ですからね？心配しなくても、あなたに、責務を負わさせるつもりは毛頭ありませんから」

二人は逃げ回った。どこまでも……………しかし

「もうよい、最初から女が跡取りであつたことに不満を持っていた。月詠を生かして連れてくる必要はない。かわりに、一週間以内に連れてこい――」

老害達からの、非常な命令だった

それから、絶望が絶望じゃなくなるくらいの絶望が二人を襲った

門弟から師範まで、総員出動

「このクソ爺ども――だからクソ爺なんだよ！くそつたれが――」

激昂する明

「口は慎め。命令だ」

「……………最後の、命令になったな？」

「なに？」

「はん！……………老害ども、その薄汚い腰をその席からどかせろ」

惨殺であつた。

「くそ、間に合えよ」

そして、明がつくころ

命令通り、生死問わず、月詠を追いかけているもの

そしてついに、

「『邪魔』です!!」

二人は囲まれた

どれも、師範代以上の強さ

一対一では負ける筈もないが、多対一では、数の暴力の前ではどうにもならなかった

「は、はあ、はあ……くっ!？」

すでに数日何も食べていない二人

さらに、白をかばうのに必死で傷が体中に出来ていた

「いやだ、この子は、失いたくない」

自分にそう言い聞かせる月詠

「この子には、幸せになってもraitai。籠の中の鳥にはなっほしくない」

ボロボロと涙がこぼれる

しかし、本人には涙が流れているのさえ気づかないほどに消耗していた

どうにかその場を振り切り、逃げだす。しかし、それでも捕まるの

も時間の問題だろう

ヒュヒュッ

死が、人間を襲う音だった

「くあ……………どうしても、世界は私の幸せを拒んでいるのかしら?」

致死性の毒であった。即効性のない、じわじわと効いていく

「はあはあ、ダメですね。幸せが逃げちゃいます」

近場にあった小屋に逃げ込む

「お、おかーさん」

「大丈夫、あなたの、お母さんだから」

「し、死なないで?」

「……………白、お腹、すいた?」

「……………うん」

「……………なら、お茶に、しましうか……………」

「うん、したいよ。おかーさん、おかーさん……………」

ふっと笑う月詠

「白……あなたは……強く……生きなさい？白、私のいとしい子……お腹が減っているでしょう？……私の肉をたべな……さ……い……」

「かあ、さん？逝かないで、母さん……」

そこで、窓の外に気配が

「だれ……でしょうか？」

そこには、血まみれの明の姿が

「月詠……」

「はは、無様なところを見せてしまいました……」

「これは、毒？」

「そうですね……相手をいたぶるのに適した致死性の猛毒です」

「おかーさん、死んじやわないよね？おねーさん、死んじやわないよね？」

涙をこぼしながら、何かに請うように喋る

「……白君、お母さんを抱きしめてやってくれ」

「……うん……」

いつも抱きしめられていたのが、抱きしめる

「白、あなたは、幸せに……………」

抱きしめ返す、月詠

よくある、そう、本当によくある小説のように、悲劇が起った

「明……………お願いします……………この子は……………この子は幸せに、幸せに、いっぱい幸せを、与えてあげてください……………」

そういつて、息も絶え絶えに、叫ぶように言った

「……………まか、せろ……………」

「……………はは、泣かないください……………元気を取り柄なのに……………どれもなくなしたら、婚期を、のがします、よ？」

「……………うつさい……………」

「白……………明……………そして、あの人……………三人のお陰で……………楽しい人生です……………」

「おかーさん、おかーさん」

「……………いつか、現れる、あなたの大切な人を“護れる”ように……………明、掌術を、教えてあげてください……………護れ

るように……」

「……ああ……」

「だめだよ、だめ。しんじや、いや……」

縋りつく。縋りついて逃がさないように

「……ほんと、よくある、小説みたいに、救いようのある、話だったら、よかったのになあ」

『白……私の……愛しい……子……
ばいばい……』



「……………僕の、せいで?……………」

急に取り乱し始める白

「……………白君は、それから、全部抜けた……………感情も記憶も、全部」

そう、白にないのは、感情だけではなく、記憶もだった

人は強いショックがあつた場合、自分に都合の悪いものを排除するらしい

そして、そのショックが大きすぎた結果だ

「……………僕の、せいで?……………」

頭を押さえる

「それは、違う」

「……………僕の、せいで?……………」

頭をかきむしりだす

「違う」

「・・・・・・・・僕の、せいだ・・・・・・・・」

全て、思い出した

そう、分かっていた。自分が生まれたせいで、生まれたせいで、母が殺されたことを

それゆえに、弱く脆い自分は、自分を切り離れた

切り離しても、残っていて見せたのがあの夢

血まみれの死体。声なき死体。温もりなき死体

自分に覆いかぶさるようにして、自分の幸せを優先して、自らを犠牲にした

「・・・・・・・・あ、ああ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

「落ちつけ、白君」

「ああ、あああああ・・・・・・・・・・あああああああああ」

心にある感情が満たしていく

『虚無』で、満たされていく

自分が、知りたかった。それゆえに、壊れる。因果応報

「……僕は、僕はあ……」

なんで知りたがったんだろう？なんで？忘れていた方が都合がいいのに。

なんで思い出したんだろう？なんで？都合が、いいのに。

「……ああああ………ああああああああああああああああああ……」

全部、全部、全部、崩れ落ちた

29話：過去を振り向くなって言うけど、そんなことができるのは本当に凄い奴
どうでしたでしょうか？白君は肉を食べてないよ？ほんとだよ？

ここから、ここからが、大変です

応援して下さい方がいると信じて言います

期待を裏切るかもしれません！

次回も、よろしくおねがいします！

30話：ほんと、知らなきゃよかった（前書き）

なんだ？暗い！

では、どうぞ！

30話：ほんと、知らなきゃよかった

僕は、お腹がすいていた

ずっと、ずっと、お腹がすいていた

それでも、お腹が減っていた

どんなにお腹が減っても、その上限、いや下限はなくなかった
何を食べても、何を飲んでも、どんなことをしても満たされること
がなかった

師匠の話を聞けば、満たされるのだろうと思った

そう、満たされた

いや、既に満たされていた

最初からあるもので、満たされていたのに気づいていなかったただけだ

全部、空っぽで満たされた

憶えている、今、鮮明に思いだせる

僕がお腹が減っていたときに、

『お茶にしましょうか？』

その声を覚えている

しっかりとほつきりと明確に鮮明に

気持ちが悪いぐらい覚えている

あの人の息遣い、声色、目、髪、身長、雰囲気、感触、全部覚えて
いる

そして、あの人の最後の姿、死に様、言った言葉、表情、冷たくな
っていく体

覚えている

そう、覚えているだけだ

もう、覚えているとしか言いようがない

もう、いない。僕のせいで。僕の存在のせいで

僕がこの世に生まれ落ちたから

僕がこの世界で馬鹿みたいに育ったから

僕がこの世界のことを何も知らなかったから

僕が生まれていけないことなんて知らなかったから

僕が、僕の存在は否定されるものだったなんて知らなかったから

僕は、僕は、僕はあ、僕の存在は

いちゃいけない

この僕と言う存在が、一人の人生を壊した。大好きだったお母さんの人生を

壊した。壊して蹴って殴って切り刻んで粉々にして、絶望を与えた後、壊した

怖い、恐い、こわい、世界がコワイ

何もかもがコワイ

自分と言う僕が存在しているせいで、他人の世界を壊してしまう

嫌だイヤだ嫌だいやだ嫌だイヤだ、あゝ あああああああああああああああああああ！！

心が、生まれてしまった

一度死んだ心が、もう二度と生まれる筈のなかった心が

生まれていいはずのなかった心が

僕の、体のどこかに生まれてしまった

心を知りたい、心を見たい、心と触れ合いたい

そんなことを思った僕が馬鹿だった

ただ怖いだけだ

自分が怖くて

相手も怖くて

全部怖くて

不安で不確かでも何にも保証はなくて

コワイ

僕が望んだのはこんなものなのか？

こんなに、理不尽なものなのか？

だったらいらない！

あるときみたいに消して下さい！

速く、もっと、速く！

消して下さい！

消してくれる人がいるのならなんだってあげる

望むのなら、腕だって足だって眼球だって耳だって鼻だって心臓だって肝臓だって腎臓だって脾臓だってなんだってあげる

だから、だから！

僕の中からいなくなってくれ！

「あああああああああああああああああああああああ
ああ！！！」

誰か・・・・・・・・・・ダレカ！

「白！」

アナタハ、ダレダ？

ココロヲケシテクレルノカ？

ケスノハタイヘンデスヨ？

バラバラニナツテヒロガリマシタカラ

ソレデモ、ケシテクレマスカ？

「ダレ、ダ？」

「白さん」

「白！」

ダレダ？イヤ、ダレデモイイ

ボクノココロヲケスノガムリナラ

ボクゴトケシテクレ

イツソノコト、セカイモイツショニケシテクダサイ

□

□

「白さん……………」

「白……………」

私たち三人（慶亜、月、詠）は、昼間の話を盗み聞き、今、盗み聞いた

ほんのちょっとした好奇心だった

白の過去が知りたい

白自信をもつと知りたい

それだけの筈だった

聞いたら、後悔はしていないが、何かもやがかかる。壮絶だった

しかし、白はいつも通り無表情なのかとそう思っていたら

苦痛に、顔をゆがめていた

背中をバツサリと切られても歪まなかった顔が

苦痛に歪んでいた

「へえ、白にもそんな過去がねえ」

「!？」

横を見ると、雪蓮様……………以外にもって、全員？

ひ、秘密にしてきたのに

「バレバレだぞ？何か隠しているの」

か、華雄さんに言われたら終わりだ

「……………どうする？」

恋さんが皆に向かって言う

「そりゃ、家族なら慰めてあげなきゃ」

その時

「あああああああああああああああああああああ
ああ……！」

白の………初めて見る、白の、『感情』

『悲しみ』『哀しみ』

「白……」

気づいたら、気づいたら、足が出ていた

「白！」

気づいたら、叫んでた

月さんと詠さんも叫んでいる

「ボクヲ、コノセカイカラ、ケシテクダサイ。ドンナホウホウデ
モイイ、ケシテ・・・」

涙を流しながら、懇願している

「ボクガイルダケデ、イタダケデ、オカアサンガシンダ。ボクノ
セイデ」

「白君！しっかりして！」

「コワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイコワイ、コワイ
！」

その時

そう、崩れ去りながら、呟いた

「白!!」

ここ数カ月で白を分かっていたつもりだった

強くて、どんなときにも動じなくて

不器用な奴で

けど、本当は……

すごく、脆い、繊細で、心をそのままさらけ出していた、私たちと同じ、人だった

ただ、人だった。そう、人だった。

カナシイ事があって、それをカナシメル、人だった

それに気付けなかった

「私は、私はああああああ!!」

私もまた、その場に、泣き崩れた

気付けなかったことが情けないんじゃない、悲しかった

好きな人の事を何も知らない自分が、恥ずかしかった

□

□

『こんなのは、ぜんぶ、嘘。全部なかったことだよ』

そう、言ってくれる人がいたのなら、どれだけ楽だったか

ああ、ほんと、全部ウソだったらよかったんですけど

ほんと、知らなきゃよかった・・・

『お母さん、すみません。師匠、いや、お姉さんには、いっぱい
の幸せをもらいました。けど、誰かを護るのは、出来そうにもない
です。すみません・・・願わくば、もう一度、お茶を飲ませてく
ださい・・・僕の、唯一の望み、です・・・・・・』

30話：ほんと、知らなきゃよかった（後書き）

この小説も、なんか、いろいろすっ飛ばして終わりそうな気がして
ならないです

では、次回も宜しくお願いします！

31話・ぶっぴんもいー(前書き)

今回は、厨二です

では、ぶっぴんー！

31話：どうでもいい

慶亜 side

昨日、白が過去の事を思い出して、錯乱した後すぐに気絶した
壮絶だ、凄絶だ、形容しがたい

私も、泣いた。恥も外見もなく、喚き散らした

私も、いつの間にか眠っていたみたいだ

よく見る天井を今見ているんだからそうなんだろう

「白……………」

精神的にすり減りすぎた

体が追いついていかないが、引きずりながら白の部屋に向かう

ドアノブに手をかけ

「白、入るぞ……………」

返事を待たずに入った

そこには……………

「白？」

そこは、無人の部屋で、白の荷物だけが無くなっていた

いない？

「白？いるんだろ？どこにいるんだ？おい、早く、早く出てきてよう、白う……………」

白が、いなくなった

「あああああああああああああああ！！」

□

□

広大な荒野に一つ、白い点が落ちていた

その点は、ゆらゆらとふらつきながら、どんどん歩を進めていく

まるで、幽鬼のように

「……コワレロ、全部、無かつたらいい……」

馬に乗りぼそぼそと呟きながら、それでも歩を止めない

明け方より少し前に城を抜け出した

その時に、なんとなく厩により、白斗を連れ出していた

意味は、ない

馬の上で、呪詛のように、自分を呪うかのように、呟き続けている

この旅に意味はない。ただ、人との関わりを消したかった

人と居ると余計なことを考えてしまう。

零だった白の心はマイナスに近づきつつあった

「おい、穢ちゃん」

気がつくとも白の前には数百の賊が出現していた

「馬からお」「『邪魔』だ」

グシャッ

白斗の強烈な蹴りが賊の顔面を文字通り潰した

「てめえ！何しよ」「『邪魔』だと言っている」

グシャグシャッ

殺した賊の死体を踏みしだきさらに蹴りを与え絶命させる

そこで、白斗からゆらりと降りる

『邪魔』

一言残し、一方的な殺戮が始まった

腕を折り

足を捻じ曲げ

首の関節を外し

耳をちぎり

目をえぐり出し

腹を貫き

口を吹き飛ばし

心臓を貫く

賊はただ悲鳴を上げ逃げ惑う

逃げる相手さえ、執拗に追いかけて殺した

「ば、化け物めえええ!!?」

「・・・・化け物?・・・・」

そうか・・・・自分は、化け物、だったんだ・・・・

「・・・・いいですよ、化け物で・・・・」

最後の人間にとどめを刺しながらそう言った

頭に、穴が開いていた。手を抜いた瞬間、どろっとした脳髓が溢れ出す

ドチャッ

「…………ただ、コウスだけです…………」

退かせるのではなく、コウス

その顔は血に濡れ酷く歪み、妖しく嗤っていた

□

□

「白う！白う……………」

白の失踪はすぐに呉の文武官に知らされた

すぐに搜索隊が立てられ、搜索が開始された

慶亜もかなり心の方をやられ、なかば錯乱状態だ

そんな中、凶報に凶報が重なった

魏、襲来

魏が、凄まじい速度で呉に攻めてくるといふ

不幸とは重なるものだ

もちろん、呉の将兵は負けるつもりはない

しかし、勝てる見込みもなかった

さらに、白の失踪

踏んだり蹴ったりである

「慶亜ちゃん、落ちついて……」

ずっとふらふらと歩きまわっていた慶亜を止める明

その顔には、いつもより、精気がなかった

「白う、白う………」

肩を掴まれてもなおうわ言の様に呟き続ける

「白君………」

明の頬にも、冷たい何かがつたつた

□

□

白は何も考えず馬の歩を進めた

ただ、真っ直ぐに。どこにたどり着こうともししていない

ただ、真っ直ぐに

そんな白の前方に地平を埋め尽くす何かがあった

そう、魏の将兵だ

それでも真っ直ぐ進んだ

そして、ある程度距離を縮めたところで軍の侵攻が止まる

歩み寄る鎌を携えた霸王

「あなた、本多 白ね？」

「.....」

「どうしてこんなところにいるのか知らないけど、こちらに降るつもりなのかしら？」

「.....」

「まあ、いいわ。春「華琳様!？」え？」

「『邪魔』だ」

獣のような速度で曹操に突貫する白

その二人が接触しようとした時、間に入る影が

ガンッ

その拳を濡れたような刀身で受け止めたのは

「……北郷、君……」

「やあ、白。はじめまして」

「…………『邪魔』をするなら、コワシます…………」

淡々とはいかず、語尾に殺気がこもる

「はは、ほんと、はじめましてだな？やっ……………」

刀を構える

「お前の『心』に、会えた気がするよ」

「…………『心』？…………どうでもいいです……………」

拳を構える白

「…………行くぞ？」

「……………コワス……………」

（なあ、白。友達だろ？お前も、言ってくれたからな？今度は……………）

「俺が護る番だ!!」

31話・どうでもいい（後書き）

どうでしたか？

計算もせずに書いてたら、何かこんなことに……ま、いつか、

北郷君、この外史では、結構強くなっております!!

感想待ってます！

次回も、よろしくおねがいします！

32話：理由なんてない。言葉なんて必要ない（前書き）

ハア、昨日は辛かった

姪の風邪がうつって、死ぬかと思った

では、どうぞ！

32話：理由なんてない。言葉なんて必要ない

拳と日本刀を構える両者

「一刀！いいから下がちなさい！」

「いやだ！」

曹操が一刀に言うが、聞く耳を持たない

それもそうだろう。いくら夏侯惇を倒した白とはいえ、魏の戦力は一國を攻め落とすためのものである。絶対に、殺される。

「これは、ダチ同士の喧嘩だ！そう、喧嘩なんだよ！」

「はあ？」

男の思考回路はよく分からない曹操とその他諸々

「行くぞ！」

「……コウス……」

両者ほぼ同時に地を蹴り、駆けだす

白の右上段蹴りが一刀のこめかみを撃ち抜かんと襲いかかる
それを頭を下げやり過ごす

そのまま下から斬りあげる。もちろん、刃のついた方でだ
身を引き、瞬時に切り返す

「うお!？」

少し体勢を崩したところに、容赦なく一撃粉碎の拳が襲う

ガンッ

「はは、ラッキー」

ちょうど剣の腹で受け止めることができた

「白、そんなもんか!」

「……………戯言たわごとを……………」

「友達だからな。バカみたいなことぐらい言っさ!」

ガガガガガガガガガガガッ

剣と拳の応酬

体術が得意な楽進でさえ圧巻と言わしめる蹴り

剣術が得意な夏侯惇でさえ壮絶と言わしめる斬撃

「……………何故、そこまで僕にこだわるんですか……………」

「理由なんてない！ダチだから！言葉なんていらん！」

「……………そうですか……………」

右と左の三段蹴りコンボ

「……………あなたが、僕を、コワスんでしょう……………」

ただ、自分を、コワシてもらいたかった

この、醜悪な、化け物を

「壊さない！護る！」

「……………コワシてください……………」

「イヤだと言っている！」

「……………なら……………」

壊してくれないのなら

『コワス』

その瞬間、白が一刀に襲いかかった

それを瞬時に察知し高速の刺突を放つ一刀

グサッ

確かに、正確に白の体を一刀の刀は貫いた

それでも、一刀は白を殺そうとはせず、左肩を貫いた

「……………確かに、痛いですね……………しかし、それだけの様です……………」

「白？」

ガシッ

刀の刃を気にせずにかっしりと掴む

ドスドスドスッ

体に、無数の矢が突き刺さる

その衝撃でふらふらと後ろに後ずさり、刀が抜ける

「……………」

無言で、矢を抜きだす白

急所は外れていたようだ。いや、外したのか……

「白！大丈夫、か！？」

近寄った瞬間、白の蹴りが額をかすめる

「……………まだ、続いています……………」

「ぐ！秋蘭！なんで射った！」

「……………個人の問題を、軍事に挟むな……………」

顔を俯かせたまま、それでもはつきりと言った

「けど！うわ！？」

いつの間にか接近していた白の回し蹴りが頭の上をかすめた

「……………コワシテ、ください……………もう、疲れました……………」

ぼろぼろと涙がこぼれる白

もう疲れた。コワシテ。コワシテ。そう、何度も、呟いた

「ッ！？だから！イヤだって言ってる！ダチ護れなくて、なにが漢だ！」

「・・・・・・・・その友達の、最後の、願いです・・・・・・・・」

「友達を裏切るのもまた友情ってやつだ！」

刀を捨てて思いっきり拳で殴る

「・・・・・・・・知りません・・・・・・・・」

白も拳法など考えず力任せに殴りつける

「はっ！痛ってえなあ！！」

「・・・・・・・・だったら、さっさとコワセ！」

「イヤだって言ったらイヤだ！」

まさに素手喧嘩

二人とも体中に血がにじむ

「化け物がなんだ！」

「…………怖いんです…………」

自分の存在が

「もう、嫌なんです。この世界に、自分がいることが…………」

「なんでだよ!」

「だから、怖いんです…………」

人の『心』が

「北郷君は、強い…………けど、僕は…………」

「ああそうさ!俺は強い!そしてお前は、お前だって強い!」

拳を振り切る

そのまま二人で倒れこむ

「はあ、はあ、お前がなんでそこまで荒れてんのか知らないけど、一緒に悩んでやるから…………」

「…………一緒に…………」

いつも独りだった白にとって初めての言葉だった

「…………やはり、北郷君は、強い…………そして、僕は…………弱…………い…………」

そう言つてとうとう意識の意図がぶちぎれる白

一刀に方に倒れこむようにして気絶する

「はは、俺、頼られてるけど……俺、も……限……界……」

そして、一刀の意識もそこで、切れた

□

□

白と一刀が仲良く一緒に気絶して数時間

魏はそのまま呉に攻め入った

しかし、その折、功に焦った一部の兵が呉の王、孫策を暗殺しようとした

「貴様等、言い残すことは……ないだろうな」

ザクッ

曹操の霸王たる道に泥を塗った

その罪は許されるべくもなく、愛鎌にてその首を屠られた

「退け！反撃をすることはこの曹猛徳が許さん！！」

すぐさま一切の反撃をせずに国境を抜けた曹操軍

そんな中、孫策はというと

「天の世界の言葉で言うと、なんて言うのかしら？」

「ラッキー、だね」

ピンピンしていた

みなさん！憶えているだろうか？いや、憶えていないだろう。

皆さんご存じのびゃつくんかばん。あのかばんの中身に解毒剤が混ざっていたことを

毒を受けて誰もが絶望していた中、明が

「白君の、かばん」

白、かばん置いて行っていた

見つける

即治療、ということだ。なんともまあ、御都合主義であるが、作者の考えなしのせいです。すみません

そして、白はというと

「・・・・・・・・知らない天井だ・・・・・・・・」

知らない天井だった

目が覚めても、今まで通り『心』があるが、何かあったかいものを感じる

それが『真心』だと気づくのは、まだ白には難しいだろう

「気付いたみたいね？」

「・・・・・・・・曹操さん・・・・・・・・」

布団の横には一刀と、それを寝ずに看病していたのか目の下にくまがある曹操

「本当は即打ち首なのだけど、この大馬鹿者に免じて許してあげるわ」

「誰が大馬鹿者だって？」

「あなたよ」

「酷いや。少しぐらい焦っても……………」

目が覚めていきなりコントを始める二人

「北郷！」

いきなりガチャリと開けられる扉

「え？春蘭？みんな？」

なんで起きたのが分かったの？と聞くと

「こっ、なんだ？きゅぴんと来たのだ！」

なるほど。でこピカーンですね。分かります

「む？本多も起きたのか？」

警戒心がまったくない夏侯惇

「………そうですね………」

まったく緊張感のない白

「そんなんでいいのかよ………」

「北郷の友達なのだろう。なら、疑うべくもない」

ほかの将兵が敵意の眼を向けている中であっけらかんと言いつ

「そろそろいいかしら？」

やっとという感じで曹操が間に入る

「で、あなたの事なのだけど。包み隠さず言つと、捕虜よ、人質
よ」

呉での出来事をそれこそ、包み隠さず言った曹操。普通なら隠すのだが、そこらへんが霸王たるゆえんだろう

「……………そうですか……………」

「なに？驚いたり、慄いたりしない訳？」

「……………疲れたんで、寝ます……………」

そう言つて、布団をかぶる白

一層、白に対する視線が痛くなる。まあ、当の本人は全く気付いていないというか、気にしていないのだが

そこでまた、がばりと起き上がる

そして、一刀の方を向き

「……………ありがとう……………」

満面の笑みを向けて、感謝の念を示した

そこにいた者全員がすぐさま鼻に手をあてる

（か、可愛い！！）

ちなみに、一刀も鼻を押さえている。そこからのぞく紅い液体は……

「……………？……………おやすみなさい……………」

「お、おう」

また布団をかぶる白

「ふ、ふふふ、は、反則ね？攻撃力が半端じゃないわ」

曹操の手についている紅い液体は？

「た、隊長と白殿………ボフンッ」

とりあえず、沸点を超えた楽進。鼻血がつらつらと垂れる

「な、なかなかやるじゃない」

とりあえず、匂？の鼻からも紅い液体

「ほわゝ、破壊力抜群ですねゝ」

この場で唯一冷静を装えている程？。少し、鼻の下が赤くにじんできているのは気のせいだろうか？

「あの可愛らしい容姿とは裏腹にもものすごいイチモツバツ！？」

いつも通り、いや、いつも以上の鼻血を噴き出した郭嘉。そのあとはいいつも通りとんとんとである

「ほ、ほら。この可愛い寝姿を独り占めしたいからみんなはさっさと外でろ！」

『まさか男色？』

「ちげえよ！」

「分かったわよ。ほら、皆でるわよ」

ボタン

「……ほんと、寝顔は、いや、寝顔も可愛いな……」

「一刀の中で、なにかが目覚めようとs」してたまるか！」

「……すゝすゝ……」

白の寝顔は、穏やかに、健やかに、笑っていた

「まあ、あれだ。くさいこと言うと、友情の勝利ってやつだな？」

本当に、くさかった。厨二臭がぶんぶんする

「ま……おやすみ……」

そうして、一刀も眠りについた

くさい友情。粘着質で、壊れた『心』を繋ぎと

め
た

32話：理由なんてない。言葉なんて必要ない（後書き）

厨二へ（。ロへ）ココハドコ？（ノロ。）ノアタシハダアレ？

やってもうたあああああああ！！魏の捕虜だと！？

馬鹿なああああ！！白君の、白君の貞操があああああああああ
ああ！

いや、一刀君は一線を超えるような男ではないと無闇に信じている！

あれです。一刀君におつたつ三本柱

『努力・友情・勝利』ですね。いや、あと一つ。精りよkいやな
んでもないです

まあ、厨二ですね。もっと、シリアス調を伸ばしたかったんですが、
これ以上やると、主に作者の腕前的な問題が浮上してきますので（
今でも大概だがな）

本当は、白君がここで殺されそうになってあの二人が助ける寸法に
したかった訳ですが、それしたら、「てめえ！なにしてんだ！」的
な感じになりますので

まあ、こんな作者ですが読んでくださる読者様に感謝しながら

次回も、よろしくおねがいします！とさせていただきます

33話：レッツ既成事実（前書き）

今回はご都合主義全開です

では、どうぞ！

33話：レッツ既成事実

白が魏に捕虜としてとらえられた。それは大した問題でもない

そう、政治的にいえば、そうたいした問題でもない

「……す〜す〜……」

白の魏での日常と言えばとりあえず、昼寝だ

いつだって気持ちよさそうに目を丸めて可愛らしい寝息を立てながら眠っている

眠っているだけなのだが

「……めがとんぱんち……」

……何故か寝像が恐ろしく悪かった

すでに白の寝ていたベッドは穴だらけである

これは、『心』が過剰反応している結果だろう

生まれたての心。ようするに赤ちゃんである。みなさんは赤ちゃんの寝像の悪さご存じだろうか？

手、足、体、全てを使ってジタバタする

ちょうどそんな感じである。今日あったことを夢の中で思い出しながら、あったこと以上の事を寝像で表す。ハタ迷惑にもほどがある

「……zzz」

昼寝？キャラと言えばこの人。程？である

何故か知らないが、白の横ですやすやと眠っている

別に、他意は……ある

それは、朝方の事

「既成事実を、作る？」

「そうよ。まあ、失敗しても大した問題ではないのだけれど。遊びみたいなものよ」

軍議の場を作りでかかと言言した曹操

「なるほど。俺は飽きられたってわけか……orz」

「違うわよ。この魏の中で、一瞬でも白の事を可愛いと思ったものの、挙手しなさい」

すっすっ

もちろん、全員の手が挙がった。曹操と一刀でもある

「そしてその中で、一刀と関係を持っているもの、手をおろしな

さい」

ほぼ全員の手が下りたわけである

圧倒的な魏の層の厚さの前に一刀の種馬パワーは届かないのか!?

まあ置いといて、上がったままなのは

「まあ、兄ちゃんとはダチみたいなもんやしな」

霞

「誰があんな全身精液まみれと……」

旬?

「か、一刀殿と、か、関係。その逞しい体で私のきゃしゃな体を強引にひらくブホッ!？」

郭嘉

「はい、とんとん」

程?、なわけである

そして、何故かレッツ既成事実な訳である

なんで?な人もいるだろう。ご都合主義を許容できるかどうかは、貴方次第です(＾)＾d m

「その中で、別にいいよ、なものはいる？」

それでも手が拳がっていたのは、霞と程？

「けちゃんに先立ち、ウチが……くく、萌えてきたあ！」

「うん？良い仲になれそうなのですよ」

そして、先鋒・霞

朝から昼まで実に四時間。起きるのを待ったり布団に潜り込んだりしたが、あえなく

「飽きたわ！」

飽きてしまった。

そして、次鋒・程？

「うん、それにしても、気持ちよさそうですね……ZZZ」

そして、今現在に至るわけである

その今現在の状況はというと、程？、白の布団にINTO

今さっきからめがとんぱんちやらめがとんきつくやらが頭をかすめているが、マツタクゼンゼンチットモ気にしていない様子の程？

この状況、事情を知っている人が見ても、ただの百合にしか見えな
いだろう

「……それにしても、寝ますね」

この人に言われたら大概なのだろう

もうすでに日が傾きだしている

「少し、感動すら覚えますよ」

「……誰ですか……」

パツチリくりくりお目目を見開き、程？を見る

はて？こんな異物寝る前にあつたのだろうか？といった顔だ

「風は程？なですよ」

「……なにか、用ですか……」

「いえ、ちょっと既成事実を作りにきただけなのです」

「……」

心が生まれようが生まれまいが白クオリティはどこまでも続く

「お兄さんには下心がないんですか？」

「……下心は恋、真心は愛だと、師匠に教わりました……」

まさに文字通り。しかしここでそのことを言う必要は欠片もない

「そうなのですか」

「……」

不思議そうに目の前の不思議な生物を見る白

「どうしたのですか」

「……あなたは、僕のことをキライではないんですか……」

「

心が生まれてからというもの、他人に自分がどう映っているのかを
多少気にしだしたようだ

あくまで、多少だ

「キライ？キライになる理由がないのですよ？どちらかとい
うと、好きかもしれませんね」

「オイ兄ちゃん！あんま風をからかってやんなよ？」

突然頭の上の人形、宝慧が喋り出す

「……スキ？……」

綺麗に無視を決め込んだ

「さあ？風には分からないのですよ」

「……………そうですか……………」

「と、言う訳で、襲わせていただくんですよ」

「……………襲う？……………なら、自己防衛として反撃せざるを得ません……………」

「そういう意味ではないのですけどね……………」

面白いぐらいに話がかみ合わない

「????……………程？さんは……………『心』とは何だと思いますか……………」

いきなり話題を変える白

「『心』ですか？……………そうですね。無かった方が楽なものですかね」

けど、と付け加える

「あつた方が、楽しいですよ」

につこりと笑う程？

「……………あつた方が、いいですか……………」

「そうですね。あつた方が、いいんじゃないでしょうか。風はなかったことがないので分からないのですがね」

それもそうだ。無かったことがないものに無かった時の事を聞いてもそれは想像でしかない

そこで楽しいことで今までの事を振り返ってみるが、よく分からない白

しきりに頭をかしげている

「……………楽しい事は考えるモノではないですよ？感じるモノです。全身で」

「……………感じる……………」

「そういう訳で、いっぱい感じちゃいましょう」

「……………ありがとうございます……………部屋を片付けるのでいった方がいいかと思います……………」

ガバァっと白を襲う格好をしていた格好で急停止

「……………どうかしましたか……………」

「いえ、ちょっとした体操なのですよ」

「????」

そこから恐るべき速さで掃除と修復をしていく白

程？いわく「お兄さんが分身していたのですよ」だそうだ

それですぐ終わった掃除

「…………まだ、いたんですか…………僕は、捕虜ですよ…………」

そこらへんの事情は忘れていない白

なので1日中寝ていたのだ。途中何やら布団にふくよかな感触が紛れ込んだがあまり記憶にない

「華琳様の命なのでいいですよ」

何を命令されているのか知る由もない

「…………では、おやすみなさい……………」

いそいそと布団にもぐりこむ白

「まだ寝るのですか？」

「…………今さっきは、ごちゃごちゃして寝づらかっただけですから……………」

既にウトウトしだしている白

眠気には誰にも勝てないのだ

「では、お邪魔するですよ」

「…………あの、お邪魔してはいけないような気がするんですけど……………」

「いいですよ。そしてさっさと眠ってください。そして既成事実完成です」

「…………おやすみなさい……………」

目を閉じて3秒。寝息を立て始めた白。現代に居ればのび。に匹敵する才覚の持ち主なのだろう

「ふっふっふっ」…………めがきゃっち……………」ほえ？」

どんな夢を見ているのか、程？に抱きついた

この現場を目撃したものは百合としか思えないだろう

「…………めがばいんど……………」

抱きついたまま離さない

「ふむふむ。…………ZZZ」

最終的に寝ることにした程？

後日

「お兄さんは激しく抱きしめてくれたんですよ」

「そ、それから風の小さな体をこれでもかというほどに凌辱し恥辱にまみれさすブホッ!？」

「????」

「ふっふっふ」

よく分からない白と腹黒い笑みを浮かべた程?、そして幸せそうな顔で気絶している郭嘉の姿があったとさ

さらにそのあと

「で?成功したの?」

「いえ、成功という訳ではなくですね。えっと、どう言うてよいか。まあ、寝ぼけて抱きしめられただけなのですよ」

「そう、失敗した訳ね。今日はお仕置きね。今夜私のへ」遠慮しておくのですよ」そ、そう?」

なにやら落ち込み気味の曹操と腹黒い笑みを浮かべた程?の姿があったとさ

「あ、お兄さん。今度から『風』^{ふう}とよんでください」

「・・・友達ですね・・・」

「???」

最後は軽く、真名を受け渡した風だった

33話：レッツ既成事実（後書き）

この話を書くために、曹操さんに無理やり台詞を言ってもらいました

あ、それと遅れてしまつてすみませんでした

テストがですね、1週間続いていたわけですよ。まあ、その間も何度か投稿していたわけですが

今回は土日頑張りたいなと予定しております

では、次回も宜しくお願いします

34話：勝負だああ！↓いやです（前書き）

タイトル見たら、中身見なくてもいいでしょう

では、どうぞ！

34話：勝負だああ！↓いやです

「なにしているのですか？」

「……空を眺めてます……」

最近毎日、白の元に訪れるようになった風

最初は命令だったが、今は……どうなのだろう？

「楽しいのですか？」

「……暇ですね……」

「そうですか。なら、風も暇ですね」

なぜそうなるのか？その考えが少し頭をよぎったが、面倒になったので思考を停止した

「……郭嘉さんと居たらどうですか？あの人の横にいたら忙しそうですよ……」

いつも鼻血を噴き出している郭嘉

この前など、尋問中にいきなり

「はっ！？まさかそのあと風をその可愛い顔つきで口説き落として、その可愛い顔つきに似合わぬモノで風の肉体を引きさ

いもブホッ!？」

その鼻血をもろに顔面に受けてしまい、悲惨な結果となった

純白の髪が真っ赤つかである

そのあと郭嘉が曹操に可愛らしい子を汚すとはうんぬんかんぬんと説教されていたのを、白は知らない

「稟ちゃんは、面白いですけど、忙しいですから構ってくれないのですよ」

お前は忙しくないのか?という疑問は浮かんですぐ消えた

裏で手回しでもしているだろうというのが、大半の考えだった

「こういう暇なときは、春蘭ちゃんがやってきそうですね。こういうの、フラグって言うんですよね。お兄さんが言っていました」

「・・・フラグ?・・・」

旗?旗がたったからなんだというのだ?世の中不思議で溢れている。そう感じた白だった

「本多あああああ!勝負だあああ!」

扉を勢い良く開けた夏侯惇の姿が

「いやです」

バツサリ切り捨てる白。暇なのは嫌いだ、面倒くさいのはもっと嫌いなのだ

「拒否権は認めん!!」

「・・・リコールを要求する・・・」

「りこーる？何を言っているのだ貴様は！いいからさっさと来い!!」

今にも斬りかかってきそうな夏侯惇

「・・・チツ・・・」

「きつまああああ!!舌打ちしたなあああ!!」

「・・・幻聴です・・・耳まで、かわいそうになりましたか・・・」

「までとはどういうことだ！既にどこかわいそうなみたいではないか!!」

「頭なのですよ」

ここぞと言わんばかり風がつけたす

それを言っちゃあおしまいだ

「い・い・か・ら・こ・い!!」

「…………首元がダルダルになります…………」

首元を捕まえて、実力行使に出た夏侯惇

「だったら歩け！」

「…………いやです…………」

「だったら諦める」

「…………僕が諦めるといつのを諦めてください…………」

「????諦めるのを、諦める？」

やはり、頭がかわいそうであつた。会話が二段構成以上になると追いつけなくなる

「まあいい。来い」

「…………はあ…………」

久しぶりの溜め息

「パシッ」

口の前で手をたたく風

「…………何してるんですか…………」

「お兄さんから逃げた幸せを捕まえたのですよ」

「……ため息は、幸せが逃げたからつくんです……もう、どこかに行ってますよ……」

遠い目で遠くを見つめる白。現実逃避をしているようだ

「フラグの力と言うのは凄いですね。お兄さんが言うには大いなる意思らしいですよ」

風に間違った情報を教えないで。フラグとは作者のエゴです。ご都合主義です

白の遠い眼には旋回している一羽の鳥が見えた

□

□

「やっときたようね?」

調練場らしきところに来ると、魏の武官が勢ぞろいだ。文官は忙しいのだろう、風以外は席をはずしている

なるほど。百合ユリの命令か。その思考にすぐ至る白。

魏に来てから毎日甲高い喘ぎ声が、毎夜響いているのを白は知って

いる

明と同属性と言うのは少しつかめている

明も時々門弟の女弟子とそういうことをしているのを知っているの
で、まあそれなりに知っている

明いわく「可愛いのなら食べない方がもったいない」だそうだ

どうにも一般人とは思考が違うようだ

ならなぜ時々自分を襲っていたのか？そう思ったが大自然の意思が
働き思考がストップした

「最近忙しいから、余興を見せて頂戴？私を楽しませてくれた方
が、今夜たっぷりかわいがってあげるわ」

妖艶な笑みを浮かべる曹操

それにものすごい勢いで食いつく夏侯惇

ここで白の意思が固まる

「では、始め！」

「今夜は、華琳様と共に過ごすんだ！」

「参りました」

開始✓2秒で降参した白

「貴様！なめているのか！」

「・・・勝ちたくない、だから負けたんです・・・」

「へへ。私の誘いを断るの？」

「・・・いやなものはいやなんです。とにかくいやだ・・・」

「

「ず、ずいぶんと毛嫌いされているのね。私……………」

少々落ち込んでしまう曹操

「きにすんなって！俺がいるじゃん！」

「……………公言するものじゃないわよ……………」

「……………種馬……………」

小耳にはさんだ風の噂。天の御使い種馬説。あながち間違いではないようだ

「グッ！おい！本多、勝負しろ！因縁の決着だ！」

今までずっと負け続けたのがかなり来ている夏侯惇

曹操補正はないが、萌える女性はや強いのだ

「……………分かりました……………」

もうどうにでもなれ。諦めた白

「では、行くぞ!」

中途半端な速さではない、一直線に白をめがけて突っ込む夏候惇

しかし、勝負はあっけなく終わる

「……あれ?」

いつの間にか地面に寝ころばされている夏候惇

「……………背負い投げです……………」

柔よく剛を制す。突っ込んできた夏候惇の懷に無駄なく滑りこみ、そのまま投げた

ただ、それだけである。

「……………手堅く、勝たせてもらいました……………」

「クソ!」

「へえ。やるわね?」

しかしこれは相手が油断している時の一回時のみ有効

実戦では、簡単に懷に入らせてくれるはずもない

この場を早々に抜け出したかった白の、仕方がない対応だった

ただ、この場が戦場であつたなら、白は躊躇いなく命を散らせるだろう

友達を護るために

「もう一回だ！」

「……あ、北郷君が曹操さんに変なことを……」

「何！？ほんごおおおおおおおおおおおおおおお！
「！！」

「白！謀つたなああああああああ！……！」

一瞬で彼方へと消えていく二人

「……ミッションコンプリート……」

「お兄さんも中々、腹黒いですね？」

「……いえいえ、お代官様ほどでは……」

最近、白君が迷走していると思う。あらためて言おう。この知識は全て明のせいであると

「ちょ！？春蘭！まじでやばいつて！」

「問答おおおおおおおおお、無用おおおおおおお

34話：勝負だああ！↓いやです（後書き）

どうでしたか？終始迷走しっぱなしの白君です

そして作者は書き始めた瞬間から迷走しています

では、次回も宜しく願います

35話：好き？嫌い？よく分かりません（前書き）

すみません

かたつぽで調子に乗りすぎてました

これからもこちらを見てくださる方に感謝しながら

では、どうぞ！

35話：好き？嫌い？よく分かりません

白、ぶっっちゃけ暇だ

人間、暇と気づくのに結構時間がかかるものである

自分という人間が暇なはず無いと思っているからだろう

大抵の場合、暇ではなく平和と思いこむのだろう

「……………暇だ……………」

平和でも暇だった

別に忙しいうことが好きな訳ではないが、暇なのも好きではない白だった

かといってこれといった趣味もなく、今の現状は捕虜

ただ部屋でじっとしておくだけのはず

「あつそびに來たで〜。びゃっくん！」

我らが戦う関西風美少女、霞様だ。その双山、正に核兵器を超える

「……………霞さん……………」

「なんや暇そうやな〜？いいことするか？」

すすいとすり寄る霞

「・・・月さんたちは、元気ですよ・・・」

話を強引にそらす白

本능がそう叫んだ。このままでは喰われると

「そうかいな？そりゃあ……………ええなあ」

少し前まで己と共にあった仲間との思い出に思いをはせる

既に、思い出となった過去だ。どうしようにもならないのは分かっている

それでも、懐かしく、羨ましく思ってしまう

「なあ、びゃつくん。この乱世が終わったら、皆どうなるんやろうな？不安でしゃあないわ」

「・・・みんな、笑ってるんじゃないですか・・・分かりませんけど・・・」

「……………そうやな。そうおもった方が、ええよな」

「????」

いつもあっけらかんとしている霞のシリアスな部分を覗いた白

「それはそうと、びゃつくん、けーちゃんとうまくやっとなるん？」

あと月と詠とも」

「・・・普通には、暮らせていると思います・・・いや、暮らせていたですね・・・」

「ん？なんか喧嘩でもしたん？」

「・・・僕が――」

ぽつぽつと一つ一つ思い出すように、呉であった事を話したす

そうすると、少し分かってきた。思い出すことによって、楽しいことを感じた

そして、最後の過去の事について

「……そうなんか。やっぱりくんも普通の子供やったって訳やな。大丈夫やって。三人ともびゃくんが錯乱した姿見たぐらいで引いたりせえへん。逆に萌えとるかもな？」

字が違うのはもはや故意であろう

「・・・そうですか・・・」

「それで？びゃくんは好きなことかおらへんのん？」

「・・・スキ？・・・」

昨日もそんな質問を投げかけられたような気がしなくてもない白

生まれてこの方、好きという感情は月詠と明以外に湧いたことがない
もちろん、家族的な意味での好きである。ようするに、恋愛感情は
皆無である

「おらへんの？皆可愛いのに？」

そこは誰でも賛同できる

「・・・よく、分かりません・・・」

「はゝ。一刀とは偉いちがいやな」

「・・・北郷君は、好きな人がいるんですか？・・・」

「ああ。魏の皆全員好きやっていったな」

ようするに種馬最高というわけ

そして陥落できなかったのが、先日の四人

最高のツン、匂？様

鼻血の女王、郭嘉様

不思議少女、風様

そして関西風最近突っ込みの方が多くね？少女、霞様だ

匂？を落とすのは時すでに遅し

郭嘉をどうやって攻めればいいのか分からず断念

上記と同じで風も断念

最初から恋愛感情を間に挟んでいない霞

「最近はなんか夜の仕事も忙しそうやしな」

にやにやしながら言う霞

「……暗殺か何かしているんですか……」

見当違いにもほどがありすぎる白

「はは。ほんまおもしろいやっちゃの」

ばしばしと背中をたたきながら笑う

「……霞さんは、好きな人がいるんですか？……」

「うん、そーやな。びやつくん！とかいってみたりな」

「………ほんッ」

白の頭がオーバーヒートしたようだ

「びゃ、びやつくん？びやつく……………」
「……………ん！！？」

恐ろしいほどに、純情な白だった

「驚いた、びゃつくんにこんな一面があつたなんて」

気絶した白を見下ろしながらにやにやしている霞

「手を出すのも神速。神速の張遼、いつきまーす！」

恐るべき速さで白に襲いかかる霞

神速の能力はこんなふうに使っちゃいけませんよ？

その二人の間に割って入る影が

「だめです。お兄さんは捕虜なんですから」

風様です！

「ええやんええやん、一回ぐらい。減るもんやあらへんし」

「お兄さんとはかく、霞ちゃんは何かがなくなるんじゃないですか？」

それはしよ、ゾゲフンゲフン！？

「だいじよぶ。ん？もしかして心配してくれとん？」

「そうですね。もし敵対した時に、情がうつっちゃとか？」

「……」

霞の顔が一気に曇る

もし、もしも。いや、これは、この現実だけは避けようのない、紛れもない確定事項。

このままいけば、魏と呉は決戦になる。血で血を洗い肉で肉を拭きとり骨で骨を払う、そんな現実

「なめとつたらあかんで？それでも武将や。戦に私情は持ちこまへんわ」

「そうのですか。風は持ちこんでしまいそうですけど」

「そうやるな。あんた作戦立てるときは見かけによらずえげつない策を……ってもちこむんかい!？」

伝家の宝刀ノリツツコミ。

「分からないです。それが、心じゃないんですか？」

「……そやな。思わず、助けてまうかもな」

その笑顔は子を見守る母のようで。

「それはともかく。いっただっきまゝす!」

神速スキルはこんなことに使ってはいけません

「霞？何してるの?」

霸王スキルをあんなことやこんなことに使ってる人見参！

「仕事もしないで、何してるの？」

ハオーラ放出中。はは、オラ、ガツタガタすんぞ！

「いや、孟ちゃん勘弁」

「し・こ・と」

「いえっさー！」

ここで神速スキルを多用するべきではありません。

そして霸王スキルも多用するべきではありません。

「ほら、風も」

「はいは〜い。じゃ、お兄さん」

おもむろに白に近づいてゆき

「…………ちゅ…………」

頬に軽い接吻を

「おやすみのちゅ〜ですよ〜」

「ふふ。妬けるわね？」

「頼まれても華琳様にはしませんよ」

「はいはい。行くわよ」

「いえっさー」

ボタン

残された白はというと

「・・・・・・・・天地魔闘の構え・・・・・・・・」

そのあと天破の構え、アッーーーーー！とか叫んでいたという。嘘である。

そのあと天使の様な寝顔で、時々シーツを変えに来る侍女さん方を、次々と萌え死にさせていき、死体の山を築いて行った。本当である。

35話：好き？嫌い？よく分かりません（後書き）

どうでしたか？

白君の部屋には死体の山が築かれてるそうですよ？

新事実ですね？

もう一度、遅れてしまつてすみませんでした

では、次回も宜しくお願いします

36話…どうしても……（前書き）

やあっ！僕だよ！

すみません！コンクリに頭を打ちつけながらジッポで焼き入れも…
…いや、それは痛いので、更新速度あげるので！お願いします！誰か許して下さい！

ここ数日、ネット上から姿を消しておりました作者でございます
旅行です。これ、一言です。それでも、お知らせなどなく消えたことに関して深いお詫びを申し上げます。

あと、目目。様。第二形態、見てください！

では、どうぞ！

36話…どうしても……

「……いつになったら帰れるんだろう？……」

一人、ポツンと部屋で呟く白。別に不自由をしているわけではない。

ただ、無性に帰りたいのだ。

「……けど……」

しかし、一人の私情で勝手に動いたりしてはいけない。

今までのほほんと過ごしてきたが……。

「……何、してるのかな？……」

呉にいる人を考え、想像する。妄想ともいうかもしれない。

恋と手合わせしている慶亜。強くなるだろう。

孫策、黄蓋、明の三人で飲んだくれている。周瑜の苦勞が忍ばれる。

月、詠、華雄の三人は侍女の仕事をしている。よく笑うようになった。

周泰はミケ（仮称）を追いかけているだろうか？

陸孫は本を読んで悶々としているだろう。

思春は相変わらず仏頂面で孫権につき従っていて、

孫権は王になるために必死に努力している。

時々、こちらをちらりと見て失神している侍女さんがいたが元気だろうか？

それから……………。

呉に思いをはせる白の顔は自然と綻んでいた。

—— ああ、帰りたいなあ ——

バンッ

乱暴に開けられる扉。そこから入ってきたのは、

「なんで私が朝ごはん運ばなきゃなんないのよ！もう！」

ツンデレ、否、ツンツン句？だ。

「どうして侍女の殆どが貧血で倒れてんのよ」

余談ではあるが、白の部屋に来る侍女は次の日、貧血で倒れる。

あくまでも余談だ。気にしないでほしい。

「まさかこの男が侍女を襲って……………きゃあああああ！
？孕まされる！」

男が近づいて孕むのだったら、日本は少子化で悩んでなどいない。

「……………旬？さん？……………」

「話しかけないでよ！」

初めて受ける理不尽。少し動揺する。

「……………怒っているのですか？……………」

「怒ってないわよ！私がいつ怒ったって言うのよ！」

今だが。

「……………すみません……………」

少し落ち込む白。心に浅いひつかき傷を負ったようだった。

「お、落ち込むことないじゃない！」

リアルに落ち込んだ白を見て、結構動揺する。

「……………すみません……………」

「ああもう！」

「……………すみません……………」

「次謝ったらぶっ飛ばすわよ？」

「……すみまコップ!?……」

顔面に湯を投げられた。そこまでは……。

「謝るなっっていったわよね?」

「……すみ……ありがとうございます?……」

匂?の右手に構えられた盥を見て、ギョツとする。

けど、そこでありがとつございまずと言ったら、違う趣味の方に目覚めたのかと……。

「ふんッ!」

「……食事ですか?……」

「そうよ!」

「……ありがとうございます……」

「ふ、ふんッ!?」

そっぱを向いてしまう匂?。その鼻が少し赤かったのは気のせいだろうか?

それから台無しになった湯以外は無事だったのでパクパク食べていると。

「じい……」

痛いほどの視線を感じる。いや、視線で人を殺せるのなら間違いない……。

「……………どうかしましたか……………」

「べ、別になんでもないわよ。……………じい」

「……………（いや、なにかあるんでしょう）……………」

それからしばらくパクパク続けていると普通に食べ終わった。

「……………（ホント、食べ方も女みたい。いや、本当の女！？真性！？）」

「……………」

そう。明の調きよゲフン！？教育によって仕草が女性っぽくなっている白。

白君の性別知らなければ、速攻で告ってゲフンツ！？

「終わったんなら来なさい。華琳様が用あるみたいだから」

「……………何の用でしょうか……………」

「知らないわよ！知るわけないじゃない！」

「……………すみ……………ありがとうございます……………」

「はあ。なんで謝るのよ？そこは「そうですか」で済むじゃない」

「・・・そうですか・・・」

「ああ。ああ。もういいわ行くわよ。あと、それ自分で運びなさいよ」

指さす先には食器。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

たつつつつつつつつつつつつつつつつと間を置いて言った。

部屋↓厨房↓玉座

「あなた、私のモノになりなさい」

不敵に笑み、いつものアレを言い放つ。

「いやです」

「あ、あら？いつもの間は？」

いつもの間さえも置かず即答。

「きつさまあああ！華琳様のお誘いを断るとは何事だああ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・このことです・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ぬおお！放せ秋蘭！あいつのもやしの様な根性をポキッと折つてやる！」

「はあ……。姉者落ちついて」

夏候惇のもやしと言う例えに一言

「……××の一つ覚え……」

白、黒々説ここに！？ないんだなあ。

「まあ、あの子は置いておいて……。どうしてかしら？」

またなんとなくかいうのかしら？と挑発気味に言う曹操。

「……帰りたいです。帰りたいんです。たった全部ひとつのタイセツなんです……」

良い事を言ったがそのあとに「多分」とつけたのがダメだった。

「けど、そう簡単に返すわけにもいかないのよね」

夏候惇に打ち勝つほどの実力。

見方にはしても、敵にはしたくない。

「……僕が弱くなれば……」

手短に言って即、弱くなることができるのは

腕を折る。足を折る。そして……………。

グジュ……………

白の血の様に紅い左眼球に手をつ突っ込み

グヂイ……………

握りつぶした

「……………ッ!？」

白の全身に激痛が奔る。

「ちょ、なにしてるの!？」

「……………これで、弱くなりました。なんなら、両手両足も……………」

「分かったわ!分かったからやめなさい!」

「白、なんでそこまで……………」

「……………そこまで?どこまででもやりますよ……………」

残された右眼球で決意、否、意地を見せる。

「男ってホント馬鹿。誰か、処置してあげなさい」

この間数十秒。曹操、一刀、白以外は時間を止めていた。

「……………血が止まらないんですけど……………」

「後先考えなさいよ」

「あたふたあたふた」↑あたふた

「……………帰して、もらえるでしょうか……………」

「ああもう。そこまでしなくても、ほんの余興みたいなものだったのに。思い通りにならないものね？ 良いに決まってるじゃない」

人質と言っても手を出してはいけない。この手の脅しはしないからこそ効力があると、どこかの戯言遣いさんも言っていた。

「……………ありがとうございます……………」

まだ効力が残っていた匂？ パワー。

「何でお礼なのか分からないけど。いつまで固まっているの？ 動かないなら今 y」『なんでしょう？ 華琳様！』

犬でした。しょうがないよ。だって百合だもの。

「む？ 本多、その眼どうした？」

「びやつくうん！？」

「お、お兄さん？」

「は、はあああ!？」

その他いろいろ、きょーがくのコエ

「とりあえず、医務室に行きなさい。付き添いは、風と霞ね?」

『うーっす』

カルイ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
□ ■・・・・・・・・・・・・・・・・」

□ ■と言って、意識が途絶える白。

「びゃつくん?びゃつくん!」

・

・

・

・

・

・

・

とりあえず自分が魏に来た最初に見た、医務室の天井だった。

右を見やると霞が、左を見やると風がいた。

左を見るととき多少の労力が必要になったが、たいした問題じゃない。

「……………どのくらい、弱くなったんでしょうか？……………」

軽く見積もっても三分の一は衰えていると感じる。

左に死角が出来たということは、そこに死が潜んでいる。

夏侯惇は慣れているみたいだが、如何せん、なつてから数時間と言ったところだろう。

「……………それよりも……………」

この左目にある違和感に手を伸ばしてみると、布生地のような感触が。

「……………眼帯？……………」

左目には眼帯、雪の模様の様な純白の眼帯が。

それにそつと手をあてる。雪の様なのに、暖かい感じがした。

ふとそばで寝ている二人を見ると、所々刺し傷が。もしかして、この二人が？という考えが。

「……………ありがとうございます？……………」

正確に言えば、二人で眼帯を作り始めたのだがすぐにこんがらがり、毛糸の化け物完成。

そのあと来た曹操に指南してもらいながら、紅と白の眼帯を作った。

萌える女の子は熱いのだ。

「……………」ありがとう……………」

そして、深い、ふかーい眠りについた。

その時の白の顔は、例えようもなく、例えられる筈もなく、美しかった。

36話…どうしても……（後書き）

どうでしたか？

第二形態『眼帯装備バージョン』です。

取り返しがつかないんですけどね！

ま、萌えればそれでいいのだ。

では、次回も宜しくお願いします

37話・ばいばい（前書き）

遅れてすみません

春休みだったのに、部活が・・・

では、どうぞ！

37話・ばいばい

ゴソゴソ……

「……じい？……」

モフ ポフポフ

「……じい？……」

プニ……

「……プニ？……」

「う、うん……。あ、お兄さん、おはようございます」

「……おはようございます……」

風だった。あれ？風だった？

「……な、なんで居るんですか？……」

「いちゃダメダメですか？」

「……普通はだめなんじゃ……」

「じゃあ、普通じゃなくていいのですよ〜」

にやりと笑う風。あくどくあくどく笑った。

「では、このまま二回戦にしゃ」「……はい？」「……」「う、嘘なのですよ？怖い顔はやめてください」

目が虚ろになっただけで、殺意をこもった眼をしたわけではない。

「……起きましょう……」

「えゝ？もうちょっと一緒なのがいいですよー」

「……朝ですので……」

「……帰っちゃうですか？」

「……はい……」

「……そうですね。残念ですよ」

「……お世話になりました……」

「そうですね。少し、寂しいですよ」

俯いてしまう風。

「……サビシイ？それは、カナシイですか？……」

「はい。悲しいし、哀しいですよ」

喜怒哀楽。人間を構成する感情の代表。

「・・・だったら、サビシイはイタイですね・・・」

「ええ、こちら辺が……」

胸のあたりをポンポンと叩く風。

そこでまたにやりと笑う。なにやら思いついたようだ。

「……お兄さん。……風、泣くかもですよ？」

「・・・う・・・」

少し後ずさる白。

「泣いて喚いて叫んで、哀しさをいっぱい訴えかけますよ？」

「・・・うう・・・」

更に後ずさる白。

「……それでも、帰っちゃいますか？」

「・・・ううう！・・・」

頭を抱え出す白。

カナシイ事はいやだ。イヤだからこそ見たくない。

だからこそ悩む。けど帰りたい。

「……………うううう！……………」

「……………冗談ですよ。だから、辛そうな顔はやめてください？」

「……………うう……………」

嘘三割、本気七割といったところだろうか？

それに白もすすすす気づいている。

「ささ、準備しましょー？」

「……………うう、はい……………」

その時の白の顔は何とも言えない顔をしていた。

「ただ……………これを、受け取ってください」

「……………」

いつになく真剣な顔の風。

そのまま白の前に歩いていく。並ぶとそれなりの身長差が……………。

「ん、少しかがんでもらえますか？」

「……………はい……………」

少し疑問に思いながらも要求に応じる白。

そのまま少しかがむと、そのまま……。

「……ちゅ」

「……………?……………?……………ツ!？」

理解するのに若干のタイムラグが生じた。

「続きはまた今度なのですよ」

「……………つ、続きって……………」

ほっぺ? いやいや、まうすとうーまうすですよ。

俗にいう、ふぁーすときっすですよ。

唇に手をやる白。それは唇を奪われた乙女のように……。

「……………は、破廉恥ですよ?……………」

「クスクス。ホント、お兄さんは女の子より女の子してますね?」

「……………女の子より女の子?……………」

真剣にその言葉について悩みだす白。

あごに手を当て、何度も首をかしげている。言っておくが白はバカ

ではない。天然なのだ。

「真剣に考えることではないのですよ？」

「・・・そうですか・・・」

「今、華琳様が出立のの準備を手配してくださってます。それが終わるまでもうちょっとだけゆっくりするのでですよ」

「・・・はい・・・」

そして風の腰かけていたベッドの横に腰かける白。今までのことで悔いが残らないように、ゆっくりと話した。

□

□

そのころ呉

「むむ！？白が女といちゃついている気がする」

頭の上にアンテナ（髪）がピコンと立つ慶亜。

「わ、私もビビって来ました」

魏の方向をグワッと見る月。

「ボ、ボクも何だかわからないけどそんな気がする」

ツンデレーダー発動中の詠。

知っていたらどうか？世の中確実なことと言えば

果汁100%と男がエロいということと女の勘ぐらいなものである

『……………はあ』

「つかまえた」

みんなのおねいさん、明登場。今日もアホ毛がキュートだ。

「何をですか？」

ぐでーっとしながら慶垂。

「君たちから逃げ出した幸せ」

「違うわよ明」

こちらもぐでーっとしながら詠。

「ん？なにが？」

「幸せが逃げるからため息をしているんじゃない」

「幸せが逃げだしたからため息をついているんです」
びやく

『……………はあ』

「そんな君たちに朗報だ。我が精鋭2名が、魏内部の情報を探ったところ……………」

精鋭2名とはまさしくあの二人のことである。

趣味が外資を管理することしかないあの二人である。

あえて名前は伏せておくことにする。

「もうすぐ白君が帰ってくるよ」

シニカルに笑う明。明自身も嬉しくてたまらない。

『……………え！？』

理解するのに時間がかかる。正直今だに信じ切れていない様子。

「それは本当かしら？」

どこからか孫策。

「ふむ、よいことじゃ」

どこからか黄蓋。

「よかった。もうすぐ侍女たちが魏に特攻を仕掛けるところだったわ」

どこからか周瑜。

「それは本当か!？」

どこで聞いたのか分からないが、窓から入ってきた華雄。

「……ほんと？」

つつこものはやめたいがいやしかし。大鷲につかまってやってきた恋+ねね。

「……本当か？」

クーデレこと思春。主を置き去りにし登場。

「ちょ、置いてかないでよ思春」

クーデレ? デレデレ? ツンデレ? 見る人によって姿を変える主様。

「わーい! 白帰ってくるんだあ!」

何故か机の下から登場、小蓮。

「眼鏡の借りは必ず返す!」

意味不明なことをつぶやきながら眼鏡から登場した亞莎。

「ほへへ、そうなんですか」

たゆんつたゆんつ、呉の実り、陸孫。

「……君たちどこで聞きつけた？」

『……………テヘ』

白の帰還の知らせで、自然と、本当に自然とみんなの顔が、綻んだ。

□ □

「どうしても、残る気はない？」

玉座の間にて曹操と白が向き合う。

曹操の最後の勧誘である。奸雄だけに……………スベった。

「……答えは、分かっているでしょう？……」

「……そうだったわね。愚問だったわ」

「……お世話に、なりました……」

甲斐甲斐しく頭を下げる白。

「そうね、別に頼み込まなくてもいいわ。今度の戦で勝利を収めれば万事解決じゃない」

当たり前のように言う曹操。当たり前ではないのだが。

「……無理です……」

「あら？どうしてかしら？」

「……呉が、勝つからです……」

霸王に正面切って言い放った白。曹操の方はというと。

「……くくく、くはははははははは！愉快だわ！非常に愉快よ！」

高笑いをしておりましたとき。

「この霸王に勝利宣言？前代未聞空前絶後荒唐無稽だわ！けど、なんでこんなにも愉快なのかしら？まあいいわ。その挑戦、しっかりと胸にとどめておくわ。ひねりつぶしてあげる」

「……そうですか……」

どちらも引く気はない様子。当たり前だ。

「……白。正々堂々だ。俺は、コイツらに天下を取らせたい」

「……僕は、呉のみなさんに、天下を取らせたいです……」

「なら、手抜きは、なしだからな？」

「・・・当たり前です・・・」

不敵に笑う白。

「なら、いいんだ。まあ、戦争が終わったら、飯でも一緒に食おう」

「・・・そうですね。及川君も、いればいいんですけど・・・」

「及川か。懐かしい名前だな」

現代に思いをはせる二人。及川のボケや及川のボケ。さらに及川のボケ。

めくるめく及川のボケ。すばらしき及川のボケ。及川たるぼく（ry

「ゲフンゲフン。まあ、負けないさ。なんせ、俺が居るからな！」

堂々と胸を張り言い放つ一刀。

周りはドン引きだ。引きすぎてかすんで見えなくなっている。

「・・・臭いことを言つと、みんながいるから負けません・・・」

臭かった。これにもドン引きなみなさん。すでに見えない。

「ふ、風は、そんなお兄さんのこと引いたりしませんよ」

白にすすつと近づいてくる風。愛されてるな。」

「はあ、準備はできているわよ。いつでも出て行きなさい」

「…………はい…………」

一同に背を向ける白。そのまま去ろうとすると

「お兄さん。死んじゃ、ダメダメですよ？」

「…………僕は、不死身ですから…………」

…………白なりの、冗句だったんだ。けど、似合ってたんだ。カッコよかったんだ。それだけ。

「…………では、次は、戦争が終わったところに…………」

その場を後にする。

その背中に向けられる視線は

友愛・不遜・不敵・馬鹿そして、好意

その他にも、侍女さんたちの視線が突き刺さっていたのは余談である。

「 16 16 」

37話・ばいばい（後書き）

断じて最終回ではありませんよ？

では、次回も宜しく願いします

38話：開始（前書き）

え、影響を受けたわけじゃないんだから！ある小説の影響を受けたわけじゃないんだから

いや！？そんな目でみないで！？そんな目でみないでください！

やってみたかったんだ！ドキドキしてやった。後悔はしてない。

では、どうぞ！

38話：開始

魏から呉へ。その道中は過酷でもなく楽でもなく、普通の旅となった。

白としては、呉に帰りたかったが、風は帰ってほしくないといった。それが意味するところとしては、そういうことなのだろう。白に聞
しては、そのことに気づいている様子はないようなのだが。

「・・・白斗、休憩しますか・・・」

フルウウ……

純白の白馬に跨る天女。見る人からみればそう見えるだろう。

糧食は十分にある。乾燥されたものばかりで味気がないといえは味
気がないのだが。

「・・・硬い・・・」

そう思いながらも、麻袋の中に手をつ込み、乾物を取り出す。

それを一つ口に入れたところで思い出した。

「・・・かばん、どこに行ったんだろう?・・・」

いくら考えても思い出す事が出来ない。よく考えれば持ってきてい

なかったのかもしれないな、と思い直しまた麻袋に手をつ込む。

白斗は地面に生えている草を食べた。

空を見上げる。まだ昼間だ。いや、昼前だ。今日は早めの休憩を取ったため、これからが長いなど、少し気だるくなりながらも、呉への歩を止めない白。

何故か分からないが、早く帰りたいのだ。どうしようもなく帰りたいのだ。

そうしてまた。

「・・・さあ、行きましょう。白斗・・・」

フルウウウ……

呉への道のりを歩きだす白であった。

□

□

「遅いわね、あいつ」

「まあまあ詠ちゃん。魏は遠いんだし、時間はかかるよ」

「大丈夫ですよ詠さん。それよりも早く準備しましょう。」

この三人、いや、呉の将兵が企画する一大イベント。

白の帰還祝いである。

黄蓋や孫策は酒を用意し。

周泰は猫に色々調教し。

思春は何故か武器の手入れをし。

恋はいつも通り寝ている。

その他の将兵たちも急いで準備する。何故か判らないが侍女たちも仕事そっちのけで準備している。

人間の努力の方向性はくだらない事こそほど、よく向けられるのだろ。例えば、数年ぶりに折った紙飛行機がよく飛ぶものだから、そのあと数時間紙飛行機を折り続けた作者のように……。

とまあ、白歓迎の準備は着々と進んでいる。

時々、ねねと小蓮の二人がじゃれあって作業を遅らせるというハプニングが起きているが異常はない筈だ。

「こんな準備しなくても、女の子全員裸で迎えてやったら、白君も男の子らしくなるんじゃないかな？」

少し準備がめんどくさくなってきたようで、明がそんなことを呟く。

それに反応したのは6人！

「は、ハダカ……へう」

自分の裸とそこに居る白の姿を想像したのだろうか、顔を真っ赤にする月。

「そ、そんな馬鹿なことしないわよ！」

そう言いつつも、ありなんじゃないか？と思ってしまった自己嫌悪に浸りそうになる詠。

「……胸、ない」

胸はなくなる。周りが大きすぎるだけ。慶亜。

「そ、そんなことができるわけ……」

いつものクールな感じを少し砕き、思春。

「……恋が、はだか」

ぽわーっと覚醒前の頭でそんなことを考える恋。

「め、眼鏡のお礼として……」

全ての事象は眼鏡に通じる。亞莎。

「冗談だよ冗談。ま、したい人がいるってんなら、好きにしていけどね？」

六人の方がびくと揺れる。それを見てにやにや笑う明。

「あれれ？裸になりたい変態ちゃんがいるのかな？ん、どうだろう？」

そこで恋が

「……………恋、変態でもいいから、ぬぐー！」

衝撃発言であつた。空前絶後すぎる発言であつた。

「恋ちゃん、冗談だから。あたしの軽い冗談だから。だから考えなおして？」

「……………分かつた」

「ふう」

とりあえず落ちつく明たち。そう、明たちは落ち着いた。

それを真に受けた侍女^{バカ}たちがいたのだった。

そしてここからは洛陽から白の事を知る侍女長の演説

「諸君 私は白様が好きだ
諸君 私は白様が大好きだ

眠たげな白様が好きだ
虚ろな白様が好きだ
無表情な白様が好きだ
本を読んでいる白様が好きだ
白髪の白様が好きだ
紅眼の白様が好きだ
女顔の白様が好きだ

本屋で 食堂で
窓際で 布団で
木陰で 月下で
陽光で 湖畔で
部屋で 草原で

この世界でたった一人しかおられない白様が大好きだ

本屋で無表情になりながらもちゃんと本を読んでおられる目が好きだ

読書中に時々見せる「クスッ」などの笑いを見た時は心が躍る

窓際で憂鬱そうな表情で夕焼けに染まる白髪が好きだ
そのまま寝てしまわれて「くしゅん」とくしゃみをした時などは
胸がすくような思いだった

湖畔で釣りをして一匹も釣れずに悔しそうにしている横顔が好きだ
そのまま諦めきれず釣りを続行し釣れた時「やった」と言われた
時の表情は感動すら覚える

平原で幾百の敵をなぎ倒す雄姿が好きだ
多くの敵を葬り去り「『邪魔』です、どいてください」などと言
われるのは最高だ

布団で寝像が悪く何度も布団をかけなおすうち時折見せる生肌が
好きだ

そのまま好機と思い布団にもぐりこみ横で「好き」などと言われ
た時など絶頂すら覚える

あのほっそりとした腕で滅茶苦茶にされるのが大好きだ
あの美しい尊顔が苦痛に歪む様はととても悲しいものだ

あの美しい顔で罵られるのが好きだ
文武官様方の凄まじき美貌に負けるのは屈辱の極みだ

諸君、私は白様を、天女のような白様を望んでいる
諸君、私につき従う侍女諸君
君たちは一体何を望んでいる？

更なる白様を望むか？

虚ろで無表情で情け容赦ない冷酷な白様を望むか？

多くの経験を経て感情をむき出しにする温かな白様を望むか？

『白様！白様！白様！』

よろしいならば 白様だ

我々は渾身の忠節を以って今まさに礼儀を尽くさんとする侍女だ
だがこの日の眼を見ない脇役で数カ月もの間耐え続けてきた我々
にただの白様では最早足りない

萌白様を！

一心不乱の萌白様を！！

我らはわずかに一個中隊 百人に満たぬただの売れ残りだ
だが諸君らは一騎当千の萌侍女^{メイド}だと私は信仰している

ならば我らは諸君と私で総力10万萌えと1000萌えの軍集団
となる

我々を邪険なく扱って下さった白様を取り戻そう

髪のをなで頬を撫で目線を通じ合い母性を感じさせよう

白様に母の味を思い出させてさしあげる

白様に我々の萌えの価値を刻み込んで差し上げる

侍女服と靴下のはざま（絶対領域）には白様の認識を超える萌えがあることを刻み込む

百人の萌え萌え侍女の裸姿で

白様の心を萌やし尽くしてさしあげる

最後の侍女総指揮官より全侍女へ

目標白様帰国後の門前！！

第一次白様萌え萌え作戦 状況を開始せよ

征くぞ 諸君

「させないよ？」

侍女長の頭が明によつて掴まれる

「結構欲求不満なようだね？顔もいいし、今夜から3人ずつ相手してあげるよ。まずは、君たち3人ね」

そつして侍女たちによる一世一代の暴拳は阻止されたのだった

□

□

「ッ!？」

ぞくつとした方を見る。それはもちろん呉の方向だ。

既に、呉の城壁が見えてきた。呉を離れた時は記憶があまりない白。

久しぶり過ぎる感覚だ。

「・・・なんだったのでしょうか?・・・」

白にとっては凄まじき貞操の危機だ。多分あたふたとしているうちに食べられてしまうことだろう。

もちろん、あっちな意味でだ。

「・・・さあ、行きましょう。白斗も、灰にアイタイでしょう?・・・」

フルウウウウ!

一気に駆け出す白斗。その速さは赤兎馬にも負けない速さであろう。

そして、門前に着く。

ゆっくりと門が開き……

そこには、呉の将兵全ての姿が

将兵のしていた準備とは、今日すべきこと全てだ。今日の宴のために仕事全てを急ピッチで終わらせたのだ。

『おかえり』

「……ただいま、です……」

にこやかに白が笑った

□

□

「これより、天の御使い本多白の、帰還祝いを開始する。まあ、かたつくるしいのは抜きにして」

杯を構え高く

『乾杯』

大宴会が始まった

湧きおこる雑踏。それに対し当の本人は

「・・・・・・・・？・・・・・・・・」

状況が理解できずにいた。何故宴なのだろう？なにか、めでたいことでもあったのだろうか？

それに関しては、最初に自分の名前が呼ばれたことについては全然気づいていない様子。

常に周りをキョロキョロと窺っている。

「白、お帰り」

「お、お帰りなさい」

「べ、別に待ってなんかいらないんだからね？ホントなんだから」

「……………白、おかえり」

「フ、よく帰ってこれたな」

「眼鏡のお礼、まだしてなかったですから」

この6人により、さらに混乱の極地へと誘われる。

さあ、お気づきの人もいるだろうが、眼帯についてまったくもって触れられていない。

「ねえねえ、白」

ここで小蓮が

「なんで眼帯してんの？」

『ピクッ』

6人の肩が揺れた。

「……自分で目を握りつぶしましたから。そのあと、風さんと霞さんが作ってくれました……」

『ピクピクッ』

こめかみがピクピクし、目も泳ぎ出す6人。

出てきたのは女の名前。男と言う可能性もないのだが、それはないだろうと。

「ん？なにしてんの？無礼講だよ？じゃんじゃん飲まなきゃ」

ごくごく口を酒を含み、そして

「ッ!??」

口移しだ。周りの将たちも動きが止まる。

「ひつく。白君のふぁーすときすいただき。お母さんとしての務めだねこりゃ」

そう、違うのだ。既に白は……。

「……せかんどだと……」

酒がまわり朦朧とした意識の中答える。

『な ん だ と!?!』

せかんどという言葉は分からないが流れ的に2番目だと分かったのだろう。

「それはどういうことだ!」

「ど、どういふことなんですか白さん?」

「見損なつたぞ白!お前も変態ほんごうの仲間だったのか!?

「……どーゆーこと?」

「やはり男はみな、変態なのか……」

「私の眼鏡に狂いはなかったと思っていたのに!？」

「……?…………おや…………す…………み…………」

そして、白の意識は酒の底に落ちて行った

『白、お茶にしましょうか』

がばッ

いきなり布団から飛び起きる白。

あたりをキョロキョロ見て

「・・・・・・・・夢、か・・・・・・・・」

月詠が夢に出てきた。魏にいたころは見なかったのだが、これは、運命なのだろうか？

「・・・・・・・・お母さん。ただいま・・・・・・・・」

虚空に向かって挨拶をする。そのあと魏であったことをぼつぽつと語りだし、涙を零した。

ああ、これが、『心』か……。そう思いながら、胸に手をやる。

「・・・・・・・・ここにへん・・・・・・・・」

風に言われたあたりに手をやり、考える。

母の顔。母の声。全ては遠き幻想だ。いつかはそれを振り払わねばならない時が来るだろう。

子は親よりも強く、それが親の願い。ごくありふれた思い。

「……イタイ、ですね。けど……」

『苦しく、無いです』

窓の外に目をやる。何もかもが懐かしく見える。

生まれた時からここに居るような気がしてならない。だから、こう言うのだろっ……。

「……ただいま……」

こうして、白は呉へと戻り、仲間たちと、ゆっくりとしかし確かに、前進を開始した。

38話：開始（後書き）

どうでしたか？内容に触れないで下さいと言いたいですが、それじや書いた意味が……。

あえて言おう！あの人の二次創作に影響を受けたと！

全ては私のインスピレーションのひもじさゆえの行動です

なにとぞお許しを……

次回も見てくださいれば幸いですよー

39話：陽炎稻妻水の月（前書き）

皆さま、遅れてすみません。もう、理由を言うのは、やめた……。

ぼくはみんなが大好きだ！

僕は、どの小説もあきらめない！

今回は、白君が強いお！

ふわありい、ふわありい——ぴたり。

では、どうぞ！

39話：陽炎稻妻水の月

「白！死合うぞ！」

「……文字が、違います……」

思春が白に、レッツ死合い。

事の顛末は、機能、白が気絶してからのこと。

「……私の、見込み違いだったか」

白が誰かと接吻（まあ、既に明に奪われていると思っていたが）したのを聞いて、激しく落ち込む6人。

「……ほんごう変態エ……」

「……へう……」

「……下種……」

「……白」

「……眼鏡エ……」

「……ふう」

一名ほど、何故自分が落ち込んでいるのか分からない人物がいた。

思春である。

何故自分が落ち込まなければならぬ？ 一個人として武に感心を抱いていただけのはずなのに。

「……死合つか」

元から仕合ではなく、死合。

冷静とはいえ、思春も武人。戦の中で我を見失うほどの戦闘^{せんとう}狂ほどではないが、武を交える爽快感を知っている武人だ。

そろそろ、魏との最終決戦。知らなくても分かる。

このもやもやした気分のまま、戦には赴くことなどできない。

「……しかし、何故だろう？」

結局、そのまま分らないまま、酒をちびちび煽る。

「……何だろうな」

他の五人が激しく落ち込んでいるのを、アルコールが程良く回った顔を向ける。

「……（好き、か）」

孫権に対しての感情はもちろん、忠誠心のほかにも好意の感情も含まれている。

しかし、これは、そういう好意ではなく……。

そこまでの思考に至ると、自然と思春の顔が赤くなってゆく……。

「（何だ？これは）」

……よく、分からないのだった。

そして冒頭。

「……いいから死合え」

「……僕、戦線離脱につき代理を求めます……」

「……いやか？」

天然上目づかい発動。白のところが揺り動、かない。

「……いやです……」

「そう……か」

明らかに落ち込む思春。それをみた白は

「……えつと……えつと……」

葛藤する白。天然ロボットダンス。

「……かわいい」

ボソツという思春。

「・・・分かりました。仕合ならいいですよ・・・」

「????最初から言っているだろう?」

「・・・そうですね・・・」

ここで一抹の不安がよぎる。

この世界の武将は仕合で真剣を使う、アヒイツ!?状態だ。

さらに手加減というものを知らず、首を切ったら「ア、ゴメーン」的なノリだ。

さらにさらに、白の左目は死角。まあ、白も本気?を出したことはないが。

細かく言うと、出せない。この掌術は殺しにベクトルが向いている。

相手に見つけられる前に、認識される前に、殺す。

まあ、1対1であれば、かなり強いが。明は規格外的存在だ。

場所は移り、調練場。

「……やるぞ」

「・・・はい・・・」

開始の合図を待たず思春が駆ける。それに合わせるように白の下段蹴り。

それを事も無げに避け、曲刀を振る。

体を捻り、避けと同時に蹴りを放つ。

「ふッ」

それを屈み、思春の足払い。それをバックステップで距離をとる。

両者、対峙す。

白は常に自分の死角を気にしながら戦う。

精神疲労も並ではない。

「・・・『陽炎稲妻水の月』・・・」

白の、本気である。最凶と謳われる由縁。

それは……。

「……いなくなった？」

認識されなくなることだった。もちろん、超人的な能力、超能力というわけではない。

盲点。網膜の機能上見えない部分。それに潜り込み続ける。相手

の首、体、眼、全ての動きに合わせて動く。

それには、多大な洞察力、集中、観察、色々な視点に入り、それを観察する。

そして、完成。まあ、見えないだけで、普通は気配などを気取られるわけだが。」

そこは『風林火蔭山雷』。林と蔭でカバーするわけだ。

「クッ!？」

とりあえず、曲刀を手当たり次第に振り回す。

「ねえ、明。思春は何をしてるの？」

この勝負を盗み見る、孫策と明。ニシシッ!である。

「ふうん。白君使えるようになったんだ。へえ」

「???」

「あたしでも使えないのに……。ははッ!お母さん嬉しいぜ!」

それでも明が、孤高で孤誇で孤狼なのは変わらない。

それらの業。それらの力。それらの心。全て、明は飲み込む。

ただただ笑い、ただただへし折る。

笑えば終焉、歩けば終着、後ろ姿は終決凶喜。

本多明とは、そんなモノである。

まあ、戦闘の話に戻すでしょう。

思春はいまだに白を見つけれない。白は思春を狙っている……はず。多分。

体力、精神力とは無限か？答えは、否だ

「はッ、はッ、はッ、ッは！……クッ」

そこで不意に後ろから

「……いきます……」

その声に反応し振りかえる。一瞬だけ白髪がちらりと見え、それに追いつがる。

勢いよく振られた剣は、空を切った。

白は既に、戦いを終わらせている。

胸、人中、頸動脈、頸椎、眉間、眼。

今の白であれば、このうちのどれでも好きに破壊できる。

この業を破ろうとするならば、天性の勘、野性的本能が必要、というわけでもない。

攻撃が当たった瞬間、致命傷を与えられる前に、よけたり、掴んだりすればいいだけのことだ。

それには、インパルス神経伝達速度が、まさに神でなければならぬが。

まあ、この日の白は。

「クツ……キャツ!？」

「……………僕の勝ちでいいですか?……………」

思春に押しをかけ、宙に浮かせた後、所謂お姫様だっこだ。

「あ、ああ………」

「……………?……………」

頬を赤らめる思春。分からない白。

「お、お、おろしてくれないか?は、恥ずかしいんだ」

「……………はい……………」

地面にゆっくりおろす。おろされた思春は腰が抜けて動けない。

「……………大丈夫ですか……………」

手を伸ばす白。

「す、すまない……」

そのとき、思春におおいかぶさるようにして、倒れこむ。

ぱさッ……。

パリン……。

メガネエ……。

メキィ……。

ホウゴウエ……。

偶然、資料を運んでいた月。

偶然、皿を運んでいた詠。

偶然、報告がありその場を通った亞莎。

偶然、木に腰かけて昼寝をしていた恋。

偶然、塀の後ろで背伸びをして覗いていた慶亜。

「ど、どどどどどど、どうしたんだ？白？」

「……すみ……ませ……」

白の意識が途切れ、全体重が思春にかかる。

思春よりも大きな体で、身動きが取れない。

あうあうと、何かが目覚めそうで目覚めない思春。

そこで、この萌死を救ったのが。

「おつかれ、白君」

明だ。白をひょいと肩に背負う。

「まあ、まだまだ体力の方が持たないみたいだけど、上出来、いや、完璧に近いよ」

体力精神力に多大な過負荷をかける。

一対一では最強だが、一対多ともなると、まったくもって意味を成さない技、いや業。

「思春ちゃんも、上々だね。冷静さを欠いたのがいけなかったけど」

淡々と、戦闘の評価を下していく。

「それに、いつもよりコーフンしてたよね？」

「う、うるさいッ！？わ、私は興奮など」

「今してるし」

「うっ！」

唸り声から少しの沈黙。それから一つ、息をつき。

「……分からなかった。だが、もう分かった」

「へえ。ま、それも答えだよ。子供はね、そうだね、二人ぐらいがちょうどいいよ」にやにをいつているッ!？」

「にやにもいつてないよ」

「~~~~~ッ!？」

「.....し.....しょ?.....」

酷く憔悴している白。本気には本気。

「今は休んだ方がいいよ」

優しく、微笑みかける。

「.....はい.....」

再び眠りに落ちる。その時一言

「.....お姉さん.....」

「.....へへッ!」

「???」

これで、勝負は終わった。

『思春』 『思春さん』 『思春』 『思春殿』 『思春...さん』

……女の子の戦いは、これからだったりした。

39話：陽炎稲妻水の月（後書き）

ふう、疲れたよ……まあ、書いてて楽しかったけど！

感想ご指摘ご批判等々、全てを受け入れる所存でございます

では、次回も宜しく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9514p/>

虚しい心～恋姫†無双～

2011年5月10日03時50分発行